

わいふ

特集◆父親としてのわが夫

●文字に興味なかった子のその後

●私は国勢調査員

投稿誌

読んで書いて、みんなで作る



287

超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

只今
「わいふ」読者に
おすすめ中
「わいふ」編集部

電話でしっかり「わかるまで」サポート



受講料は下記のとおりです

- パソコン基礎コース3か月間【29,000円】
インターネットを含み通りパソコン基礎知識が身につきます。
- インターネットスタートコース2か月間【20,000円】
インターネットと電子メールが使えるようになります。
- ビジネスソフトスタートコース2か月間【15,500円】
文書作成と表計算の基礎が身につきます。
- パソコン基礎・応用コース6か月間【64,000円】
インターネットから、ワード、エクセルといったビジネスソフトまで、仕事に役立てることを目的としたコース。
- 「どのパソコンを買ったらいいのかわからない」という方のために、選び方のご相談にも応じます。配達から設置、設定、カラープリンタ、インターネット6か月間使い放題のサービスまで、とびきりお得なパソコンセットも販売しています。

お問い合わせは0120-011-890

パソコンを本気で覚えたい「わいふ」読者のために、編集部ではパソコンの初心者教育で定評のある「クラブネット講座」をおすすめします。

パソコンの専門用語をほとんど使わないで作り上げたオリジナルテキスト、手順どおりに進めれば誰でもできるようになります。しかも「通信教育」なので、居ながらにして覚えられ、分からないところは回数制限なしに電話で質問できます。分かるまで懇切にねいにサポートしてもらえます。携帯電話もインターネット、メールの時代。パソコンを覚えれば、あなたの世界は無限に広がります。再就職にもぜひ必要！

●年賀状をパソコンで作る無料講習会

二〇〇〇年十二月八日と九日に、秋葉原のラプラス内アカデミーサイトにおいて、PM 一五時までに「年賀状の作り方講習会」を無料で開催いたします。一日参加なされば、ご自分の作った年賀状を必ずお持ち帰りになれます。パソコンが初めての方でも大丈夫。安心しておいでください。

講座内容、会場についてのお問い合わせは0120-011-890
お申し込みは「わいふ」編集部へTEL 03-3336-0477
各回共十名限定の募集です。お早め！

■お問い合わせ・資料請求は

Club Net

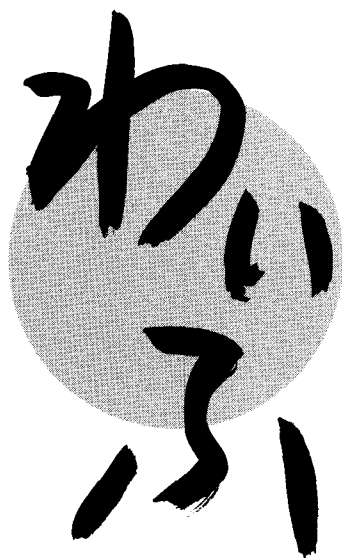
〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10

株式会社アイデックス

「クラブネット事業部・わいふ係」

初級者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066



「わいふ」を読む
「わいふ」に書く
あなたの人生が開ける

わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

287号

目次

デザイン／宮塚真由美
題字／石渡希和子
表紙イラスト／箕輪絵衣子

イラスト／ 荒田ゆり子
イシノフミ 小沢恵子
カステラネンコ 栗田笑
弘法堂建二 小林正子
佐藤瑞江子 田沼千恵
西宮さき 橋本美智子 渡辺美帆

4 わが家の歴史写真

祖母が歩んだ人生を思う

東京都八王子市 甘利てる代さん

写真提供・文／甘利てる代

特集 父親としてのわが夫

夜中の花火がきつかけで クズルカヤ恵美

最高の父親、最低の夫 ゴル

心の中でメール 浅川涼子

お父さんは？ 坂本真弓

満点パパがやって来た 宮崎宏美

25 楽しく、そして真剣に 伊藤央子

74

連載4
リラの花 桜の花 浅野素女

私の意見・あなたの意見

伊藤琴子

90

座談会 私も言いたい

困りものの母親

井上香奈子・沢木 楓・早乙女光子

100

フリートーク

林 夏子・高梨陽子・三枝きよみ・花岡京子
藤池弘子・浅田節子

連載2

嫌疑 野村浩子

120

コミック これが子供の生きる道 19 栗田 笑

124

子育てフォーラム ●NMSのページ●
矢島紗恵・杉田みほ・十河温子

28	超子煩惱の夫	三田サキ
31	だんだん「父親」になっていく	新井純子
37	典型的日本の夫？	匿名

41
読んでよかった
斉藤きよみ

42
エッセイスト・クラブ
福島みさを・大沢陽子

私は国勢調査員
浅野まどか

54
あなたへスマツシュ
匿名・匿名・麦穂・布施幸子・高松恭子・横山のり子

61
一筆両断 19
西田淑子

文字に興味が
なかつた子のその後

松本とみよ

67
読んでよかった
伊藤史子

68
ワーキングライフ
匿名・隅田美幸

130
生の束縛、死の安らぎ
山田恵子

136
後藤 晶
パソコンワールド

138
ブック情報

140
私もひよ

土子史子・伊藤てる子・島村君子・齊藤きよみ
石井しのぶ・森 菜美・加藤智恵子・横山のり子
トト安田・大原清子・小笠原安紀子

142
コミック
毎日が平日
海砂

144
情報コーナー

スタッフから	147	わいふインフォメーション	148
募集します	149	投稿のきまり	150
編集日より	152		
お友達にわいふを	99	バックナンバー	113

東京都八王子市

甘利てる代さん

祖母が歩んだ 人生を思う



私（20歳）と祖母（70代）



祖母（88歳）
母、兄、兄の子どもたちと

いまから十五年ほど前、三人の子どもを三年間隔でもうけた私は、子育ての真っ最中だった。そのころ、静岡県沼津市の実家で、久しぶりに会った祖母はすっかり痴呆が重くなっていた。私の母親は痴呆の祖母をたった一人で介護し続けて、四年ほど経過していたように記憶している。まだ介護保険制度どころか、デイサービスもショートステイもホームヘルプサービスも無かった。

痴呆が軽かった時期には、足腰が丈夫な祖母はよく徘徊した。その頃は母屋で暮らしていたため、時には一階の窓から飛び降りてどこかに行ってしまう。探し回るのは母親。食事介助、おむつの洗濯、入浴などすべて母親の手に委ねられていた。やがて痴呆が重くなり、排泄が自分でできなくなったことをきっかけに離れを病室に移らえて移った。母親も祖母の隣の部屋で寝起きするようになった。文字通り二十四時間三百六十五日を介護した。

九十二歳で祖母は逝った。最後のころ、母親は祖母の異変にいつでも対応できる

ように、就寝時は布団を並べ手首と手首を腰ひもで結んで休んだという。

祖母の名は「その」。二十一歳で同じ村の農家の長男に嫁ぎ、三人の男子をもうけた。田舎では珍しく恋愛結婚であったと聞かされている。結婚したときお腹



70代のその



80代のその

には長男がいた。その後立て続けに次男、三男を出産した。三男を出産後、夫の隆一郎が病気で急逝。もともと頑強ではなかった彼女も病に倒れ、実家に返された。ようやく病が癒えて婚家に帰った時の様子を、生前に一度だけ語ってくれたこと



二男（洋司）誕生の頃、
私の母と

がある。

「杖をついて杉山の家（実家）から歩いてきて、栗田の家に入ろうと思ったんだけど、姑が家の前で両手を広げて、どうしても門から中へ入れてくれなかったさ」

そのが右に動けば、姑も右へ。左に行けば左へ。仁王立ちして行く手を阻む姑の姿が、病み上がりそののには「鬼に見えた」とも言う。

結局、幼い子どもを三人婚家に置いたまま実家に返された。まもなく、実家からも出され、その後は布団を仕立てて生計を立てる自活の途を選ぶ。

ところが、そのは子どもとの離別に耐えられず、懇願して長男を引き取った。なぜ幼い三男ではなく長男だったか。私は二つの推論をした。跡継ぎである長男を手元に置くことで、再び婚家に戻るきっかけを得ようとしていたのではないかと、ということ。

もう一つは、結婚時に妊娠していたことが姑に「誰の子どもか分からないものさ」と言わしめていたため、長男を不憫



長女7歳、私の母と



私と子どもたち
長女の入学式



二男が生まれた年に
パチリ

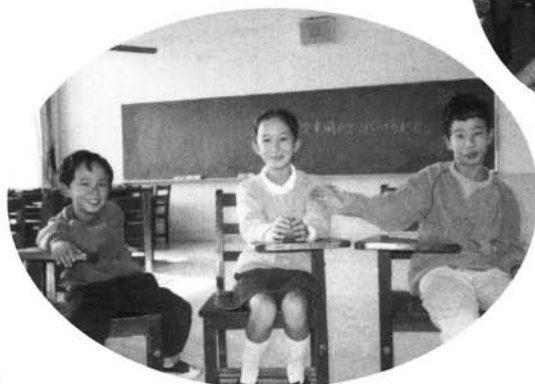
二男洋司誕生の頃



次男の七五三、母の松江と



三男が私の父親だ。なぜ三男がそれと暮らすようになったのか。結婚した母はしばらくの間、そのことを知らなかった。ある日見知らぬおばあさんに「あんたが隆義（三男の名）の嫁さんかね」と懐かしげに問われたことがきっかけだった。



私の子どもたち、航司（長男）ゆりか（長女）洋司（二男）

二男の七五三のとき



がっての行為ではないか、と思うのだ。
結果的には、そののとした手段は三人の子どもにも多大な影響を与えた。長男からは「あのまま婚家にいれば、自分が跡継ぎだったはず」と、莫大な田畑の相続権消滅を恨まれた。家督を相続した次男からは「自分は都会に出て行きたかったのに百姓にさせられた」と恨まれた。三男は「自分は婆さんに育てられた。母親はいない」と言い切った。



けで存在を知る。
その頃そのは、育て上げた長男にも去られて再び一人暮らしだった。身よりのないそのを、幼い頃ほとんど抱かれたこともない三男が引き取った。その理由について、父は終生語らなかった。母は新婚間もない時期から姑であるそのと同居をはじめ、四十二歳で未亡人となった。そのため母は、夫と過ごした時間よりも、そのと過ごした人生の方が長いことになる。



二男がおなかにいるころ

不思議なことに祖母は婚家は追い出されたが、離婚はしていないのだ。離婚に応じないことで婚家に抵抗したのか、田舎故の曖昧さによるものかは定かではない。だが生前、断固として婚家の墓に入ることを拒み続け、結局分家であるわが家の墓に入った。私の父親の死から十七年後のことだ。
私が紆余曲折を経て、ライターとしてやっていこうと思ったとき、テーマの一つが自然に浮かんできた。「高齢者福祉」だ。そこに祖母と母親の姿がだぶつたのは言うまでもない。他のテーマは「女性、子ども」。マイノリティーといわれる層の代弁をした



い。私だってマイノリティーと。
現在、取材でさまざまな高齢者の施設を訪れる。時に痴呆のお年寄りに、祖母を見ることがある。その人らしい最後であってほしいと祈るような気持ちだ。

私、30代後半のころ、子育てまっ最中

あなたの子育て 診断します

母親の個性を生かした「子育て」を

◆子育てを診断するなんて、嫌な感じ！
なんて思わないでくださいな。そうでなく、あなたの性格に合わせて一番やりやすい、いい子育てができるガイドブックなのです。

◆五種類のアンケートと、その答えからあなたのタイプがわかるチャートがついています。
●権威型 ●保護型 ●受容型 ●放任型 ●流され型の五つです。

もちろんどれがいい、どれが悪いという問題ではありません。自分のタイプを知った上で、自分に一番ふさわしい、そしてやりやすい子育てのしかたが見つかる本なのです。ぜひお試しください。

◆それぞれのタイプがよくわかる、すごく愉快な子育ての実戦記がついてます。

田中喜美子+NMS研究会著

定価一三六五円（税込み） 小学館刊

教育史料出版会

〒101 千代田区西神田 2-4-6
☎03(5211)7175

自分にあつた学校をえらぶ私立高校ガイド

ハイスクールレポート

入学してからでは遅すぎる！
服装・頭髮規定は？ 生活指導の中身は？
どんな行事があるのか？ 力を入れている教育内容は？ 進学への取り組みは？
学校生活がこの一冊で見えてくる！

関東版 わいふ編集部編 4月末刊 ★2000円＋税
関西版 公立校も収録 / 5月末刊 ★2000円＋税

子どもはなぜ
★1500円＋税

渡辺 位
学校に行くのか

自分にあつた
★1602円＋税

早川裕子
高校のえらび方

●生徒・父母・教師が綴る 私の北星余市物語

やりなおさないか
君らしさのままに

北星学園余市高校編
中退生を受け入れる北の学園！

★1500円＋税

特 集

父親としてのわが夫

夜中の花火がきっかけで

埼玉県浦和市 クズルカヤ恵美

「子育てをしない男は父親とは呼べない」なんてCMが流れ始めたように同じころ、私も赤ちゃんを授かった。私の夫はトルコ人なのだが、おまえは明治時代の日本人か、みたいな保守的な人なので、このCMの言わんとしている「子育て」をしてくれるとは思えず、他人ごとのような感じがしていた。というより、妊娠中の私は赤ちゃんがお腹にいるといううれしさでいっぱい、赤ちゃんのいる生活については何も考えていなかった。

優しい夫と可愛らしい赤ちゃん、私ってなんて幸せなのかしらなんて、有頂天になっていたのだった。

ところが、実際赤ちゃんが生まれて

みると、私の生活は天と地がひっくり返ったかというくらい変化した。「赤ちゃんは揺りかごですやすやす寝ているもの」なんて思っていた私も私だが、実際の赤ちゃんはちつともすやすやなんて寝てくれない。幸い母乳がよく出たので母乳を与えていたのだが、初めての何か月かは昼も夜も二、三時間おきにおっぱいをあげなければならぬ。おっぱいをあげているだけで、一日が終わってしまうのではないかという中で、どっさりの濡れたおむつを洗い、食事のしたくをして、赤ちゃんをお風呂に入れてと、やることがてんこもりだ。

赤ちゃんは本当にかわいい、でもこ

んなにたいへんだったなんて、生んでみてびっくりだった。「こんな生活が待っているなんて、誰も教えてくれなかったぞ」と思ったが、先輩ママたちが「うがたいへんよ」などと言っていた言葉は妊娠中の私にはリアリティがなく、気にもとめていなかっただけなのだ。

さて、私がこんなたいへんな毎日を送っているとき、私の夫はどうしていたのか。精神的には彼もきつというくらい変化があったのだろうが、余裕のなかった私には、彼だけはなんにも変わらず、自分ひとりがたいへんな思いをしているようにしか思えなかった。

夫はちょうど息子が生まれたころ、自分の店を持ったばかりで、朝九時に家を出ていき終電で帰ってくるという毎日だったので、何か手伝ってよというのは無理かなとは思ったが、せめて自分のことは自分でやってよと感じることがけっこう出てきた。

今までの二人きりの生活の中で、自分では思いやりのつもりでやってきた

こと、たとえば服にアイロンをかけておく、下着類をそろえて風呂場にかけていく、果物の皮をむくなどのことが突然、「自分でやってよ」になっちゃったのだ。

夫は私が今まで普通にしてくれていたことを、突然不機嫌そうにしぶしぶやったり、すぐに怒り出すという変化に驚いたと思う。私のほうも、結婚生

活六年の中で「愛しい愛しい人」だったはずの夫に、はじめて嫌悪感みたいなものを感じてしまう自分に戸惑っていた。

夫がテレビなど見てくつろいでいたりすると、「今どき、おむつも替えてくれないなんて」とか、「泣いているんだからあやしてよ」なんて、夫をいまいましく思ってしまうのはどうして

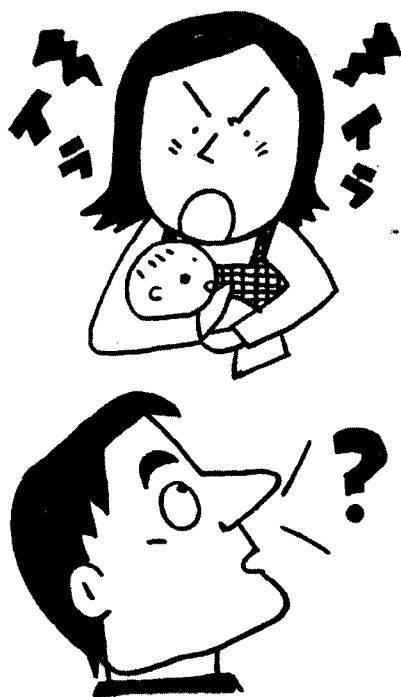
なのか。

そんな日々を過ごしていたある晩、息子が原因不明の夜泣きを始めてしまった。おっぱいをあげても、だっしして歩き回っても泣き止まない。私はほとほと参ってしまつて、自分も半べそをかきながら、夜中に赤ちゃんを抱えて部屋の中を歩き回っていた。

夫も心配そうに、だっこを代わってくれたりするのだが、なかなか泣き止まず、夜中の三時頃になってやっと寝てくれた。

「やれやれ」と思ったその時、近くの公園でどこかの若者達が花火を始めた。突然鳴った「パチパチ」という音と若者達の騒ぐ声で、息子がまた泣き出した。私が「あーあ」とうんざりした気持ちで息子を抱き上げたその時、夫はパツと上着を羽織ると、すごい勢いで外に飛び出して行った。

私は「この人何をする気？」とびっくりしたのだが、公園の若者達に「赤ちゃんをやつと寝させたとこゝろなので、少し静かにしてください」と言い



に行ってくれたのだ。

夫はたどたどしい日本語で、酔っぱらっていて何をするかわからないような若者の集団に、直訴しに行ってくれた。この行動は私にとって感動的だった。

すぐに花火の音は止み、息子も寝てくれたのだが、この小さな出来事がきっかけで、私の夫に対する不信任は絶対的な信頼感に変わった。

不思議なもので、この夜を境に私の気持ちが変わったためか、夫が彼なりのやり方で、きちんと息子と向き合っているのだということを、認められるようになっていった。

彼は、息子のおむつは替えてくれなけれど、自分が夜中まで働いて疲れているはずなのに、息子の夜泣きに嫌な顔ひとつしたことはないし、息子が起きてしまったときなど、私より早く気づいて抱いていてくれたりする。

お風呂にはたまにしか入れてくれなけれど、朝起きたら、まず息子の顔をふいて顔を洗う習慣をつけさせよう

としてくれる。

そしてなにより、私が機嫌が悪いときなど「赤ちゃんたいへんけどがんばってね」などと優しい言葉をかけてくれるではないか。

私のほうが「子育て」という言葉を、「世話をする」という次元でしかとらえていなかったために、夫が自分の息子に彼なりに関わっている姿を認識できなかったのだ。そのことに気づくことができてから、やっと「ふたりで」息子を育てているという実感が持てるようになった。

何か起こったときには、夫が頼りになってくれると思えることは、子育てに奮闘している母親にとっては、精神的にとっても大きな助けになるのではないかと思う。

本当に何でもないような小さな出来事がきっかけだったが、夫が私と息子を大切に思ってくれているのだと感じ、一人ではがちになつてがんばっていた赤ちゃんの世話も、肩の力を抜いてできるようになった。

私が勝手にひとりでも何でもやろうとしていて、夫が赤ちゃんに関わる機会を取り上げていた部分も多々あったのではないか。日に日にやんちゃで活発になってくる息子との暮らしの中で、相変わらず「ちよつと手伝つてよ」と怒鳴ったりしているが、気楽に文句を言えるようになったので、私の気分はずいぶん違う。

夫のほうも、寝ているだけだった息子がいろいろなことができるようになって、いつしよに何かをするのが楽しくてしかたがないようだ。今は息子のおむつが取れて、ふたりで長時間外出できるようになるのをひたすら楽しみにしている。

「あなたが自分でおむつを取り替えれば、今日からだっておでかけできるんだけど」と思いつつ、まあ、それはいいか。

クマのようにでっかい夫と、小さい息子がふたりで手をつないで出かけていくような想像するのは、なんだかとても幸せな気分だ。

最高の父親、最低の夫

横浜市都筑区 ゴル

父としての夫はほぼ完璧といって良
い。そんな夫を選んだ私は、男を見る
目があったのかしら。

彼はどんなに遅く寝ても、毎朝、子
供と遊ぶ時間を持ち、必ず一緒に朝食
をとる。たまに休める日曜日に自分の
所属しているチームの練習があれば、
子供を連れていくし、子供が行きたい
といえば、プールだ、釣りだと、積極
的に行動する。決して疲れた、と弱音
を吐いたり、まとわりつく子供をうる
さがることもない。子供の疑問には、
できるだけ誠実に答える。子供が熱を
出せば、子供の好物を買って、無理を
おして早く帰って来るし、参観日、夕
涼み会といった、幼稚園の行事にも必

ず顔を出す。五歳の子供はお父さんが
大好きだし、母親から見ても、理想的
な父親の役割をこなしていると思う。
外面そとづらがいいと言え、言えなくもない
けれど、やることはやっていると分か
ら、偉い。

彼は社会人としても一流だし、一家
を養う大黒柱といった点から見ても、
申し分ない。難を言えば、こんなに男
らしい人なのに、いや、男らしい人だ
からこそ、彼が、私にとってまったく
男として存在しないことが、不思議で
ならない。

いまや、セックスレス夫婦など、珍
しくもないけれど、何もここで、夫婦
生活がないと嘆くつもりはない。たと

えセックスがなくても、親密なコミュニ
ケーションがあれば女は満足する。
逆にコミュニケーションがないだけ
で、ストレスになる。抱かれなくても、
一緒に寝るだけでも、うれしいもの。
でも、毎日午前三時、四時、五時に帰
ってきて、七時過ぎに起きる人に、そ
れをしたいと言ったところで、できる
わけもない。ところが、たとえ二時間
の睡眠でも、彼は必ず朝起きて、子供
と過ごすときは欠かさないのだ。

彼の自己犠牲のおかげで、父子の信
頼はゆるぎないものになっている。こ
んなとき、彼にとつては何の価値も意
味もないような、淡泊な夫婦関係に文
句を言う自分は、まだまだ精神的に子
供なのかと、自己嫌悪に陥る。私はも
しかして、彼の愛を独り占めしている
子供に嫉妬しているだけ？ 家庭にい
るわずかな時間さえ子供にとられ、自
分には興味すら持つてもらえないか
ら。

だとしても、子供なしでは、何の接
点も持てない夫婦なんて、夫婦とはい



えない。今は、圧倒的に時間がない彼のことを思いやって、子供のことを第一に考えてくれる態度に感謝するしかないのかしら。

でも……。

血を分けた親子の関係を大事にし、愛着、執着を持つのは分かる。頭では分かっているけど、心が納得しない。私は血縁関係がないからこそ、男と女

で結びつく夫婦の関係の方が、ずっと素晴らしいことだと思う。エネルギーもいるけれど、その分、心から感動でき、得も言われぬ心地よさが味わえるのも、他人だからこそ。ところが、彼には血縁関係を大事にできて、男と女の、今以上の結びつきには価値がないらしい。あったとしても、ないがしろにできるもののようではある。

結局彼は、父親としてふるまい、家族を養うことで、義務を果たしている。人はそれを愛情と呼ぶけれど、愛情の名の下に義務や責任を果たすことで、彼自身は男としての喜び、充足感を得られるのだから、さぞ、満足だろう。

しかもそれは男としての生き方に、矛盾しない。家族を守って、偉いといわれこそすれ、妻をないがしろにしてひどいと非難されることはないのだから。

頑張れば頑張るほど、彼には手応えがあるのに、女の私はどうして、家庭にいて子供の世話をやいて、家族のためにご飯を作っても、女として生きている実感を感じられないのだろう。妻として、母としてはいられても、女としての実感を感じられるのは、やはり夫に愛されていると感じられるときだと思う。

「お前だって愛している」と、彼は言うのだろう。この愛は決して間違いないし、このように家族が愛されて

いるからこそ、今の子供と私の生活が保障されている。男が外で稼ぎ、家族を養うという典型的な（いささか古い）家族の形をとっているにも関わらず、夫婦の会話も接触もないような関係だと、家庭がずいぶん味気ないものになってくる。愛情を持って、いたわり合い、許しあうという心のやりとりがほとんど見えてこない。この、薄い膜一枚ずれたようなすれ違い感は、男に言



ったところでわかるまい、と私は悲観的だ。

夫婦関係を犠牲にして成り立つ親子関係は、親同士の親密なコミュニケーションを子供に見せないという点で、欠陥があるという。夫ばかりが完璧な父親でいられて、私は子の恨みさえ買いかねない、だめな母親になるしかないのか。そんな危険すらはらんでいるというのに、一見完璧な父子関係を守



ることに固執している夫は、いつこうに、私にとって男としてふるまおうなどと考える気配を見せない。わずかな時間を子供のために割くのは、私といる時間を作らないようにしようという策略かと、勘ぐる自分も情けない。かくしてこのコミュニケーション不足が、私に耐え難いストレスをもたらす。

父子の関係なんて、家庭の中では、夫婦の関係、親子の関係、男と女の関係、大人と子供の関係など、ごちゃごちゃした人間関係が錯綜した中のほんの一部にしかすぎない。それだけがうまくいったところで、なんと緊張した、見せかけだけの、ちぐはぐな家族であることか。

最近では、こんなふうにしちか女を愛せない男を私は本当に好きになって結婚したのか、と自分の心を疑うようになってくる。ちゃんと稼いできて、父親としての役割をこなす、単に子育てに最適な男を選んだだけなのではないか。「男を見る目」というのは、そういうことだったのか。

心の中でメール

東京都八王子市 浅川涼子

ある日の夕食どきの一般的な家庭の情景を描いてみよう。シナリオは書いたことがないので小説風に。登場人物は父親と母親と大学四年生の娘である。

娘は卒業後、就職してOLになって、やがて結婚という大部分の若い娘が歩いていくであろう、将来の設計図が描けないでいる。なにか違う、自分の未来には他の道が開かれているような気がしてならない。娘は両親に心の内を話した。

「私、卒業したらフランスにいきたいんだけど」

娘は、ハンバーグを食べている手を休めて話しだした。

「フランス！ まあー」

母親は、箸をとめて驚いた声を出した。

「フランスにいつて、何かやりたいことがあるのかね」

父親が落ちついた声で聞いた。

「語学学校にいつて、フランス語を本格的に勉強したいし、演劇や映画にいつても本場で学びたいの」

娘は、思いつきで言っているのではなくて、一年生ころからずっと考えていたのだと気持ちを語った。

「なにもフランスにいかなくても、日本にいつても勉強できるでしょ」

母親は、まず心配が先にたつて反対してしまふ。より無難な道に進ませたいと思う。

父親は、腕を組んで静かに聞いている。娘の希望が地についているか、いい加減なものなのか、娘に話させることで判断したいと思う。

「父さんもできたら日本にいつて欲しいと思う。でも真由美の人生はお前のものだ。自分でよく考えて、どうしてもしようしたいのなら留学先のアプローチ、費用をどうするかとか具体的に動いてごらん。その上でまた相談に乗ろう」

「ありがとう。父さん」

娘は心から言つた。満ち足りた思いが心を包んでいく。

というような会話が成りたつていくのが家族というものだろう。文章で表現するとこんなふうに理論整然と決まることが、実際にはもっと混乱して、だめだと否定されたりするだろう。しかし、娘の言い分を聞いてやり、一緒に悩んでやるのが家族、そして、その指揮をとるのが父親の役目であろう。

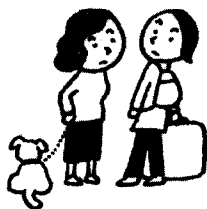
フランスにいきたいのは、我が家の娘である。ただ、ストーリーがこのよ

うに運ばないだけだ。父親は即座にだめだ、の一点張り。聞く耳を持つとうとしない。

「なぜ、だめなの？」

と、問うても、返ってくる言葉は「だめだ」だけ。なにがだめなのか、資金援助ができないのか、心配なのか、一般的な道を歩んで欲しいのか、皆目分らない。そのような質問を一つ一つしていったとしても、答えてくれない。口を開けば「だめだ」だけ。娘にも聞いている私の胸にも悲しさ、虚しさだけが降り積もってしまう。

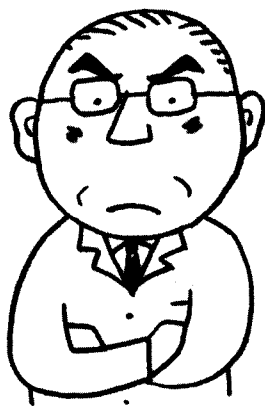
男は無口。よしんばそんな定説があ



ったとしても、ここ一番の時には、深く心にしみとおるような、惚れなおすような言葉を吐くのが男、父親なのではないのだろうか。

夫に言わせれば、汗水流して家族のために働いていれば、それでOK、それ以上なにを望むのか、ということなのだろう。飼い犬にも夫は言っている。「餌代を出しているのは自分なのだから、犬は自分に感謝すべきだ」

犬にそんなことが分かるはずがない。夫にはしつぽも振らない。言葉をかけて、頭をなでて、と心を通わせなければ愛情は伝わらないのが理解でき



ないみたいだ。

子どもも妻も犬と同じ扱いだ。エサ代を出してやっているのだ、自分に感謝すべきだと言う。人間だってそんなことで分かるはずがない。父親にはシッポも振らない。言葉をかけて、幼いときから頭をなでたり、手をつないだり、肌のふれあい、心の通いあいがなくては、父親として尊敬もされないだろう。

娘のフランスへの夢は、父親に反対されたからといって、頓挫することはない。着々と準備しているのだけれど、父親の目が怖い、と娘は縮みあがっている。

「すごいよ。なんにも言わないで睨んでいるんだもの。そばにもよれないわ」「そうでしょ。あの目を見ると、言葉を失うわよね」

娘のことは気に入っていて、いわゆる日常会話、「今日は天気がいい」だの、「遅くならないで帰ってこい」だの、「どこにいくのだ」といった言葉はかけていたのに、それも今は途絶え

た。私は猛烈に腹がたつてくる。

「なぜ、真由美に話しかけてやらな
いんですか。かわいそうじゃない」

「話しているよ」

たった一言、夫の答え。どこが、と
あきれてしまうのだけれど、この辺で
やめてフランスのことはふれないでお
かないと危ない。

「気持ちよくいかせてやったら」

とても私が言おうものなら、すぐさま
矛先がこちらに向いてくる。

「お前が真由美を焚きつけてフラン
スへいかそうとしている。お前がすべ
て悪い」

となつてしまうからだ。夫は自分で抱
えきれないことは、みんな私に負わせ
ようと機会を狙っている。私も少しは
利口になった。

過去のたくさんさんの失敗が私を賢くさ
せている。

私は、夫に心の中でメールを送つて
いる。

——真由美のフランスいきは、あな
たがほんとうの意味で父親になれる絶

好の機会ですよ。逃げないで向きあつ
てみたらいいじゃあないですか。頑張
ってください。

心の中だけでしか言えないのが、お
かしい。繰り返すが、過去の失敗例か
ら判断しての口に出せないつぶやき
だ。

お父さんは？

電話が鳴った。近くにいた夫がでる。

「まいど」と受け、自動車の話をいつ
ものように冗談まじりに話す。そして
「じゃあ」とさりげなく終わる。まるで
友人との会話だ。しかしお相手は、
長男。隣の大学に通うため、アパー
トで一人暮らしをしている。

……私だって彼とすこしは話したい

来年の春、娘は無事にフランスに羽
ばたけるのだろうか。いえ、羽ばたか
せてやれるだろうか。父親として、母
親として。

もちろん、私にとつてもほんとうの
意味で母親になれる絶好の機会でもあ
る。

埼玉県越谷市 坂本眞弓 (50歳)

のに。息子も母親には用事もないのか。
ちよつと寂しい。こんなことがよくあ
る。

そして私には無口な大学一年の次男
も、帰宅するや「お父さんは？」とひ
んばんに尋ねる。彼らはギターという
共通の趣味で、父子というより、友達
関係に近い。ギターの部品でおもしろ

いものをつけてきたり、CD情報の交換やセッションしたりと仲が良いのである。

公民館のスタジオを借りて、親子で演奏を楽しんでくこともある。「バンドのお兄さん」と係員に呼ばれたと夫がうれしげ。

……あほらし。ちなみに夫はブルース、次男はロックギターが趣味である。



そして、長男とは自動車、オートバイの趣味を同じくしているため、先のような電話となる。こんなふうに我が家の父子関係は良好で、世間でよく聞く親子の断絶はない。こんなふうに父子が付き合えるのは、ひとえに温厚でおしゃべり、楽しい夫の人柄による。また仕事一辺倒でなく、趣味を楽しんで生きている姿が、息子達に受け入れ

られているからだろう。口うるさい母親の私だけ、取り残されてしまうほどだ。ふとこんな我が家と思うと、これには実はこの私が、いちばん驚いてしまう。というのは私の父親との関係が断絶気味で、親と友達のように付き合えるなんて信じられない家庭であったからだ。

私の父は会社人間だった。家庭より仕事のほうを重視したため、また無口だったことも、家庭内での彼の孤立を助けてしまった。高度成長期のサラリーマンとして、しかたがなかったともいえるが、心身共に会社の仕事だけに生きていた父。家庭のことは妻に任せきり、子供のことを知ろうともしない。そんな父とは会話も成り立たない。だから子供は愛されているという実感を持ってなかった。家庭が楽しいなんて思ったこともなかった。会社人間の典型的なマイナス部分を具体化したのが、我が実家の父子関係だったといえよう。

そしてその娘は、意識的ではなかつ

たが、父と反対のタイプと結婚し、や
つと楽しい家庭をつくることができた
といえよう。しかし私は、父を一方的
に責めるつもりはない。父の死後、彼
の日記がでてきた。それによると、私
達の幼いころ、生活にゆとりはないが
子供を愛し育ててくれた姿が、そこには
じゅうぶん書かれていた。高度成長
期という時代の波に、働き盛りの父が
飲み込まれてしまったということだろ
う。そのなかで、自分を見失わないで
いるのはなんとむずかしいことか。

さてモーレッツサラリーマンではない
我が夫は、多趣味で人生を楽しむ人だ
ある。

毎夜仕事が終わりに、帰宅するやギタ
ーを弾いてくつろぐ。楽譜は読めない
が、若いころから好きなブルースを独
学で弾いているうち、最近は思うフレ
ーズが弾けるようになったという。ジ
ミヘンを越したと、自画自賛している。
そして吹奏楽部で活躍していた次男に
楽譜の読みかたを習い、腕を磨いている。
こんなふうに興味を通じて、子供達

とコミュニケーションを持ち、煙たい
父親とはならなかった。この私も明る
い夫との暮らしを楽しんでいる。そし
て彼がおもしろいだけの人ではない
と、見直すこともよくあった。

次男の高校受験時、成績にムラがあ
るため第一希望校を足切りされるおそ
れがあり、長男の通う公立高校を志望
せざるをえなくなるということがあつ
た。だが、兄と同じというのが嫌で、
私立高校に行きたいと次男がゴネだし
た。思春期で、常に比較される兄弟。
次男の思いもわかり、また我が家の経
済状態を考え、おろおろ迷ってしまつ
た私に、夫はきっぱり裁定してくれた。
「うちは公立高校しかやらせられない。
同じ学校に行けばいい」と。
実は夫は子供に大学に行け、とは一
度も言ったことがない。勉強しろとも
言わない。本人が勉強したければ行け
ばいい、と。夫は何につけても哲学を
しっかり持っている人なのだ。こうき
っぱり言われて、次男もそして私も妙
に納得した。

枝葉末節にこだわって、大局を見ら
れなかった自分。それに比べて、夫の
即断が小気味よく、頼もしかった。

その後兄と同じ高校に入学した次男
は、クラブ活動に熱中し、友達も多く
つくり、充実した学生生活を過ごした。
ただ勉強はそっちのけで、成績はクラ
スのどり近く。ところが高校三年の夏
から受験勉強に集中し始め、とうとう
親も先生も驚くほどランクをあげて大
学に合格した。私の子育ての成果かな
と、言いたいのが、夫のおかげだろう。
父親ゆずりの優れた集中力と、自立心
溢れる息子である。

このように二人の息子とも大学生に
なり、私達の子育ても一段落に近い。
経済的には裕福とはいえなくとも、人
生を楽しむことを知っている彼らだ。
それぞれの人生を明るく、楽しんで生
きていくってくれることだろう。

私ひとりでは、こんな樂觀的な見通
しの子育てにはならなかったと思う。
楽しい夫でよかった。

満点パパがやって来た

愛知県半田市

宮崎宏美

今午前一時、娘まりんは深い眠りの中。たつぷり遊んでいっぱい笑って気持ち良さそうに寝ている。目を移すといいた、かたわらに寄り添うように、まりんの一番大好きなパパが寝息をたてている。そう、この穏やかで優しい寝顔の持ち主が、今回の主人公、我が夫なのである。

去年の春まだ浅い日、すったもんだの大騒動の末、まりんが誕生した。同時に、子育てに自信がなくて母親になるのが不安だった妊婦はママになり、子供が大好きで父親になりたくて仕方がなかった夫はパパになった。そして夫は、満点パパへの道をひた走ることになるのである。

それは出産翌日から始まった。

帝王切開をした私がまだベッドでもうろうとしている中、病室に次から次へと育児用品や肌着が運び込まれてきた。妊娠中、自分の体のことだけを心配していた私は、出産した後のことなど全く頭になかったのである。だからこんなに早く、色々な物を用意してくれた夫に感謝の気持ちで一杯だった。そんな夫が、何やらたくさん書き込まれた紙きれを持って私に言った。

「とりあえず必要な育児用品のリストを作ったんだけど、いっぱいあるね。でも、いつ退院してもいいようにもう準備OKだよ。帰ったらびつくりするぞー。へっへっへっ」

そして十日後、私はまりん共々退院して家に帰ってきた。そしたら本当にびつくりした。夫のへっへっへっの意味がこの時、初めてわかったのである。

部屋にはベッドが置かれ、ちゃっかり借りてきた熊さんのオルゴールツリがくるくる回っており、いつ買ったのか小さい整理ダンスまで置かれていて、中にはすでに、肌着やガーゼ、ベビードレスなどがきれいにたたまれていた。更にケアコーナーも作ったよといつて箱の中に、綿棒、コットン、爪切り、包帯、母乳パットや熱冷ましシートまであったのには笑った。まだあった。テーブルの上の新品の布巾の上には、ほ乳びんや消毒用一式が並べてあり、脇には取り換え用の布巾までが、何枚もきれいに積み重ねてあるのである。

ここまでやるとは！ へっへっへっの夫はすごかった。

夫の活躍はなおも続いた。おむつを換えるのもいそいそと行ない、(うんちだって平気だ)夜中の授乳も一緒に

起きて手伝ってくれた。お風呂も勿論、夫の役目、実に丁寧に隅々まで洗ってくれる。この一年半で私が娘をお風呂に入れたのは本当に両手で足りる程だ。

そしてまりんが一歳半現在、夫はますます張り切っている。会社から帰ってきてまず娘とスキンシップ、そして夕飯を食べさせる。夫はおどけながら楽しくご飯を食べさせるので、まりんもニコニコとたくさん食べる。腹ごなしにまた、少し遊んだら次はお風呂。まりんはお風呂が大好きなので、「いいよー」と夫に呼ばれたら急いでタタタッと走って行く。そしてキャッキヤツと実に楽しそうな二人の笑い声が聞こえてくる。あんまり楽しそうなので一度、戸のすき間からそつとのぞいてみたことがあった。すると、まりんは気持ち良さにうっとり、湯船の中で夫の胸にしなだれかかっている。夫も目を細めて御満悦な様子でまりんの髪をなでていた。「何だ、この光景は！」私は何かいけないものを見てし

まったかのように体がブルツと震えてしまった。父親というものはあんな風になるのだろうか。くわばら、くわばらである。

うっとりバスタイムが終わったら服を着せ、寝かしつけである。以前は夫がお布団の上で遊んでやりながら、そのまま寝かしつけていたのだが、一歳を過ぎたら自分で勝手に、「バイバイ」と言って寝るようになったので夫の役割は一つ減った。何だかさみしそうである。

平日はこのようなペースであるが、土、日曜日は、これに朝食、昼食を食べさせることが加わり、外遊び、散歩も喜んでまりんと手をつないで出かけていく。そう、喜んで行くのだ。夫にとつてまりんと時間を共有するのは何より楽しく、うれしいことなのである。このようにまりんは、夫の世話を受けていることが多いのでパパが大好き。私がいなくても大丈夫なのをいいことに、私は休日ばかりをパパに任せて一人、ドライブしたり、読書した

りと息抜きをすることもできる。

この前なんて夜、合コンに行ってしまった。勿論、夫の承諾済みでだ。「母親だからといって、ボーイフレンドの一人や二人いなくてどうする。所帯じみた女房ほど情けないものはない」というのが夫の持論である。素晴らしい。

ここまで書くと、きつとうらやましいと思う人もいることだろう。実際、友人なども皆、「本当に、すごいだなさんね、どうしてそんなに協力してくれるの?」と聞いてくる。すると、私はこう答える。

「それは、私が頼りなくて危なっかしいからよ」と。悲しいかな、この答に皆一同、納得してしまう。「そんなことないわよ、しっかり母親しているわよ」と言ってくれた友人は未だかつて一人もいない。いたら奇跡だと自分でも思う。友人でさえこうなのだから、夫は確信しているのだ。私の大ざっぱなのとそそっかしさ、そしてのろまなことを。

例を上げると枚挙にいとまがないが、爪切りは一回したら、「そんな四角く切ってはダメだ、丸く切れ」と注意され、次にした時「あー、指まで切れそうだ」と叱られて、それ以来まりんの爪には触れていない。耳、鼻そうじも「全然、きれいになってない」と

夫に怒られ、ふてくされて「じゃあ、私、もう二度とやらない」と言ったら、本当にやらなくて済んだ。言ってみるものである。

と、まあこのような有り様なのであるが、こうなることは子供を産む前からわかっていた。自分のことは自分が



良く知っている、なるほど真実だ。こんな私が果たして子供を育てられるのか。不安で仕方がなかった。だから子供を産もうと決意するまで八年かかったのである。まさしく清水の舞台から飛び降りる覚悟であった。そして飛び降りた私を受け止めたのが夫なのだ。

育児に対しての不安、ストレスを私になるべくため込まないように、そして何よりそれが娘に向かって爆発しないために、夫は日夜奮闘しているのだろう。夫は私とまりんの間の防波堤なのだ。そしてこの防波堤は夫の図体と同様、大きくがっしりしていて、そんなにそこらの波なんて簡単にはね返してしまふ。そう、私の愚痴やため息、イライラさえも。そうだ、はね返すよりも吸収すると言った方が良くかもしれない。はい、この防波堤はスポンジの役目もしております。

そして一番大切なもので、私が何より感謝しているのはこのスポンジ、いやいや夫の性格である。夫のだから、寛大さに私はどれほど救われているか

知れない。

夫は実に自然体で背のびをしない人間である。だから競争心もない。それはまりんに関しても同じで、私が首のすわるのが遅いと心配しても「長い人生の中で、一、二か月早いか遅いかなんてどんな意味があるのか」とケロツとしてゐるし、体が小柄で体重が少ないとため息をついても、「僕と君に似ていたら巨大児になるところだった、良かったじゃないか」とすましている。夫なりに心の中では心配しているのかもしれないが、それを私には見せないで、心配症の私にはとても有り難い。逆のこともある。私がまりんは言葉が早くて、もうペラペラしゃべれるなんてすごいと言うと「ただ、おしゃべりなだけだろ」とさらっとしているし、一歳ちよつとにして、もうダンスの振り覚えて踊るのよと自慢しても、「毎日、見てればそうなるさ」と相手にしてくれない。いささか拍子抜けの感もあるが、ついつい人と比べてしまう私にはいい薬である。

良薬口に苦しという通り、耳の痛いこともあれこれ言うが、結局、夫の言うことが正しいと納得する私である。素直なのが唯一、私の取り柄。

おっと、もう一つあった。それは誉められると俄然、張り切ることだ。それを知って夫はここぞという時、とても誉めてくれる。私が離乳食を作っているとうれしそうに「そんな手の込んだのを作るなんてえらいね」と毎度言うので、とうとう私は市販の物には頼らず手作り一直線でやり通した。他にも「面倒がらずに良く公園や散歩に連れて行って、まりんもいいママを持つて良かったな」などというので、これまた、ほとんど毎日行っている。おかげでまりんも日焼けしてまっ黒になった。もちろん私もまっ黒だ。美肌どころではない。

さーて、いいことづくめのように見える夫だが、実は一つだけ、不満なことがある。これ以上、不満を言ったら罰が当たるとおっしゃる人もいるだろうが、本当に私、心中穏やかではない

のである。それは何かって？ 白状しよう。それは夫と娘が仲良し過ぎること、というより夫がまりんにぞっこんなことである。

本音を言うと、私が子供が欲しくなかった一番の理由は、女の子だったから夫を奪われてしまうことだったのかもしれない。

案の定、そうなった。あれほど、子供より私を一番好きでいてよと約束したのに。夫の心はあちらさんへ行ってしまった。そしてきつとも戻って来ない。まりん、パパをママに返しておくれ。

今もまだ、まりんと夫は眠りの中、相変わらずびびったり寄り添ってスヤスヤと、その寝顔もそっくりだ。そんな光景を目の前に、あきらめきれない私は、どうやってこの二人の間に割って入ろうか、夫の愛を取り戻す術をあれこれ考えている。

夫が満点パパで居続ける限り、私のまりんへのジェラシーも燃え続けることだろう。炎のようにメラメラと。

楽しく、そして真剣に

岩手県盛岡市

伊藤央子（34歳）

盛岡の冬は寒く、時々痛いと感じる程だ。それでも三歳の息子は外が大好き。零下の日に、夫が「K（息子の名）ったら、どんどん川に入っていつちゃうんだよ」と、びしょびしょの靴下の代わりに、息子に手袋をはかせて帰って来たときは、あきれるのを通り越して大笑いしてしまった。手袋も濡れてしまい、ビニール袋をはかせて来たこともあった。何もこんな日に川辺で遊ばなくてもいいでしょうと思う。けれども、父親との少々荒っぽい遊びに、息子は満足顔だ。

休みの日、夫は、川、レンタルビデオ屋、おもちゃ屋、家具屋の中のキッズランド、公園……と、いくつつかのバ

ターンの中から選び、息子と二人で（ときには一歳の娘も連れて三人で）自転車で出かけ、途中どこかで昼食をとり、夕飯の買い物をして帰ってくる。我が家には自家用車がないので、真夏の炎天下だろうが、多少吹雪いていようが、自転車なのだ。私もたまにはつきあうが、だいたいは娘をベビーカーに乗せて買い物や散歩をしたり、一人で読書や映画を楽しんだり、習い事をしたりする。

休みの日の炊事と子守りは、夫が自ら買って出た。「少し子どもから離れて息抜きしたほうがいいよ。どこかでランチでも食べてくれば。オレ、Kと遊ぶの結構楽しいよ」と言う。私は今

専業主婦なので、子どもと一緒にいる時間は確かに長く、ストレスもたまる。しかし、いくら夫人の希望とはいえ、子どもと遊ぶのは疲れるし、たまには一人で過ごす休日も欲しいのでは、という疑問があった。

以前読んだ広谷鏡子の「げつようびのこども」という小説に、不登校になる女の子が出てくる。休みのたびに父親と出かける姿に、母親は仲良し父親だとばかり思っていたのに、実は夫は義務感からそうしていて、娘はそれに気付いていた。娘は、自分が本当には受け入れられていないことに苦しむ。世間体を気にして登校を勧める父親と、娘の感情は平行線をたどる。母親はなりふり構わず徹底的に、娘を理解しようともがく。一見幸せそうな家族の泥仕合ぶりが衝撃的な、重い話だったと記憶している。私の夫がこの父親のように「良い父親」を演じているとは思えないまでも、心に引っかかるものがあつた。

ところが、下の子が生まれる前の、

よく晴れた夏の日曜日のこと。中津川へ行くという夫と息子を送り出してから、私も講演会が何かに出かけた。途中で川のそばを通ると、やはり夫と息子の姿があった。周りにも家族連れが何組かいる。夏場でも盛岡の川は水が冷たく、私なら五分くらい浸かっていると、足がピリピリして水から上がらずにいられない。その川の中で二人は、石を拾っては投げたり、水中めがねをつけて潜ったりして夢中で遊んでいる。堤防の上から大声で息子の名を呼んでみたが、二人とも全く気付かない。息子ばかりか夫も実に楽しそうで、いきいきしている。それ以上近づいて二人の遊びを中断させるのも気が引け、結局私はそのままその場を去った。

あゝの光景を見てから、夫は義務で息子につき合っているわけではないと確信した。また夫と息子二人だけの世界が、しつかり出来上がっていることも知った。頼もしいこと。これからは気兼ねすることもない。それより、自由な時間を作ってくれたことに感謝して、しばし自分のことに没頭し、しつかりフレッシュユすることにした。

この四月に息子は、近所のこぢんまりとした幼稚園に入園した。初めて親から離れて、集団に入った我が子に興味津津なのは、母親だけではないだろう。でも、たいていのお宅は、平日の行事に父親が参加することができないようだ。私の夫は、入園式はもちろん、保育参観日も、遠足も有給休暇をとって参加した。休暇の理由も「保育参観のため」などと具体的に届けるのだそう。内心驚いたが、子どもやその周りの様子を、私というフィルターを通して、夫も自分の目で見てくれるなら、それに越したことはない。夫婦で参加するところは少なく、「仲良くていいわねえ」「私たちおじゃまかしら」などと冷やかされることもあるが、夫は平気だ。そして毎朝出勤途中に息子を園へ送って行くだけでなく、土曜日や会社が平日休みのときは、当然のように迎えに行く。

「どうしてうちはお父ちゃんが来るの？」という息子の間に、

「他の子のお父ちゃんには忙しいんだよ。お父ちゃんは暇なの」と真顔で答えている。

もし私が仕事を持っていたら、子どものことでこんなに堂々と休みを取れるかどうか疑問だ。男女の差もあろう。「これだから女はダメ」と言われるのは悔しい。

会社だけの人間にならず、家族との時間を尊重し、息子にも会社にも気負わない、そういう夫がうらやましくもあり、感心もする。

息子はスイミングスクールに通っているが、土曜日なので、これもたいとい夫が送迎する。このところ、月に一度の進級テストに息子が二度続けて不合格だった。本人は進級の意味がよく分からず、ケロっとしている。しかしそばで見えていた夫は、「えっ？」と思ったと言う。「級の上がった子は、その級の番号札を持ってシャワーから出て来るんだよね。Mちゃんも持っているのに、Kはまただめだったんだよ」。

水泳の選手にするためにスクールに入れたのではない。大好きなプールで思いっきり発散してくれるだけで充分だ。それなのに、子どもにも過度の期待をかけまいと思っているにもかかわらず、無意識のうちに期待していた。他の子と比較もしてしまう。そんな自分の感情に驚き、それを息子に悟られまいと押し隠したそう。これには私も共感した。秀でていなくても良い、のびのび育て、と言いながらも、どこかで子どもに何かを求めている矛盾に、ハッとすることがある。子どもの頃、励みにも重荷にもなった、親からの有



形無形の期待を思い出す。自分が親になったら、子どもにも心理的な負担をかけたくない、というのは二人とも同じ意見だったはずだ。そんな戸惑いも、夫婦で話し合っていると、我が子に傾倒しすぎないようブレーキがかかるような気がする。

夫が四十一歳、私が三十歳で初めて子どもを持った。それまで自分が父親になることは想像できなかったと夫は言う。それでも、夫は夫のやり方で、父親であるということをしつかり引き受けていると私は思う。

夫も時には息子のやんちゃに手を焼

き、怒ることもある。息子の反応は私に怒られたときと違って、夫にはこぶしを振り上げて反抗する。私の方が怒る頻度も程度も勝るのに、息子は泣いたり拗ねたりしても、母親には手を上げてはこない。男同士、ライバル意識があるのだろうか。単にウルトラマンごっこの影響か？

この子も下の娘も、成長するに従って、親として試されることがもつと出てくるに違いない。近い将来私が仕事に復帰すれば、生活も変化する。夫も今の職場から転勤になれば、忙しくなったり、通勤時間が長くなったりして、今のように家庭に時間を割くのは難しくなるかもしれない。家族それぞれの自己主張がぶつかることもあるだろう。

この先、楽しみもあるが、いろいろな問題を想像すると、不安もある。でも私一人で乗り越えるわけではない。夫が楽しく、そして真剣に子どもと向き合っているので、大変心強い。

超子煩惱の夫

横浜市緑区 三田サキ（64歳）

仕事に励む夫

昭和四十七年、小学六年と小学四年の子供を残して、わが夫の先妻は他界した。葬式が終わったその夜から、父子三人だけの淋しい生活が始まったという。今年四十歳になった娘が赤ん坊の頃の主人は、なかなかの子煩惱であつたと人から聞かされている。夕方仕事から帰ると奥さんが夕食の仕度をしている間中、娘をおんぶして散歩をしながら、とても優しい面持ちで子守をしていたと言う。

そんな生活をしているうち二子目の息子が誕生した。そして息子も娘と同じように大事にされながら育っていった。

そして二人の子供が小学生になった頃からは、もう子育てに父親の手は借りなくても済むようになった。その頃から主人は家族を養うために、よりいっそう仕事に励むようになった。まさに無遅刻、無欠勤の仕事熱心である。仕事は公務員なので民間とちがつて残業がない、よって勤務は四時半までである。そして主人は非常に几帳面な性格である。先ず時間の厳守、不断の出勤の時も充分に余裕をもって早目早目に事をなす。そして仕事をとつても大事にする人である。身体が悪い時でも少々のことでは、へこたれずに仕事を

続ける。そしてとてもきれいい好きで、常に整理整頓を実行する人である。

私が婚約時代に三田家を訪れた時、部屋や押入を見せられて、はっと驚いた。ゆき届いた掃除で塵一つ落ちてなかった。私はそれを見て、これは相当に神経を使わないと、やっては行けないあと自分言いきかせたものだった。

先妻の生前、主人は五時半に朝食をすませて出勤し、夕方五時に帰宅し六時には晩酌と夕食をすませて、あとはもう寝室に入つてテレビを見て過ごす生活だったという。子供達の朝食は六時半頃夕食は七時頃だった。だから主人と子供の接触する時間が非常に少ない生活である。そんな生活だから子供は自然に父親への関心が薄くなつていき、お父さんの人柄は良く知らなかったらしい。

でも母親を亡くしたあと、私が三田家に嫁ぐまでの二年間、主人は仕事と母親代りで、ありつた力の力をふりしぼって子供に尽くしたらしい。母親のようなきめ細やかな愛情で、そんじょ

そこらの奥様方も顔負けする位、父性愛を発揮していたみたい。至れり、尽くせりの世話で尽くしてくれる父親の姿を見てきた娘が「お父さんてほんとに優しい人だったのねえ。私お父さんがどんな人だか知らなかったわ、お母さんが亡くなって初めてそれが分かったわ」と嫁いできた私に、ふっとそんなことを言っていた。

私が三田家に嫁いで

こうした環境の中に、私は三田家の嫁として迎えられた。新婚旅行で行った伊豆の宿で、おちよこでいっぱいにくみ交わしながら「子供のためには骨身を削った」と主人は胸をつまらせながら、一言ぼつんともらした。それを聞いて私は、さぞ大変なことだったろうなあと、私もその真似をしたいわ、子供のために骨身を削りたいわと思、また、しようと自分の心の中で誓ったものだった。

旅行も終わって日常生活に入りいよ

いよ現実との闘いに直面した。その時初めて骨身を削ることの難しさ、苦しさは言葉では言い表わせないことが分かった。それには先ず捨て身でかからなければいけないが、自己を捨てることは非常に難しい、ややもすると自我が躍り出てくる。自分を殺すこととはなかなか、容易ではない。

それを主人はやりとげた。血肉を分



けた親子だから、本能的な愛情を持てたのだろうとは思いますが、自分の肉体以外の者のために、骨身を削るなんてことは非常に苦しい修業がいるのではないかと思う。それをやりとげた主人を私は深く尊敬せずにはいられない。先妻亡きあと二年間子供達の面倒をみながら、仕事場の職務はもちろん全うする。それに労働組合の活動もこなしたりして、毎日大忙しだったろう。

息子が六年生の頃、たまに夕食をみんなで一緒にすることがあって、そんな時息子の好きな茶わん蒸しを造ってあげる。息子は自分の分をさつさと食べてしまつて、そのうち、すばやく主人の分に手をつけ、がぶがぶと食べてしまった。

私はあつどうしよう、主人の分がなくなつてしまつたと、おどおどしているのに、主人は唯にこにこして「勝巳が好きだから」と言いながら漬物を箸でつついたりしている。

私はこの情景を見て、ああ肉親の情愛というものはいいものだわとつくづ

く思った。これは小さなほんの日常茶飯事である。

主人はとても我が身を犠牲にすることが多い。例えば家庭で日曜大工や、庭いじり等の仕事を家族と共同作業でする時など、まず一番骨折る仕事や、きたないよごれる仕事はいち早く自分が率先してやりこなす。骨折る仕事は自分、楽な仕事は相手にさせる。

食べ物にしても、おいしい物は相手に沢山食べさせ、自分はほんの少しで我慢するのである。そして子供達に目いっぱい愛情をそそぎ、金銭的な苦労は絶対にさせたくないのが主人の信条である。

こうして、きめ細やかな愛情で子供を育ててきた父親にこたえるかのよう、子供達は素直にすくすくと成長していったのである。

父親の背中

こうして二人が大人になったある日、主人と息子がお酒を飲みながら、

息子が「俺は親父の背中を見て育ったから」と真面目な顔をして一こと言った。私はそれを聞いて、ああそうだとその通りだと思った。私が嫁いで来たすぐの頃、主人が職場の宴会で足がおぼつかないほど、ぐでんぐでんに酔っぱらって帰って来て台所に入った時、食卓の椅子の置き方が少し曲っているのに気付き、さっとそれをまっすぐに置き直したのである。何事もきちつきちつと折目正しくやらなければすまさない主人の几帳面さに、私ははっと驚いた。

その几帳面さ、時間の厳守、仕事へのとりくみ方（職場等で仕事を与えられたら、その仕事をそっくり自分のものとして真剣に責任をもつてとりくみ、役目を果たす）は親から子に、そっくりそのまま受け継がれている。これぞまさに無言の教育、活きた教育ではあるまいかと思う。

子供達の受験を前にした頃でも、主人は子供達には決して「勉強しなさい」とは言わなかった。「何事も健康第一、

無理に勉強をしなくても良い」と言うのである。一方子供達はそうした父親の言葉を受け止めながら、逆に自発的に一生懸命に勉強をするようになったのである。主人の教育方法はなかなか上手であるし、尊敬せずにはいられない。

だが主人は小言幸兵衛

最後に主人のマイナス面を言えば、私に朝から晩まで小言を言うことである。それによって自分のストレスを解消しているのだと思うが、小言を言われた私はその小言を一人で受け止め切れず、今度は娘に「お父さんはこうなのあなの」と言っでぐちをこぼすのである。

すると娘は私に気を使って、私と一緒にになって主人の悪口を言うのである。でも私も娘も、こうした主人の悪口を言う気持ちはほんのうわべだけである。心の奥底では尊敬の念が絶えないのである。

だんだん「父親」になっていく

埼玉県大宮市 新井純子

わいふ二八四号「NMS研究会より」
のなかに夫と妻の関わりで印象的な文
を見つけた。

「NMSのシステムのモットーは『幸福な子育ては幸福な母親から』というもののだけれど、仕事を進めれば進めるほど、この言葉の持つ重みを痛感している。懸命にアドバイスさせていただいても、夫婦の間に問題があると、不思議なほど効果が上がらない」というものだ。

また毎日新聞で紹介された「家族と住まいの関係を考えるシンポジウム」の記事のなかで、精神科医の町沢静夫氏が「私たちは子どもたちが第一という誤った考えに気づかなければいけない

せん。夫婦が第一なのです」という一文が目をついた。続いて作家藤原智美氏も「家族には肉声のコミュニケーションがありませんが、情報化社会によって電子のコミュニケーションにとつて代わられつつあります。このような社会と対抗できるのは家族の身体的な親密感、つまり夫婦のさずなでしかありません。夫婦間でコミュニケーションがとれなくても、親子間のコミュニケーションがとれるというのは幻想だと言えらるでしょう」と語っている。

さらに、スマップが歌う「らいおんハート」に父が子に対して、君を二番目に愛している。一番目は君の母だ、という内容の詞がある。

夫婦の関係が、しつくり、親密に、ありふれた言葉で表現すれば「仲が良い」ならば、妻の気持ちは安定する。そうすれば些細なことにオロオロすることなく安心して子どもと関わる事ができる。夫の具体的な協力がほとんどなくても……実際に世の男たちは多忙で、現実に家事、育児に参加できないこともある……妻の不満は減る。

もちろん夫婦仲がどんなによくて、子どもたちが手のかからない子どもであつても、小さな事件は次々に起こるし、葛藤はある。それでも夫婦の関係がオープンで、対等で、認めあえる仲間ならば、おおかたの問題は片づいていく。私は自分の体験から、そう思う。

私の行き詰まり

夫を語る前に私のことを少し書きたい。私自身多くの屈折した、未解決問題を抱えて大人になった。自分の気持ちに素直になれず、自信もなく、打算的で狡い。夫や子ども、他の人に期待

してばかりで、自分では努力せず、手は汚さず、恥はかきたがらず、かつこうばかりつけたがる。人をコントロールすることなど不可能なことなのに、操作しようとする。だから満足することがない。いつも欠損感を持っている。そんな私が仕事を辞めて、楽しそうな専業主婦になり、子育てしようとしてもうまく行くはずはない。

子どもには目も手もかけてやろう。ゆつくり、ゆつたり育てよう。日々優しい気持ちで暮らそう。と理想を掲げ、夢を持ち、私の子育ては始まった。しかし、専業主婦の子育てはご飯を食べさせ、散歩をし、洗濯をして、そうじをする。お昼寝をさせ、絵本を読み、お風呂に入れる。毎日同じことの繰り返し（それが『くらし』で大切なことなのだが）で刺激のない、退屈でつまらない日々だ。

きれいな服を着て、長い爪にマニキュアを塗り、仕事を持ち、友人と食事をし、でかけたい所に自由に、自分の歩幅で出て行ける。たまに男から自尊

心を満足させられる言葉を囁かれる。そんな独身時代がなつかしい。「のんびり、ゆつたり」は「刺激のない、つまらない」と同義語と気づいた時には、子どもという存在がニコニコしたり、フニャフニャしたり、ベエーベエー泣いたりして、私の横にいた。世話を怠れば、不潔になり、死んでしまう。未熟で頼りない母ではあったが、小さくて、弱くて、可愛い子どもをほったらかしにしてまで、自分勝手に行動することはできなかった。

夫は私の気持ちには気がつかなかった。私は彼に心のモヤモヤを語らず、彼もまた結婚したら、私のことなど興味の外的ような生活をしていたからだ。

たまに主婦仲間のこと、育児のことで愚痴るようなことがあれば、彼は「あなたまで、そんなくだらない人の悪口を言うの?」「子育てなんて五年の辛抱だよ。後は自由が待っているんだからがまんしなさいよ」あるいは「ばく何したらいいの?」となる。「く

たびれて帰ってきてるんだから、そんなどうでもよい話は勘弁してよ」というニュアンスだ。私は彼の気分を損ねたくなかった。彼にできた妻、すばらしい母、優れた人間と思われたかった。不平不満は自分の内に飲み込むようになった。

多くの人に出会い、本を読み、自己変革の大切さを知り、自分のことを少し理解しはじめた今だから、当時の私の気持ちは受け止められる。彼にも「ただしゃべりたいだけ、うなずいて聞いてくれる人がほしいだけなの」と説明できる。あのころの私は無知だった。夫も若かった。

公民館で学びはじめた私は、上手とはいいがたいが、少しづつ、夫に自分の気持ちを伝えられるようになった。ある日、

「あなたは以心伝心が好きみたいだけど、私がしてほしいことがわかるの? 私はあなたのことを観察しているから、『してほしいこと』『してほしくないこと』わかるよ。でも、それをあなたは

あたり前だと思っているでしょ。で。あなたは私のこと理解している？ あなたがこうしてくれたらいいなあ、と思うこと何度もあったけど、伝わらなかったみたい。やってくれたためしないうね。ちょっと悲しかった。少し傷ついた。しゃべらなくてもわかるなんて嘘だよ。あなたにはしゃべらなければ伝わらないみたい。以心伝心なんてよく言うわ。あなたは私に対して怠

けていない？」と言った。夫は驚いた顔をして、ちよつとの間を置いて「ごめん。その通りだ」と言った。

当時夫は、数人が組んで、小さな飛行機に乗ることを仕事にしていた。スケジュールは早朝だったり、夜中だったり、数日、家に帰らないこともあった。天気の状態、他の諸々のことでフライトがキャンセルということもあった。せめてそんな時は家に帰って、私

や子どもたちと一緒に過ごしてほしかった。そうしてくれていたら、私に余裕が生まれ、上手に家庭生活を送る知恵が生まれていたかも知れない。

ところが彼は、クルーの人たちとマージャンをしていた。私の二人目の出産の時は、雀荘の電話番号が入っているマツチを渡しながら「家にいなかったら、ここに連絡してみて」と言った。

私も働いたことがあるから、気晴らしの必要性は理解する。つき合っても大切だ。でも育児をしている私だって気晴らしはしたい。いつも子どもとばかりでは思考が止まる。大人との落ち着いた会話もしたかった。そんなに大きな望みもなかった。食事をともにし、「よくやるよね。ご苦労さん」のひと言がほしかった。

夫にとっても私は都合のよい女だった。彼にとつてうるさいこと、めんどうなこと全部を引き受け、生活を整えていた。私ばかりでなく、日本社会にはそんな妻たちが少なからずいる。二人で家庭を築くとか、人生と一緒に歩



むということには、ほど遠いものだった。私の不満の鋒先は子どもたちに向けられた。

私が変わる

対等であるはずの夫を強者と思い込み、気持ち伝えること、彼とともに何かを創り上げることを、なかばあきらめていた私のエネルギーはすべて、弱い立場にある子どもたちに向けられていった。そんなことで良好な母子関係は結べない。

今多く新聞に取り上げられている、幼児虐待の当事者になっていたかも知れない。あるいは子どもたちをコントロールすることに夢中になり、自立を妨げる母親だったかも知れない。そんなことを夫に話すと「おおげさなんだから」と言う。

しかし、事件はとても些細なことに端を発する場合が多い。少年たちの犯罪も、春菜ちゃん事件も、夫婦の危機も、最初は小さくて、つまらないこと

だった。それが積み重なり、あるいはマリモ状態に形づくられ、事件へとつながる。だから本人たちでさえ、事件を起こした明確な理由を語れない。

あのころの心のつぶやきはこんなふうだ。「私はどこか、何かが変だ。まちがっている。子どもは可愛いし、大切で、いい子に育てたいと思っはいる。なのにどうして、こんなふうになってしまうのだろう。このままでは、子どもも私もダメになってしまう。なんとかしたい。でもいったいどうすればいいんだろう」。

キャンプで「父」になる

私ひとりが悶々とし、ジタバタしていた。図書館に通い本を読み、公民館で自分を知るための学びに没頭していた。それでも日常は淡々と過ぎ、暮らしは続き、子どもたちは成長していった。再び夫の転勤で神奈川に移り住んだ。

まもなく夫は「丹沢にキャンプにで

かけるから、ランドクルーザーを買う」と宣言し、ワゴン車からRV車に買い換えた。そのころから私たちの暮らし方が変化していった。

毎週のように近くの山や川にでかけた。長い休みの時は、遠く北海道、四国にまででかけたこともある。テント、イス、ガス、毛布、時には飼っていたかぶと虫、くわがた虫十数ひきもひき連れて。トイレを作り、料理を作り、波乗りをし、夕陽を眺め、風に身をまかせ、よく遊んだ。

台風と一緒に移動した時のこと。風雨で倒れそうなテントを夫は一晚支えていた（テントのなかにパラソルを入れるという方法で）。その中で私と子どもたちは安心して眠った。

何でも私がやっていると思っていた暮らしが、キャンプ生活では逆転した。力も技術も私の比ではない夫に驚いた。数日過ごすためのあれやこれを次々に作りあげた。私は久し振りに、というより初めて「四人は家族で、夫は子どもたちの父親だ」と思った。

結木美砂江さんの『みんな悩んでママになる』という本のタイトル同様、父もまた、だんだん「父親」になるものだ、と思った。

パプアニューギニアで暮らす

大いにキャンプを楽しんだ暮らしも、パプアニューギニアへの夫の転勤が決まり終了した。用具一式は友人たちに取り次ぎしてもらった。転勤、引越は慣れたものだったが、海外赴任は初めてのことで戸惑った。ヨーロッパ、北米、アジアの大都市とは違い、でかけた人々からの情報が少ない。

ある情報提供者が「家に帰ったら、腰ミノつけて、手にヤリを持った人が、冷蔵庫を開けて、物食っていてびっくりしたことがある」と笑い話のような話をしてくれた。「マラリアには気をつけるように。でも気をつけようがないか」。

興味半分、怖さ半分でパラダイスの

国へでかけて行つた。

そこでの暮らしが家族のきずなをさらに強くした。夫が家族の一員として家庭に参加し、リアルな姿を子どもたちの前に見せた。日本のように手つとり早い楽しみが存在しないので、よく他の人たちを食事に招き、旅行をした。



四人は一緒に居る時間が多くて、関係は深く濃くなり、だれかのせいにして責任逃れをしては、生活が成り立たない、ということを理解した。自分たちで考え、協力し、互いにおもいやらなければ何事もはじまらず、楽しめず、チリチリに吹き飛ばされそうだった。現に吹き飛ばされる家族は少なくない。家族で海外赴任を経験すると、「離婚する」か「以前よりずっと仲良くなる」かどちらかだ、という話がある。本当だと思う。

自分たちの常識でやっていけないことも多かった。一歩まちがえば命にかかわることもあった。夫の自信は揺らぎ、私や子どもたちの意見にも耳を傾けてくれた。家族のだれもが条件付きでない「個人」を受け入れていった。同じ土俵に上がったということだ。

何かと苦勞の多い(車の破壊、マラリアにかかる。わいふ二六二号、二六三号参照)パプアニューギニアの暮らしではあったが、そこで私たちは「家族」をした。けんか(一種のコミュニ

ケーション)した分仲良くもなった。

「こういう国で、こんなに楽しんで暮らしているのはあなたぐらいだ。あなたがいないければ、ぼくはここで暮らせなかったよ」と、初めてお誉め?の言葉をもたらした。ようやく彼に認めてもらった。

父である夫の現在

早いもので日本の暮らしに戻り三年が過ぎた。帰国当時中一だった娘は高一に、小四だった息子は中一になり、新しい学校で新たな体験、人間関係を作っている。

息子はバスケットボール部に入り、毎日くたくたになって帰ってくる。夫もバスケットをやっていたので、二人は共通の話題で盛り上がる。さいたま新都心にできたスーパードリーナに、国際バスケットボール大会観戦にも二人でかけた。休日には中学校にでかけ、子どもたちと一緒に汗を流している。

娘とは携帯電話のことで話し合っていた。携帯を持つためのエチケット・使うルール、若者たちの非常識を批判しながらも、「携帯は時代の必需品のような道具だから、絶対持たせないというのではない。高二まで待ったら買ってやろう」という具合に感情的にならず、娘の涙にも負けず、大人のスタンスで話してくれた。

その姿を見て、夫は充分に子どもたちの「父」をやってくれている、と思った。

おわりに

二人の「父」を紹介して終わりにしたい。ひとりはおーストラリア人、もうひとりはお日本人だがオーストラリアに住んでいる。二人に共通することは、子どもたちに生きる術、人間としてのマナーを生活のなかで教え、伝えている(母親たちも同様)、ということだ。ナイフの使い方、庭の手入れ、食事の後片づけ、犬との遊び方、来客へのあ

いさつ、公の場でのドアの開け閉め、エトセトラ。時に厳しく、時に優しい。学力至上主義ではない。留守がちな男たちではあるが、家に居る時には、自然に子どもたちが父のもとに集う。

娘は、こんな「父」たちを「この家のボスはやっぱりおじさんだね」と表現した。私はだれが中心でもいいと思うのだが、この二つの家庭はどこかホッと安らいだ空気が流れていて居心地がいい。たったひとりで、しゃかりきにがんばっている家庭にはない雰囲気だ。

「父親不在」といわれる日本の分断された家庭では、それぞれが大きな負担を担っているわりに、伝えるべきことが伝わらず、子育てに効果があがらない。

社会性のある、世界の人たちとタフに語る何かを持った大人を世に送るため、いまいちど夫婦の関係を見直す必要がある。子育てのため、という意味ばかりでなく、その後続く長い夫婦二人の時のためにも。

典型的日本の夫？

匿名

結婚して十九年、子供は中学三年生の男の子一人です。企業戦士という言葉がピッタリの夫と三人家族です。お互い三十歳過ぎてのお見合い結婚で、

当時の私は子育てと仕事が両立できるといって、お仕事を、おかあさんはおうちで洗濯？という考えでした。（のちにこの図式の中で私はもがくことになるのですが）。

結婚して三年間、子供に恵まれず二人だけの生活でした。疲れきって夜遅くに帰ってくる夫との間に会話はありませんでした。夫は夫、私は私、自分の楽しみを見つけて豊かな人生を過ごそう、などと思いが、さほど不

満も無く夫の世話をしながら、いつかは訪れるであろうベビー誕生の日を待っていたのです。

高齢出産で産まれてきた子供は、私には何物にも代え難く正に掌中の玉でした。夫の仕事は増々忙しくなり、休日は体を休めるために寝ているか読書しているかでした。夫は読書すること、仕事のストレスを解消できると言っていました。ほとんど家事、育児を手伝ってくれない夫に不満は出てきたものの、昔の主婦の大変さに比べたら今の私の状態など、私の我がままだろう、私の体をもっと丈夫であつたらこんな不満も出ないのにと、我が身の不健康を呪ったのでした。

私も子供も夫のお給料が無ければ暮らしていけないのだから、夫に気持ち良く仕事をしてもらわなければと、夜の授乳の時期や子供の具合が悪い時などは、夫には一人で別の部屋に寝てもらいました。今考えれば、私のこうした間違った気配りが夫婦の関係、私と子供の関係、強いて言えば家族三人の関係をおかしくしてしまったのだろ

うと思います。

子供が、二歳くらいの時でしょうか、いつものようにゴロ寝をしながら文庫本を読んでいる夫の所に、くっついてきました。すると夫は、「うるさいなー。向こうに行つてろ」と夫には珍しい強い口調で言ったのです。私は驚きながらも「おとうさんは疲れているから、おかあさんと遊ぼうね」と言い、子供を夫から離して、絵本か何か読んだのです。

私は平静を装いながらも、心の中では（何という人だろう。お見合いの時は、僕は子供好きなので……などと言っていたではないか。嘘つき!! それ



にしても何と可哀相な我が子よ。父親とのスキンシップはとも少くないのに、休日のわずかな時間も相手にしてもらえないとは!! よし、こうなったら父親の分まで私はこの子を愛してやろう」と叫んでいました。私は一人でカッカし、一人で勝手に心に誓ったのです。夫には何一つ言わずにです。今思えばこの私の考え、行動もまた全ての間違った元だったのでしょうか。

この出来事が私にとって心に残る第

一回目の「父親としてのわが夫」事件です。夫婦の会話がほとんどなく、私は夫が何を考えているかわからないまま、きつとこうだろうと勝手に思い込んでいた時代です。

今から三年前に夫にその時のことを話したのですが、夫は、「そんなことあったかな。そんなこと、言っていないだろう。覚えてないな。仕事が忙しかったからな」ですって。

さて、こうして父親から見離された

(と私が思い込んだ)二歳の息子と教育ママゴンの母子一体の生活が始まった訳です。

今でこそ最悪の状況と思えますが当時、私は全くそのことに気付いていません。私と息子は、勿論似ている所もありますが、赤ちゃん時代を過ぎてからの息子は私にとってエイリアンそのものです。十五歳の現在も。

几帳面で融通のきかない母親と超アバウトな息子との二人だけの家庭生活(父親はお客様みたいな存在)がどんなものか、賢いわいふの読者の皆さんには分かっていただけたと思います。

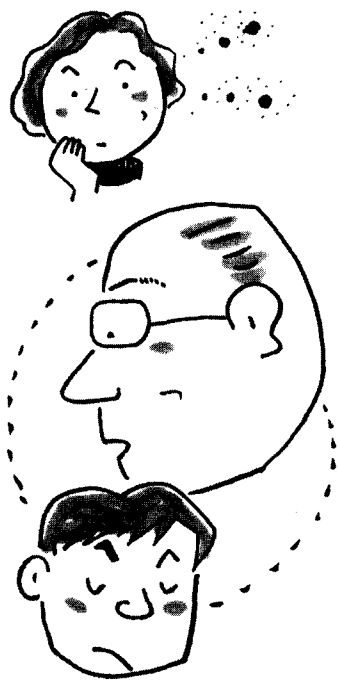
息子が小学校四年生の時、クラスが今でいう学級崩壊のような状態になりました。息子は何人かのお子さんと一緒にその一端を担っていたのですが、優等生だった私には許し難いことです。半分ヒステリー状態で夫に相談するのですが、ウンともスンとも言わない夫、のれんに腕押しとはこのことかと、私にとっては人生で初めての経験です。会話が成り立たないのでから。

夫もまた私にとってエイリアンだったのです。

結婚以来、初めてものすごい夫婦喧嘩もしました。この時点では夫の気持ちが全然分からず、夫とは心の交流を持つことはできませんでしたが、当時は校長先生、息子の同級生のおかあさん、おとうさんに支えられ、息子の自我の目覚めという通過点を、私はくぐり抜けたのでした。この時に何人かの方から「男の子なんだから、これからはおとうさんも子育てに参加してもら

わないとね」とアドバイスを受け、私もそのことによく気づき、夫に子育てに協力して欲しいと頼むようになっていました。子どものしつけ方で私の考えは控え、夫の考えを取り入れるようにすると、良くも悪しくも家庭の中が変わってきました。

ある日、何が原因かは忘れましたが、夫が子どもをすごく叱りました。素直にごめんなさいと言えない子なので、子供は意地を張り父親のいうことをきかない。結局、父親は「そんな子はお



ていけ」と子供を外へ出してしまいました。息子が小学校六年生の寒い冬の夜です。そして夫は私に言いました。「僕が全て対処するから君は口出ししないように」。寒空に放り出された子供は可哀相と思いましたが、私は心の中で（何と頼もしいおとうさん。素敵。あーこれで私も安心して任せられる。嬉しい。今までの夫婦喧嘩も、学校へ日参した苦労も無駄ではなかったんだ）と思い、何とも言えない落ち着いた気持ちで布団に入りました。こんな気持ち本当に久し振りでした。しかし、しばらくすると夫は外に出した息子はそのままに、自分は布団に入り、寝込んでしまいうです。この時も仕事で忙しい時で疲れはたまっていたのですが、まさか眠ってしまうとは……。

夜中の十二時を過ぎ、寒空の中にいる息子を思うと私はいてもたってもいられません。しかしここで私が行動を起こしたら今までと同じ。躰に關しておとうさんは部外者になってしまふ。そう考え、しばらくはじっと我慢して

いました。しかし時は過ぎるばかり。

そのうち夫のイビキが聞こえてきました。私は夫を揺り起こし、「どうするの? もうこんな時間よ」と言うと夫は、寝ぼけまなこで「う言いました。」「あとは、おかあさん頼むよ」これが私にとっての「父親としてのわが夫」第二の事件です。

さて、最後のエピソードです。息子中学一年生の夏休み前のこと。学校から呼び出します。ちよつとした事件があり、かわつた保護者は夜七時に学校へ来るようにとのこと。メンバーを聞くと、小さい頃から地域で問題を起こしている家庭がいくつか入っています。息子を育てて十余年。多少は肝つ玉も据わつたものの、受話器を置いた手は冷たい汗をかいていました。そんな時、夫から「これから帰る。夕飯頼む」と電話です。神の助けかと思いました。

事情を話して「行つてくれる? 一緒に行つてもいいし」と尋ねると「僕は(いなくて) いいよ」と即座に答え

が返つてきました。ヤダヨ、ソナナノ、イカナイヨ、というニュアンスです。その時の声の調子は普段の夫のそれではなく、子供が母に甘えるような調子でした。私はもう慣れつこで「またか」という位の感情しか起きません。

子供と一緒にたつぷり二時間、先生方の注意をお聞きし(良い先生方で感謝しています)夜道をしんみりと歩いて帰ってきました。その時の息子の言葉。「おかあさんと、こうして並んで歩くなんてすごく久しぶりだね。おかあさん、小さくなつちやつたんだね。僕が大きくなつたのか」今回ばかりは息子も「まずいことをした」と反省の色があるようです。家に着くと夫の靴があるので(これで父親にバトンタッチできる)と思いホツとしました。夫から子供に何かひとこと言つてもらい、今日のことはジ・エンドになるだろう。そんなことを考えながら部屋のドアをあけました。夫はテレビの裕次郎特集を見ていて、すっかり酔っていました。私たちに「お帰り」と言つた

かどうか覚えていませんが、酔つ払つた上機嫌の顔で「やつぱり裕次郎はいいなあー」と言いながら水割りを作っていました。

学校でのあの緊張した二時間は何だつたんだろう。お茶碗を洗いながら涙が出てきました。息子は母のその姿を見、父の姿を見、自分の部屋に入りました。我が子はこうやって育つてきて、これからもこういうふうに育つていくのだなと思います。父・母どちらの姿も心の栄養として。

夫の失態ばかりをお話してきましたがこれらは全て、私の側から見た判断で、夫には夫の言い分、考え方があるのです。

息子との接触が少なかつた夫は、今、正に父親になろうとしているのだと思います。現在は、増々仕事の負担が増えていく中で、子供と向き合おうと努力してくれています。私と考え方に違いがあるものの一所懸命「おとうさん」をしてくれていると思います。

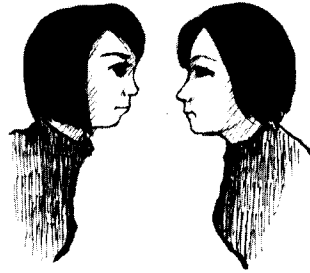
(え・小沢恵子)

縁あつて母娘^{おやこ}

吉武輝子・宮子あずさ著

労働旬報社 一六〇〇十税

一九九六年刊



岩手県盛岡市 伊藤央子（34歳）

以前、宮子あずさ氏の『こんな私が看護婦してる』を読み、その仕事に対する姿勢と、ユーモアのある文章に惹かれた。気負わずに、誠実に看護婦を続け、またブライベートな面も充実している宮子氏をもっと知りたくなってインターネットで調べ

ていて、この本に出会い、初めてお二人が親子だと知った。

この本は、母娘二人の往復書簡という形になっている。自己主張をしっかりと持った両者が、自分の気持ちを率直に書いている。

三十三歳の娘、宮子氏は、文筆業をしながら女性解放運動にたずさわる精力的な母を見て育った。その思想に影響を受け、共感すればこそ、そこから自立するためにもがいた時期があったと書く。

六十六歳の母は、油の乗り切った娘の活躍を頼もしく思いながらも、自分の老いを意識してしまう。そして印象的なのは、他人が娘の活躍を賞賛する言葉にも傷つくことがあると告白する部分だ。

また、娘が独り暮らしを始めよう

と去ったあと、頭ではそれをよしとしながら、この人でさえ声をあげて泣いたという。母としての感情の複雑さを感じた。

宮子氏が大学を中退して看護学校へ行くと告げたときに、吉武氏が猛反対の大立ち回りを演じたという場面も出てくる。迫力満点だが、想像するに凄まじく、ちよつとおかしい。しかし、この母娘のやりとりの素晴らしさは、何よりお互いへの思いやりがずつと流れているところだと思ふ。

「親子にも相性がある」と両者は言う。もちろん、この母娘は相性も良いのだろうが、ときにぶつかつても、逃げずにしっかりとやり合つてこそ築くことができた関係だと思ふ。

（え・渡辺美帆）



エッセイスト・クラブ

ミシン

東京都青梅市 福島みさを（79歳）

昭和九年、私は女学校に入学、裁縫の時間にミシンを習うことになりました。ミシン教室には足踏みミシンが十五台あり、三人で一台を使うようになっていました。家にはミシンがないので学校にいる時だけで、夏休み中は電車に乗りわざわざ学校に行き、ワンピースなど縫いました。習い初めはボビンケースに下糸がからまり、その都度先生に直して頂くのが苦痛でした。

その中に父は私の希望を入れ、蛇の目ミシン（足踏み）を買ってくれました。保証人の欄に叔父の署名捺印のある、分割払いの証書を初めて眼にした時、私は胸が一杯になりました。八人きょうだいの長女を、父一人の働きで女学校へ入れることは、村では珍しい時代でした。

自分のミシンを持てたことで私は俄然元気が出て、むしろように縫いたい衝動に駆られ、婦人雑誌の付録の

型紙を使い、妹たちのワンピースなど縫えるようになりました。末の妹に、セーラー衿の上衣に下がパンツになっている服を着せた時の嬉しさは、皆に褒められただけでなく自分としても最高でした。妹が三人もいたので、付録の写真を見ては「これを縫って」と次々に言われ、忙しかったけれど励みにもなりました。

戦争が次第に緊迫して布地も容易に入手出来なくなると、母の着物や羽織を解き、洋服に仕立て替えました。中でも一番気に入ったのは、母の綿紬の夏羽織、藍染の細かい柄の生地、前身頃の足りない分、紬のピンクの無地を縦四センチ幅に交互に接ぎ合わせ、アコーディオンのように仕立てたものでした。洗髪の普段着で、知り合いの写真館へ父の使いで行き、偶然撮ってもらった手札の一枚が、回り回って見合い写真になってしまいました。



衣料切符制になり足袋も点数制になると、やむなく自分で縫うようになりました。底と足の甲の部分の縫い合わせる時、親指のつま先は細かくギヤザーを寄せ、四本の指の分との合わせる所がコツで難しく、「こはぜ」も売っていないので、不用になった足袋から取ってつけました。

小学校では体操の時間に屋外で運動したり、走ったりする時「はだし足袋」を履きました。それも足に合わせて八文とか八文半（十八か十九センチ位）に縫います。足底に付けるゴムはないので帯芯を何枚か重ねて、かかとは渦巻に、前の方は楕円形にぐるぐる刺し

て置き、甲の部分と縫い合わせるの、針も糸も太いのを用いました。

私は嫁ぐ前に、末の妹の為に肩から掛ける下げ鞆を縫いました。ビロードの赤いショールを解き、かぶせ蓋の回りにひだを寄せた飾りをつけた、飛びきり可愛い鞆を贈りました。

兄や弟にはお祭の半天を縫いました。毎年新しい揃いの半天を染め、仕立てていた祭半天を新調出来なくなった夏、私は黒い縞の着物を半天に仕立て直し、背中に「祭」と白い縞（裏打ちして）を切り抜き、ミシンで縫いつけました。半天の下は半股引きに白足



袋、わらじです。その半股引きには参りました。本来は仕立て屋に注文して作ってもらうのですが、出征して仕立て方は全然分かりません。そこであつかましくも仕立て屋に頼み込み、型紙を貸して貰うことにしました。

「盲蛇におじず」のたとえ、商売道具をお借りしてまでも縫い上げた私でしたが、一生の中で一番難渋した代物ではありました。このお祭大好きだった兄も、翌年の夏海軍に招集され、海の藻屑と消えましたが、きっとあの世でお祭の楽しかったことを話していることでしょう。

こんなに尽くしてくれたミシンも、部品が擦り減ってガタガタになり勤めを終えました。

楽しかった「私の青空」

東京都武蔵村山市 大沢陽子

この頃、「私の青空」を欠かさず見ている。見そこなわないように、時間になる前にスイッチを入れておく。連続テレビ小説はあまり見ないんだけど、今回は、放送のない日曜日はなんだか物足りないと思うほど熱心に見ている。こう気を入れて見るのは「おはなはん」

「おしん」以来のことだ。

健人の試合の前後はそれは緊迫していた。チャンピオンへの夢を捨てきれずに、なずなを置いて逃げた健人をなずなのお父さんは許していない。健人の応援に行こうと誘われた時、「ノックアウトされるとところを見届けてやる。それでチャラだ」と言う。でも、ほんとうにノックアウトされると、夢中で駆け寄って「立て、立て、立ってけれ」と叫ぶ。その真剣さに思わず笑ってしまった。なずなのお父さんお母さん、健人のお父さん、のり子のお父さんお母さん、みんな好人物だ。

健人をお父さんお父さんと慕っている太陽を見ても、留守の時に電話をかけて、ただいま留守にしております、という健人の声をうれしそうに聞いているなずなを見ても、一緒に暮らせるといいのになと思う。九月末の、勉強会の時にそう言ったら、そうはならないと思う、と友人たちは言う。それでは平凡すぎると……どうなるのだろう。放送はあと四日。

健人はジムの上の部屋に寝泊まりし、なずなと太陽は今までどうり母子二人で暮らし、健人とはいつでも会いたい時に会おうという生き方を選んで、ドラマは終わった。

そうだ。こういう生き方もあった。これでよかったと思った。べつべつに暮らして会いたい時に会うなんて、素敵だ。いつか、一緒に暮らしたいと思ったら、

一緒に暮らすようになるかもしれない。

このドラマで作者が言いたかったことは、自分の生きたいように生きるのがいい。みんなそれぞれでいいということ。別れの時はかならず来るのだから、愛する者たちを大切にということだったと思う。

先日、友人が大きな百メ柿をたくさん持ってきてくれた。シロと夕方の散歩に出かけて留守にしていたので、すぐにお礼の電話をした。「うちのんはあした田舎に帰るんで、その前に採ってもらおうと思って」と友人は言った。



ご主人は帰ったら、もう戻って来ない人だ。正式に離婚したと友人から聞いたばかりだ。何かとびきりおいしいものを買ってきて贈りたかったけど、暗くなった山道を自転車を下る気になれなくて、買い物に行かなかった。

翌朝早く、家にある物でおいしそうな物を集めて持って言った。焼きのり、自家製の梅干し、キウイフルーツに似ていてもつと甘い黄色い果物、干しプルーン、煎餅、その他。

まだ六時半ごろだった。いかにも早すぎる。でも早立ちするのだったらその前に届けたい。起きていないようだったら、お礼の言葉をそえて、荷物を玄関に置いてこようと思っていた。

友人は起きて台所で働いていた。「何かひとつでも好きな物があるといいと思って」と言ったら、「そんなふうに言ってもらうとせつなくなる」と言っていた。

なずなさんたちは若いし近くにいるから、そういう生き方もあったと思うけど、友人たちは若くない。持病もある。心細いことと思う。それでも穏やかな自由な晩年を願って、ひとりて生きることを選んだのだ。人それぞれ、生きたいように生きるのがいい。これからの日々が、どちらにとっても穏やかなものでありますようにと、そつと心の中で祈った。

(え・カステランコ)



私は国勢調査員

浅野まどか

書類の点検を終えた市職員が、にっこりと顔を上げて言った。

「はい、完璧ですね。どうも御苦労様でした」

やったあ、これで終わったぞう。しかも「完璧」とは嬉しいねえ。

「ありがとうございましたー」と頭を下げ、二階のホールを出て、ルンリンしながら階段を下りる。

思えば一か月前、この公民館の階段を下りた時は暗い気分だったなあ。そう、九月十三日のこと。「二〇〇〇年国勢調査」の調査員向け説明会が終わって、これから使う書類等一式入りの重い紙袋を提げて下りた時。

まあ一般人は知らないことだから、ここで調査の流れを簡単に説明しておこう。まず事前に担当調査区を地図で

確認後、調査のお知らせを配布しながら、漏れなく、建物や住居および内部の居住状況を把握し、所定の様式で住宅地図（要図）を作成する。その後で調査票の配布になるのだが、それぞれ決められた期間内に行われねばならない。特に配布と回収は手渡しで、その都度、必要事項を記入したり記入漏れチェックをしたりする。その後、家で

整理集計。全体まとめをして提出の運びとなる。

ざっとこれが全容なんだけど、レジュメにしたがっての説明は、やたら速くやたら多く、いろんな注意事項はあるわけで、ホント聞いてるうちに、「何だかんでもないものに応募しちゃったみたい」って暗い気分になされたね。

でも偶然会場で出会った知り合いも、私の隣に座った人も、みんな同様の不安を感じちゃったから、お互いに困ったら助け合うつもりで、名前と電話番号をメモし合ったけど、結局は必要なかったね。それよりいちばん励まされたのは、御年配の皆さんの存在。ホントに、あの日集まったメンバーの平均年齢の高かったこと。周囲の男性といったら、おしなべてリタイヤして時間は十分って感じだし、女性も若く見ても五十代後半、ざっと還暦は過ぎてるってくらいが多いから、アタシなんか、それだけで十分勇気づけられ励まされたね。言っちゃ悪いけど、「この皆様に出来て、若いアタシに出来な

いはずはないでしょう」ってね。いやあ、失礼、失礼。

それにしても、皆さんのその落ち着いたカンロクには参ったね。それって「人生の年輪」のなせるワザ？ なんて思ったりもしたけど、それはともかくホント心強い存在ではありましたよ。

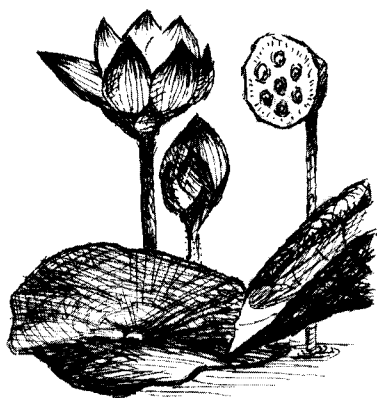
で、いまこうして、無事に仕事を終えて振り返ってみると、随分いろんな人に会って、いろんな話をしたなあって気がする。そもそも調査員は、職務上プライベートなことを知り得る立場なので、自分の居住地区周辺は担当しない。したがって、基本的に知らない人と接するんだけど、何といってもやってくる仕事はセールスなんかと違って、一応「公務」ってことで、チラシ配りや調査票渡しの時点から、結構、好意的に受け入れられたね。期間中は同じ人に何度か会った訳だけど、いたるところで、「御苦労様」とか「大変ですわね」なんて言ってもらえて。

まあ別に大した「苦労」してる訳で

も、また最初に心配した程「大変」って訳でもなかったんだけど、そんな一言って、やっぱり嬉しいものよね。

私が担当したのは、ビル、商店、住宅が混在する二区画で、住宅は一戸建てがほとんど。高齢者のみ、あるいは家族に高齢者を含んでいる世帯が多くて、私がおもに回る日中は、どうしてもその高齢者（面倒だから、以下、『老人』という）と話すことになる訳だけど、さっき言ったように、お互いに知らない相手だからかえって気楽だったのか、こちらが聞きもしないのに自発的に話しかけて来る人が多かったみたい。

私は、結婚してからは核家族で、転勤しながら集合住宅を渡り歩いて来たから、古い一軒家っていうのは、たとえ玄関先に立つだけでもやけに懐かしかった。老人の会話のそのスローペー스는、独身の頃に自分の周辺で交わされていた、故郷のそれと変わらなかったから、一瞬タイムスリップしたみたいだったね。



それにしても、この人々の周りには何てゆつたりとした空気が漂い、時間はゆつくり流れているんだろう。ちょいと後ろの引き戸を開ければ、そこには古い茶箆筒か台があつて、その上には、あの懐かしい黒いダイヤル電話が載せられて、いまにもジリジリって鳴り出しそうな雰囲気なんだよね。フアックス、パソコンだのメカなんて、

ここじゃまったく無縁。ビデオもあるか分かんないね。「IT? 何、それ」の世界。だからって、別に遅れてるって感じでもなく、我々の暮らしてる一般的な日常とは別の世界が、ちゃんと存在してるって感じ。しかも、それがまったく不自然じゃなくて……。

まあ、別世界的雰囲気を保ってるウチっていったら、一番に思い出すのがアシカワさん。老夫婦で住んでるんだけど、夫のヨシオさんは明治生まれの××大卒（ウワツ、すごい秀才）で、銀行の役員までいった人らしいけど（いやあ、これは私が根ほり葉ほり聞いたんじゃないかって、勝手に本人が喋ったんだからね）、八十代のいまでも頭がすっきりと冴えてる。お勉強が好きって言うだけあって、玄関には買ったばかりの本が二、三十冊くらい積み上がってるの。

ええっ、これ、駅ビルの本屋から運んで来たって? そうじゃなくても病院通いをしてる身でしょ、一人とも。頼めば配達してくれるよ、きっと。こ

んなに買ってるんだもん。まあ、いいけど、奥の書斎には本がぎっしりってことは、図書館みたいなのかなあ。でも、ヨシオさんは一日中それでいいかも知れないけど、ヒロコさんの方はかなり不満らしいね。一緒にいろいろやりたいし、やつても貰いたい、そして楽しみたいんだって。なのに、ヨシオさん相手にいくら言っても「馬耳東風」。

分かる分かる、その気持ち。もう二人だけなんだしさあ。ヒロコさんがいくら若いって、一人で家事やるのは、そりゃあ酷つてもんだよ。いろいろお勉強してるんならさ、ついでに、いや急いで「男女共同参画」とか「ジェンダーフリー」ってこともちよつとは知ってよね。ああ、つまり、大正初めに生まれたヒロコさんも昭和のアタシも、同じこと悩んでる訳だから、これは時代を超えて解決されてない、女の抱える問題ってことね。

あ、そうそう、チヨさんのお店「グリーン美容室」も、一歩中に入ればタ

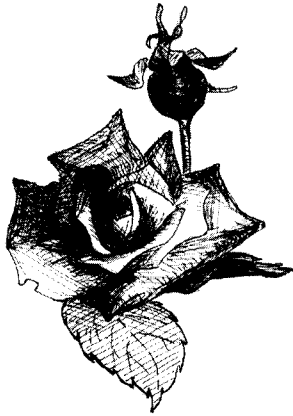
イムスリップするよ。一言で言えば、まさに吉行あぐりさんの「あぐり美容室」の感じ。ま、はつきり言って、外観から既にタイムスリップしてるから、たいていは六十を越えたぐらいの人しか出入りしないんじゃないのかな。

私が行くと、いつも開店休業状態。チヨさんは、四十の頃にダンナさんを亡くした一人世帯の世帯主、この場所で四十年くらい仕事をしてるらしい。もともと器用な人なんだけど、調査票の文字は小さくて読みづらいつてこぼす。だったら、そういう人のための拡大文字の用紙があるからつて言うと、「書き方の説明を読むのも書くのもすべて面倒。アンタ、書いてよ。聞かれて恥ずかしいことなんてないからさ」つてことで、こういう場合、書いてあげるのも仕事のうちだから、一項目ずつ聞いて書き込んでいくんだけど、その間、彼女の半生記というか武勇伝は続く。

戦後、「これからは手に職だ」と思

い、手先が器用で、年頃の娘らしくオシャレにも関心があつたチヨさんは、東京の美容学校で学び、修行したのち自分の店を構える。たぶんこの人、ハイカラだったんだろうね。

一時はこの他にも一店舗持つまでになり、弟子十人を抱えて、「先生、先生」と呼ばれながら二つの店舗を股



にかけ、大安吉日は結婚式場や神社などに向うき、超多忙な日々（うわあ、カッコイイ。バリバリのキャリアウーマン。つまり高度成長期の頃の話ね）。その間に結婚はしたけど、女性系の病気で子どもはなく、そのうちダンナとも死別。で、その後は時代の流れに逆らうこともなく、昔からのお客さんを大切にしながら仕事を続けていっている。

若い人相手に流行を追ったりしないから、新たな設備投資もせず、私が初めてドアを開けて入って行った時は、「うわあ、昔、ウチのおばあちゃんが行つたヨシダバーマみたい……」つて思ったし、チヨさんはそのヨシダバーマの「先生」である「おやエちゃん」（といっても既にかなりのおばあさんだった）かと、一瞬錯覚したくらいだった。

この二階の部屋には花嫁衣装やかつらが置いてあつて、いまでも着付けは出来るっていうけど、実際にチヨさんが花嫁のお支度をするつてことは、



たぶんないんだろうね。

次にチヨさんに会ったのは、十月一日を過ぎてからの回収期間中のこと。調査票を記入したのが十月一日以前だったから、その後、変化がないか確認せねばならなかったという訳。「チヨさん生きてる？」って入って行ったら、一瞬びっくりしたみたい。まさか、私がまた来るとは思わなかっただろうね（ちゃんと生きて貰わないと、この調査票はボツになっちゃうのよ）。「あれから変わりがなかったか聞きに来たんだけど、まさか再婚なんかしてないでしょうね。してたら書き直さなくちゃいけないから」って言うと、「ハッ、ハッ、ハ。再婚してないけど、この通り

ピンピンしてるよ。そう簡単には死ねないね」と返って来る。私達はこんな風に冗談を言い合う仲になっていた。

あと、アシカワさんやチヨさんの他にも、ダンナさんの介護をしながら、日々忙しく暮らしている（実は疲れている）アツコさんの苦勞話。

元女優の奥さんを亡くした後、男手一つで息子を育て上げた、ダンディーなコンドー杜長の、前向きな人生とオシャレの話。

タバコ屋のヤマモトさんの歴史講話「東海道の変遷」などなど……。

それぞれタメになりましたねえ。みんなその辺の普通の老人なんだけど、知識や経験や人生観がいっぱい詰まっ

てる。そして、ホントは誰かに話したくってしょうがない。聞いてほしいことがいっぱいあったんだねえ。

ところで、私の仕事は、みんなこんな風にのどかな相手だった訳じゃあ勿論なかった。忘れられないのは、マツシタビルとイイモリビル。この二つのビルの住人にはなかなか会えなかった。

調査員の中には、ワンルームマンションを担当した人もいたんだけど、一人暮らしの人の生活パターンは様々で、まず調査票を本人に手渡すこと自体、大変だったみたい。いったん連絡が取れば、後は調査票を渡す時に回収日を約束出来るんだけど……。

私の地区でも、学生や夜の仕事の人にはホントに会えなかったね。最初はどんな人が住んでるのか分からないから、朝、昼、晩と時間を変えて、通るたびに寄ってみるんだけど会えないし、連絡してくれるようメモを入れてもしてくれなくて……。こんな時よね、ちゃんと任務が全う出来るのか不安になるのは。

で、最後に残った四軒で最初に会えたのは、マツシタビル・三〇一号のちよつとケバいいオバチャンだった。でも、オバチャンは「ここは仕事の関係でたまに泊まりに使うことはあるけど、住んではいない」って言うので、自宅の方でちゃんと調査するよう頼んで、めでたく(?)パス。

ついでに三〇二号の人のことを聞くと、「話したことないけど、アジア系の外国人じゃないか」って言う。ええっ、ガイコクジン? まずいよ、これはまずい。市役所へ外国語の調査票取りに行かなくちゃならないかも……。いや、それ以前に、日本語全然分からなかったらどうしよう。何語で喋る人? まあ、そういう場合に見せるものは、一応渡されてはいるんだけど……。その二、三日後の昼下がり、何度もチャイムを押した挙げ句やつと現れたのは、白いネグリジェ姿の寝起きのオネエサン。ああ、そういうお仕事だったのね。起こして悪かったなあ。怒られそー。

恐る恐る「日本語ワカリマス?」と尋ねると、「ハイ、大丈夫です」と、流暢そうな日本語が返ってくる。おお、ラッキー。調査票も日本語でOKだって。ホッとしたよ。ついでに彼女の名誉のために言っておけば、記入漏れもなく完璧だった。

さて、もう一軒のイイモリビルはマツシタビルから数軒先にあつて、一階が軽食喫茶、二・四階は一部屋ずつ住居になっている。この三軒はホントに住人がいるのかどうか、店の方とは入口が別になっているので、一階の店主でさえ知らないと言う。集合ポストには電気・ガスの検針票も、私が入れたメモも入ったまま。実際、電気は切られてないらしく、メーターはゆっくり回っている。でも、いつ行っても応答はない。

ある日、四〇一号室のチャイムを押しても、激しくノックをしても応答がないので、ふとドアのノブを回してみた。あらいやだ、開くじゃない。なあんだ、空部屋だったのね、ラッキー。

と思つたら、ナ、ナニ、これ? 玄関に脱ぎ捨てられた靴が二足くらい。窓は開けっ放しでカーテンはなし。ソファはひっくり返り、ファンシーケースは空っぽ。そこら辺は散乱状態。夜逃げにしちゃ物が残りすぎ、住んでるにしちゃ足の踏み場がなさすぎる、その異様な光景にア然。異臭がないことだけを確認し、すぐにドアを閉める。一体この四〇一号室は何なんだ?

そこで、管理者のヤサカ商事に聞くことにする。答えはこんな具合。「二・四階は、ある水商売の店に貸している。その社具寮になっている。ただし、守秘義務によつてその店の名前は言えない。まあ、そんな所は身分を明かしたくない流れ者が多いから、アンタ適当に『分かりませんでした』って書いとけばいいんじゃないの?」

でも、それじゃあ困るんだよね。最低限、名前と男女の別と世帯人数が分からないと。ただ、次の日、偶然二〇一号のオジサンの出勤時に会えたのはラッキーだったね。急いでいたので調

査票は受け取ってもらえなかったけど、渡す日にちの約束は取りつけられたんだもの。やったー。これで、三〇一・四〇一号の情報が得られるかも知れない。

でも、オジサンの約束の日までは少し間があるから、地道に自分の足で稼ごうと、次の日の午後（オミズは午後が礼儀ってもんよな）、また四〇一号を訪ねたら、まさかで中からドアが開き、明らかに寝ているところを起さされて、不機嫌と言わんばかりの若い男が顔を出したからびつくりする。

部屋の中は勿論あの時のままで、何かヤバイ気配だったから、急いで名前を聞いて調査票を渡し、回収日時の約束をしようとする、突然キレて、ボタンとドアを閉めてしまった訳。でも、その時は、まあ二〇一号のオジサンっていう頼みの綱（オジサンは結構人あたりがよさそうだった）があるから、そう心配しなかったけどね。

その二〇一号のヤマザキさんは、キチンと約束の日時に部屋にいてくれた

んだけど、このヒトも面倒臭いらしくて、私が聞き取って記入してあげた。ちよつとワケありみたいだったから「厭なことは、私聞かないから」って言っただけど、「別に困らんよ」って、みんな答えてくれた。

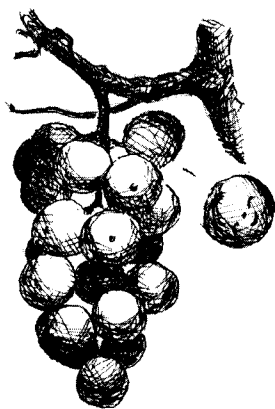
気になる三〇一・四〇一号のことは、残念ながら分からなかった。というのは、勤める店が違うんだって（確かに不動産屋は『同じ店に貸している』とは言わなかった）。同じ商売「クレオパトラ」のビルの三階にある「ミス『J』」だから行ってみればいいと言う。

「ええつ、あのダ、ダイモン町の、ク、クレオパトラの三階？ ヤバそー。ほ、つたくりとかの店じゃないでしょうね」とチョー不安になって尋ねると、「その店の人知ってるから。自分の名前出してくれないし、絶対大丈夫だから行ってごらん」と言うので、教えられた通り、店の始まる前の四時半に出直したんだけど、その時は念のた

め息子に行き先を告げ、五時半に戻らなかつたら警察へ連絡するよう言い置くの忘れなかつたよ。

初めて行った「クレオパトラ」のビルは、そろそろ夜の準備の気配で、やつと下りて来たエレベーターには、黒いスーツのイカツイお兄さんと乗り合わせるといふ運の悪さだった。お兄さんは、デニムのオーバーブラウスにGパン姿の、私の頭のとっぺんからスニーカーの爪先までをジローリと眺め、「アンタここで何してんねん。ここはアンタみたいな汚いオバハンの来るとこやあらへんで」と、いまにも関西弁で絡まれそうな（なぜか、こんな人達は関西弁で喋るもんだという思い込みが、私には定着している）雰囲気、コチコチになりながらドアの開くのを待ってたけど、三階までの時間のオンシク長いこと、長いこと。

やつと下りた三階のフロアでは、やはりモップで掃除中のオジサンがイヤーな視線を投げかけたから、いよいよ「ミス『J』」のドアの前に立った私は、



思わず深呼吸してしまったよ。そして、もう一度、調査員バッジと防犯ベルを確認して入って行っただけど、その時はもう度胸が据わって職業的スマイルをたたえてたと思うよ。

で、中にいたのはやっぱり黒いスーツの、どう見てもお利口じゃなさそうな小柄な男が一人だったけど、全然まともな（常識的な）応答が出来ないヤツで、結局、四〇一号の男の名前と三

〇一号が空部屋だっということが確認出来ただけだった。もうちょつと分かれればよかったんだけどね。

ただ、調査員はここまでやることもなかったみたい。というのは、後で市に問い合わせた時の話では、「大体の様子と分かった範囲での報告を出して貰えれば、後は市でそれなりの方法を取りますから」ってことだったから。それに新聞の報道では、「統計法では、調査に答えなかったり、嘘を書いたりした場合には六か月以下の懲役か禁固、または十万円以下の罰金と決められている」とあったから、そんなことをチラつかせて調査に応じて貰うのかも知れないね、想像だけど。

でも、まあとにかく、こうして振り返ればいい意味で滅多に出来ない経験をしたなっと思えるし、十二日の書類提出は一発合格でめでたく任務終了ってことで、次の日曜日（十五日）の夕食では、家族とともに「御苦労さん」って祝杯を上げたね。子ども達はサイダー、私と夫はスペイン産のスパーク

リングワインで。このワイン、実は例のイイモリビル・二〇一号のヤマザキさん、そう、「クレオパトラ」のビルを教えてくれたオジサン、あの人に貰ったの。

ところで、その後、たまにあの調査区を自転車で通ることがあるけど、外からはちょつと見えない路地裏の様子も、家と家のつながり具合も、そこに住んでる人の顔もみんな思い浮かんで来て、知らないうちにニッコリしてしまふよ。そして、知った顔に出会うと、まるで以前からの知り合いみたいに、お互い「こんにちはー」って挨拶して、ちよつとあったかい気分になる。きつとそんな時の私って、昔、CMでやってた「ニッセイのおばちゃん」的スマイルを振りまいているんだろうね。

（このストーリーは、事実に基づいて構成されていますが、登場する人物、会社、団体等の名称は、すべて架空のものですよ）。

（え・橋本美智子）

あ
なたへ

ス
マッシュ

二八六号「息子に裏切られ続
けて」の

大味恵子様へ

匿名 (40歳)

ホントに常套句のようでいやなの
ですが、お気持ちがよくわかります。
けっして慰めでも同情でもなく、渦
中にいる立場として。

私の友人は、お嬢さんが拒食症に
なったとき、「結局母親が原因とい
うことになるらしい」と話してくれ

ました。両親そろってお医者さんで、
恵まれた家庭に育っているように見
えた娘の友達は、高校をリタイア。
まさにヤマンバギャルのいでたちで
渋谷の街を闊歩し、大検のために通
っていた学校もやめました。彼女も
携帯電話の通話料が、一時一か月十
万円は越えていたようです。

我が家の娘も例外でなく、一か月
四万円を越えたときがありました。
パートで時給八百十円で働く立場と
しては、情けないやら腹立たしいや
らで、かなり落ち込みました（言う
までもなくその金額が惜しいのでは

ありません。使われ方が悲しいので
す）。

携帯電話やパソコンなど、電腦と
言われる物たちがいつの間にか、ど
の家庭にも入り込み（実際、我が家
にもパソコンが三台あり、久しぶり
の『わいふ』の購読申し込みもメー
ルでしました）、その物たちとうま
くつき合う方法が、まだ世の中では
暗中模索の状態だと思えます。何だ
か、振り回されているようで悲しい
です。

親の背を見て子は育つ的な、私た
ちの親たちが育ててくれたような育



て方が、今の時代ではもう通用しないような気がします。

かつて少年犯罪などのニュースを見て、オヤノカオガミタイ的な事を心のどこかで思っていました。今はオヤモタイヘンダナと思うようになりました。

とまれ、大味様。今は渦中だと思っています。辛いけれど、ここで落胆せず気持ちをリラックスさせていきましょう。私も自分自身にそう言い聞かせる事にします。

うちの息子は……

匿名 (42歳)

二八六号の「息子に裏切られつつけて」を、他人事とは思えずに読んだ。

当事者の親御さんにとって、本当に悩みの尽きない心配な日々であることは、他人の想像を越えるだろう。

そのことは十分理解した上で私は、息子さんが中学まではきちんとしていて、高校も卒業し、そしてアルバイトにはまじめに通っているということに、すごいじゃないですかと思



った。

今の私は、高校を受験し合格した人を、心からすばらしいと思う。私の息子は中学三年生で、勉強は大嫌い。高校に進む意味も目的も、はっ

きりとは考えていない様子。当然成績も悪く、どこまで下がつていくのか、学校でも底辺だ。いつからこうなったのか、どの辺で意欲を無くしたのか、思い出そうとしてもわからないし、過去のことはもう、どうしようもない。

やればできるのにと思うのは、親ばかの勝手な押し付けか。本人は「勉強は嫌いなんだ」と言って、ノートや教科書に向かうというのをほとんどしない。ほかに打ち込むことといえば、以前はテレビゲーム、最近は浜崎あゆみ。

アイドルもゲームも多少なら誰でも夢中になるが、自律する精神が育っていれば、ほかのこともした上で楽しむことができる。幼いころからの私の対応がまずくて、こういう少年にしてしまったのか、と反省しても嘆いても、接し方を変えても、彼はどうにも変わらない。

大味さんと同じで、私たちも甘やかしすぎず厳しすぎず、ごく普通に

子どもを育ててきたつもりなので、どうしてこういう子になったのかわからない。特に、前より親に対して身構えている感じが気になる。

自分を責めては落ち込む。夫は、勉強嫌いで高校にいけないなら、社会に出して経験させる覚悟はあるという。

勉強は必要に気づいたらいつでもできるとはいえ、十代での学校という社会経験で得るものは大きい。ひとつだけ私が救われるのは、息子の友達がみな感じのよい家庭の子だということだ。

高校だの勉強だので、自分がこういう立場になるとは思っていなかった。学業成績や素行が悪いのはそれぞれの事情がある。親の責任って、どこまでなのかな。マスコミでは成人の容疑者や有名人の、高齢の親が謝ったり責められたり。見たくない。親ならしかたないの？ 子どもを産むときから、覚悟しなきゃいけないのかな。

九月二十二日の朝日新聞「ひととき」で、二歳の子を病院に連れて行くのが遅くなり、医者に「母親の責任」といわれて涙した人の投稿を読んだ。

そんなことないよ！ だけど、息子のことは私の責任かもしれない。そんなことないってまだ言えない。

育てたように 子は育つ

埼玉県浦和市

麦穂

……と書道家の相田みつを氏は言ったけれど。二八六号の大味さんの「息子に裏切られつづけて」を読んだり、身近で聞いたが不登校になり、時には家の中を滅茶苦茶にしてしまう小五のお母さんの話、彼女もごく普通に接していたと言う。本当に「育てたように子は育つ」んだろうか。私の息子は高一。ここ数か月家族

とすっかり話をしなくなってしまう。家族と顔を合わせるといつも眉間に皺が寄っている。そのくせ友達とは楽し気だ。よその大人（友達の親たち）とも普通に話すらしい。私としては誠に感じがよろしくない。

先日夕食時に何度呼んでもテーブルに着かず、ベッドに潜っている彼をたたき起こした際、久々に言い争いになった。その時彼の単発の言葉で感じた。今までは「思春期のそれ」と軽く思っていたが事はもう少し重症、私が嫌いになったらしい。だから私とは話どころか顔すら見たくない。存在すら鬱陶しいのだろう。

「責任」と言う言葉をよく使った。彼の行動の防御策に「そんな事をして責任は取れるの？」とか未成年の内は子どもの「責任」は親が取るのだから親の言うことは聞け、二十歳過ぎたら自分の「責任」の取れる範囲で好きなことをすればいい、等。親としては当然の言い分だと今でも思っているが、聞かされる方とし



ては「責任」の安売り、押しつけてうんざりだったのだろう。もっと違う説得力のある言い方は無かったのかと、自分のボキャブラリーの乏しさを反省しても時既に遅し。私の思いは通じぬまま息子は心の扉を閉じてしまったようだ。ありや、私が原因か。「育てたように子は育つ」、私の場合には当てはまる訳だ。彼が小学校の頃、同じ布団に入って夜中まで話しが止まらなかったこともあったのに、今は彼の声を聞かない日もあ

る。人生の先輩として教えたいことは未だある。なのにもう私の声を聞く耳も話す口も彼は持ち合わせていない。

この夏休みの終わり、風前の灯火となった金魚に、手厚い看護を施し見事復活させた息子。その優しさに感動したが、今私が病や怪我で倒れたら、彼はあのような看護をしてくれるのだろうか。

大味さん、自分を責めるのは止めましょうねお互い。息子に振り回されず、自分を大切に楽しんで暮らしましょう。子ども達の今の行ないは先で必ずツケとなって自分に回ってきます。その時頭を抱えて貰いましょう。

似た経験の先輩より

大阪市城東区 布施幸子（68歳）

「『墮落』、『バイク』、『進級』息子は裏切り続ける。親は全力投球で正しく生きてきたにもかかわらず：

：

私自身の似た経験を大味さんにお伝えしたく存じました。

一変した息子が親の言葉を無視するようになり、中学で厳禁だったバイクの免許をとり専門学校を中退してアルバイトをし、車の免許を必死でとって乗り回すようになった時、

「夫も私も全力で世間並みの生き方をしてきた。息子は親より幸せになつてほしいと学費も貯めてきた。なぜ？ どうして？」と悩みました。

お寺で占ってもらうと「運は強い。思いやりのある反面でこでも動かぬ。晩年は多幸」と言われお布施を弾んで帰ったものの、「路線から外れたら取り返しがつかない。ぜひ学歴を」と案じつづけました。息子に説教し、そのことで夫婦げんかも数しれず。でも八年前に夫は「あいつはあいつでがんばるはず。信じて放つとけ」と言い残し他界しました。

結局、息子はいわゆる立身出世から遠く、安い給料で真剣に配送運転

手として働いています。今、私はそれで十分だと満足し、昔の「私は全力で辛抱づよかった」と説教したのは、大きな思い上がりだったと反省しています。

最近老人ケアハウスの見学に行き、「ここでは誰もが茶華道、陶芸、カラオケを老いの楽しみとし、全員仲よく秩序に従ってほしい」と説明を受けて、入居はまっぴらだと嫌気がさしました。登校許可などの子供心が少し分かった気がしました。

もちろん大味さんと私とは違いますし、でき得るなら、ご子息がご両親の親心に沿われるのが一番かも知れませんが、ご参考までに。

心と体の不思議な メカニズム

奈良県生駒郡

高松恭子

西医学で救われた長野さんの文を

興味深く読んだ。実は私自身もこの健康法を実践していたからである。わが家の風呂場を覗いた人は、皆ふたつある浴槽を不思議がったものだ。これは長野さんの文にもあったように温冷浴のためのものである。

玄米をはじめとする雑穀類や野菜は好きな方だし、固い布団で寝るのはこどものころからの習慣だった。だからそれほど強い意思がなくても、私には実行できる健康法だった。六年間ほどこれにはまっていただろうか。にもかかわらず、私の気管支喘息はひどくなるばかりで、精神まで病みそうになってしまった。

この健康法を実践して、喘息が治らなかつた人はいないとまで言われたが、私はいつも体が疲れていて何をする気力もなく、ひどい冷え性と肩こりと、新興宗教のしつこい勧誘に悩まされていた。

一年発起して水泳を始めたのはそんなころである。あれから二十一年、紆余曲折はあったものの、あのほど

かつた喘息の発作はもう何年も起きていない。

人間本来の自然治癒力を引き出すという、西医学は確かにすばらしい理念があると思う。なのになぜ私には合わなかつたのか。それは多分、肉はだめ、牛乳はだめ、白砂糖は毒、白米はカス、白パンもカス、温野菜もだめ、魚も丸ごと食べる小魚以外はだめといった具合に、それまでの生活を否定するところから、出発したのがまずかつたのだと思う。

結局私は、いつもだめなことの呪縛に怯え、心身共に萎縮していたのだろう。

水泳で体力がつき自信を得ると、少しずつ呪縛は解けていった。きちんとした食生活の基本は守りつつ、何でも食べ出した。もちろん毒だと言われていた朝食もきちんと食べるようになった。体力はつき、疲れなくなつた。いつのまにか肩こりも冷え性もなくなつた。

ほかに病気になるので健康とは

言い難いが、否定のない生活は、生き方を前向きにしてくれた。長野さんにとって西医学が福音をもたらしてくれたのとは逆に、私はその呪縛から解き放たれることで、心の平安を得た。お互い、自分の意思でそれを選んだことが心の栄養素になったのかもしれないね。

私の「公園育児」

宮城県岩沼市

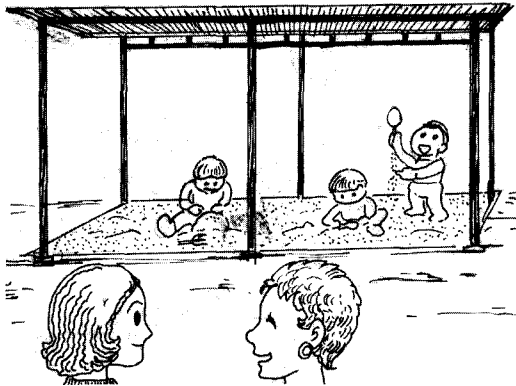
横山のり子(37歳)

二八五号の座談会では、何となく「公園育児ってこんな閉鎖的な社会で、暇な専業主婦がべったり群れているもの」という否定的な雰囲気でもたまっていましたよね。でも私の場合は全く違っていたので、「そんなふうに関心つけないで」と声を出したくなりました。

第一子を産んで半年で専業主婦になった私は、それから引越すまでの

四年半、公園育児を楽しみました。

歩いて五分程の所にある公園に、毎日のように通いましたが、それは決して義務ではなく、それぞれが都合のよい日に、都合のよい時刻に出



かけているものでした。用事があつたり、気が乗らなかつたりすれば行かない。時刻も、早く家事が終われば十時前に行つて一番乗りするし、遅くなつた日は十一時半頃になつて

やっと顔を出すこともありました。それも、皆それぞれでした。

子どもの多い地域だったこともあり、たいてい十人程度の子が集まっていました。私も初めのうちは知り合いもなく、居心地が悪かつたのですが、すぐ声をかけてもらい、知った顔も増えていきました。そして知らない子を見かけると、声をかけて仲間に入れてあげるように、心がける立場にもなりました。

この公園で子どもを遊ばせ、よそのお母さんたちとおしゃべりをするので、私はどれだけ助かつたかわかりません。初めての子の時は、食べさせること、ねせること、遊ばせること、日常のひとつひとつが試行錯誤の連続でしたが、同じ立場の人たちと情報交換をすることでホッとしたり、ストレス発散したり、参考になりました。

子どもが服を汚すことをいとわず、水や泥や砂で存分に遊ばせて、最後に水飲み場の水道で体を洗って

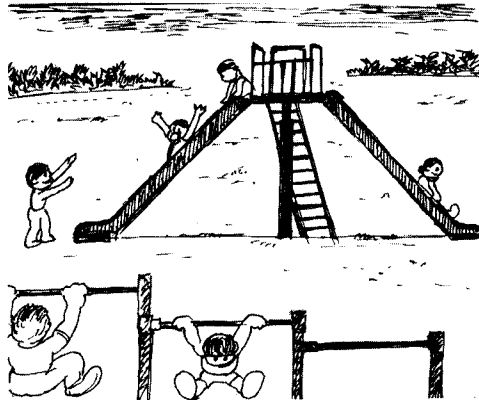
着換えさせて帰る先輩たちを見て、私は目からうろこが落ちる思いでした。「そうか、そうやって遊ばせていいんだ」

砂場用のおもちゃも、ごく自然に「誰のを使ったって気にしなくていい、帰る時に返せばいいんだよ」と皆おおかでした。そもそも一―二歳の子なんて自分の物も他人の物もわからず、手近にあるものを使って遊び、またすぐ別のもので……という感じでしたから、いちいち「それはよその子のだからダメよ」なんて気を遣うのもお互い面倒だったのです。

こうして皆で子どもを見ながら、うちの子もよその子も一緒に遊んでやりながら、親同士もずっと一緒にいる時間を、私は「何という時間の無駄」とは思いませんでした。育児の時間を私の人生のじやまな時間だとは考えたこともありません。

自分の子どもが二人になり三人になると、この「みんなでみんなの子

をみる」という方式には助けられました。一歳の子と三歳の子では公園での遊ぶ範囲も動き方もまるで違います。そんな中、ごく自然な流れで「私はここでかけ回る三歳児たちの



相手をする」「私は砂場にすわりこんでいるチビちゃんたちをみる」というふうに分業でできたからです。私が末っ子に授乳している間に、「あ、シンちゃん脱走した」と誰かが、公園の外に出て行くうちの長男を追

かけてくれたり、逆のこともあったり、と助け合っていました。

やがてそんな公園での付き合いも深まると、お互いの家と呼んだり呼ばれたりも始まりました。が、それはべつたりのお付き合いではありませんでした。公園で誘い合って午後から遊びに行ったり、電話して「雨だから、よかったら来ない？」と誘ったり。決まったメンバーではなかったし、お互いを拘束するものでもなかったと思います。

この公園で三人の子どもを育てた私は、世代交代もあるから、多分二十人以上のお母さんたちとふれ合ったと思いますが、その間、閉鎖的なグループがでたり、仲間外れがでたりしたことは一度もありませんでした。

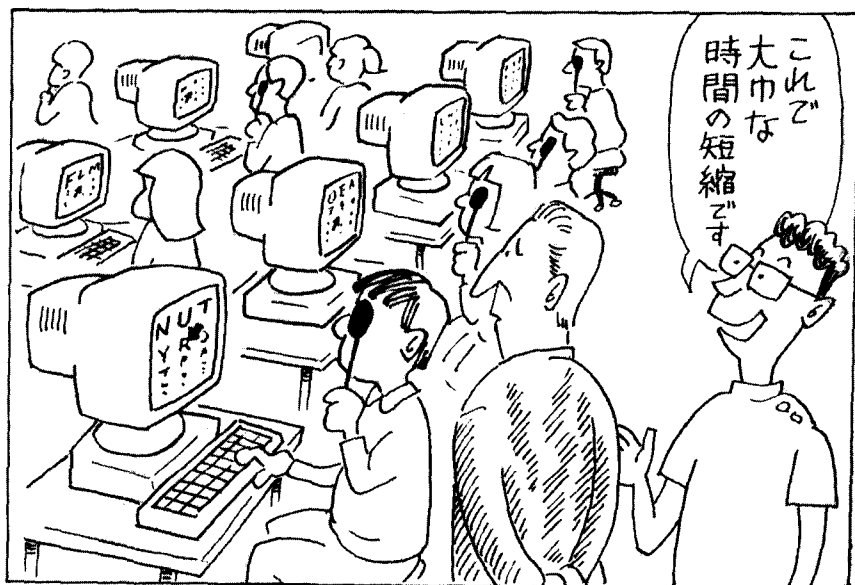
「公園育児」とは、私には懐かしいひびきで、育児に夢中だった、第二の青春時代のような輝きを持つ思い出です。

(元・弘法堂建二)

IT革命

(19)

一筆
両断



文字に興味がなかった子のその後

熊本県天草郡 松本とみよ（44歳）

二八五号由美さんの「LD児だとしても」の投稿を読み、「これは、まるでうちの息子ではないか」と思いました。息子は今高二となっています。この子がどんなふうに成長し、どんな高校生になっているのか、由美さんの参考になればとペンをとりました。それは当初心配したものとはまるで違ったものになったのです。

うちの息子の場合は言葉も早く、他の子がおむつをしている頃に、すでに自分でズボンを下げておしっこ出来る子でした。車の名前ならみんな言えました。「賢い坊ちゃん」と言われ、

私も親バカでそう思い込んでいました。

ところが息子は小学校入学前になっても、全く文字に興味を示しませんでした。子供は誰でもそのうちに興味を示すものだ、その時を待てば良い、とのんきに考えていた自分が悔やまれます。運動会を終えた十月には、さすがの私もあせり、必死に教えようとした。『の』を教え、しばらくして「これは何と読むの？」と聞くと「うん。ぐるぐる」と答えた時は頭を抱えました。これは『いぬ』と読むのよと教え、今度『い』だけを指さすと

「いぬ」と答えます。一つの文字が一つの音を表わしているという認識が出来ない。『いぬ』という言葉の最初の音は、『い』なのだということから教えないといけないのです。これは数字にも言えることで、みかん一個を「一、二」と数えたりするのです。

それにしても、全く手のかからない赤ちゃんだったのに、小学校に入ったらあれほど苦労させられるとは思ってもいませんでした。しかも息子は三月生まれなのです。後、一年遅い入学だったらと思います。

小学校に入ってから親共々闘い

の日々。本もスラスラとは読めないの
で、毎日本読みの特訓はいうに及ばず。
本が大好きで勉強に苦勞したことのない
私が、子供の勉強に悩まされるとは
神様はなんと皮肉なのでしょう。

宿題がまた大仕事。「あら、プリン
トはどうしたの？」と聞くと「他の人
には配っていたけど、ぼくにはなかつ
た」と平然としています。「そんな時
はもらいなさいよ」。何回コピーをた
のみに同級生の家に行ったことでは
う。

算数のプリント一枚をするのに夜中
の十一時までかかったこともありま
す。「計算のテストどうだった？」と
聞いたら「時間がたりなくて、五つで
きなかった」というので、それは五問
かと思いきや五列だったのです。

その頃の私の願いは、マンガでも良
いから本を読んでほしいというささや
かなものでした。

毎晩ねる前に本を読み聞かせまし
た。どんな難しい本でも、けっこうわ
かるものだと思います。いつかは自



分で読んでほしいという願いはどこで
どうまちがったのか、中学になってま
で「ねえ何か読んで」と言われた時は、
道をまちがえて違う所に出てしまった
という感じ。

それでもゲームの攻略本なら読み、
やつとクリア出来たと言う。数学の攻
略もしてくれればいいのに、一体どん
な頭なのか。

予想していたとはいえ、最初の通知
表を見た時はショックでした。△ばか
り。これは五段階なら1か2というこ
とです。子供は放っておいても3はと
つてくるもの、まあ一つや二つは5も
あるだろう。成績は普通であればよい。
のびのびと育てようと考えていた、私
の教育観は土台からひっくり返りまし
た。普通以下ではだまっておけません。

この子に行く高校はあるのか——私
の思いはその一点でした。「あんなな
んかC高校にさえ行けないわよ」とど
なっていたら、裏のC高生の親が嫌な
顔をしていたそうです。後年、私の予
想にたがわず、確かに息子はC高校に

も入れなかったのですが、それは必ずしも息子の不幸ではなかったのです。

私に激しくなじられ、「ぼくはなんて頭が悪いだろう」と涙ぐんで自分の頭を叩いた息子を見て、さすがに反省したこともあります。ものさしで物を計る時も、ものさし自体を動かしてしまふのでちゃんと計れない。思わずものさしを取り上げてピシリと叩きます。「何で普通のことが出来ないの！私は何も一番になれると言っていないよ」。知能が低いとも思えないのに学習に向いていない。学習障害児ではないのか？と思いました。

小一の夏休みに公文に入れました。こなしたプリントが段ボール箱いっぱいになりました。「お母さん、理屈抜きでやり方だけをアドバイスして下さい。やれるようになったら理解するようになります。自分の出来ることから始めて、できたことを喜べるようにしましょう」と言われたけれど、嫌がらないようにさせるのが大変でした。

その成果が実を結び始めました。計算のテストの時です。先生がテスト用紙を最後の子に配り終えたところ、息子がすでに書き終えた答案を提出したというのです。それを聞いてどんなに嬉しかったでしょう。

小学三年の通知表はオール3でした。ようやく追いついたとホッとする一方で、一生懸命やって普通とは、空しいものがありました。

四年生になって部活が始まり、帰りが遅くなりました。宿題をこなすのがせいっぱい。夫から「あまりに可哀想だから公文はやめさせろ」と言われました。「わかった。そのかわり今後どんなに成績が悪くなくても文句は言わないでよ」

息子にはたった一つ取り柄がありました。虫が大好きで虫のことなら何でも知っています。毎日でも図鑑を眺めている子です。虫の研究をするように勧めたところ、科学展で何回も入賞。「虫博士」と言われ、それが息子の居場所になったのかなと思います。で

も「虫の先生になりたい」という息子の夢を聞く度に苦しい思いをしました。大学に行くには算数だつて国語だつてもっと頑張らないといけないのよ。

もしも息子が優等生であつたなら、私はきつと鼻持ちならない女になっていたことでしょう。成績は他の子を蹴落とす道具としかとらえることのできなかった、それまでの人生観をこの子は少しずつ変えていきました。成績が悪くても良い所はいっぱい持っている。成績が悪いことも一つの個性と思ひ、胸をはって「成績がすごく悪くて」と堂々と伝えるようになりました。

本来勉強は、その成果をどう社会に生かすかというのが大事なはずなのです。その視点がなければ教育はおかしな方へ行ってしまう。ただ学校の成績だけが問題にされるから、できない子の居場所がないのです。

中学に入ってから、私は一切勉強にタッチしなくなりました。私が教えると、いくらかでも成績が上がるこ

はわかっていました。でもそれが、何の意味があるのだろうか、疑問に思うようになったのです。私は息子が死ぬまで、めんどろを見続けるわけにはゆかないのです。

私と息子の生活は、決して暗かったわけではありません。明るくて天然ボケの夫の影響もあり、息子のドジぶりを困りながらも、笑ってしまうことも多かったからです。

息子の中学の成績はオール2といったところ。数学の点数が一桁だったことにア然としていたら、「お母さん、

何勘違いしてんの。それって五十点満点なんだよ」と明るくいうのです。安心しかけて、「まてよ、二倍してもたいた点数にならないじゃん」。これではまるで漫才です。「お母さんなら国語一教科だけであんたの総合点に対抗できるよ。お母さんに試験受けさせろ」。

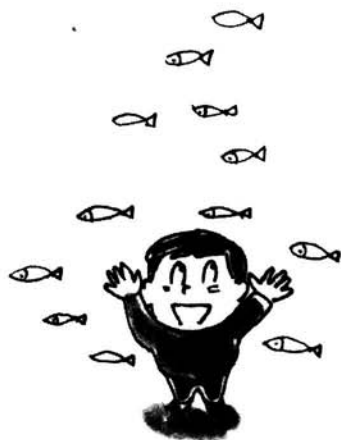
「お前の息子は親孝行だ。成績悪いから学校にやらなくてよいし、金もかからない」と夫の友人が冗談に言ったのもこの頃。テスト勉強する姿なんか見たこともなく、部活で休みもない日々

でした。

中学三年となり、この子が小一になった時に「行く高校はあるのか」と心配したことが、いよいよ現実となりました。

選びさえしなければ行く高校はありました。息子に一番合っているのはR高校海洋開発科だと思いました。県内で唯一の水産関係の科があり、航海用の船も持っています。生物好きの息子にはうってつけの所です。熱帯魚を飼ったり、養殖をしたり、ダイビングもできます。浜でタツノオトシゴを捕ったりする息子にとっては、趣味の世界なのです。私も世間体よりは、息子の幸せな学校生活という観点から、選ぶという良識はもちあわせていました。

担任から「息子さんが推薦してくれと言ってきたのですが、推薦となりますと学校の名誉にかかわりますし」と電話が来た時はびっくりでした。なんと厚かましい。穴があつたら入りたいくらいです。そんな大それたこととは



思っていなかった、と息子。しかし部活の先生が「まあいいじゃないか、部活頑張ったし」ととりなして下さったそうで、思いがけず推薦の試験を受けることになったのです。

「受かったらもうけものと思ったださい」と言われたのに合格。なんとアツケない結末。試験勉強なんてすることもなく、こんなことでいいのだろうか？ 二月、三月をこんなにも心穏やかに過ごすことになるなんて、想像もしていませんでした。成績が悪かったので例え学科試験を受けたとしても、ドキリとしなかったと思います。全く期待なんてありませんでしたから。高一の最初の試験でクラスで七番という成績をとって来た時は驚き、夫婦で答案用紙をひっくり返して、裏まで眺めて首をかしげました。どーなってるの？ はしゃいでいる息子を見ても素直に喜べません。まぐれだろうから、次のテストで落ち込む息子をどうなさめようか、という心配の方が先でした。

先生からは「息子さんには何も言うことはありません。この調子で頑張れば大学も夢ではありません」と言われ、何かの間違いじゃないかと思う日々です。学校が合っていたんだろ？ なああと夫。R高校を勧めたのは私ですが、これほど息子の性に合うとは思った以上でした。

苦手数な数学で95点をとってきた時は感無量でした。それも友達から教えてもらったというのです。その友人の口ぐせは「数学のわからんやつのが知れん」だそうで、彼は先生や私にも出来なかったことを、どうやってやってのけたのでしょうか。いい友達にもめぐまれているなあと思います。早朝課外も受けるというので、「勉強嫌いなんでしよう。あんまり頑張らなくてもいいよ」という私。

「ダイビングしてるとね。魚って陸からさわろうとすると逃げるのに、同じ海の中にいると寄って来るんだぜ。『いそぎんちゃく』の中に『くまのみ』がいたのでつついたら、むこうもこい

つ何だ？ つてぐあいにつつき返してくるんだ」

こんなふうには高校生活を楽しむ息子を、小学校時代は予想もしていませんでした。

思えば勉強に対しては鬼のような母でした。言葉の暴力もずいぶんふりました。でも虫捕りや魚取りにはとんとんつきあいました。私自身そういうことが好きだったし、息子に教えられたこともたくさんあります。

よく男の子は難しいというけれど、「お前うるさいよ」というくらいしゃべりかけてくるし、「ねえ面白い物に行こうよ」と誘うので「バイクで行けばいいじゃん」といいつつも悪い気はしないのです。あんなにいじめたのに、よくこんなに素直に育ったものだと思います。

東大を出たのに、駅のホームで寝ている人だっている世の中です。成績が悪い子の将来が、不幸せと限らないのは確かかなようです。

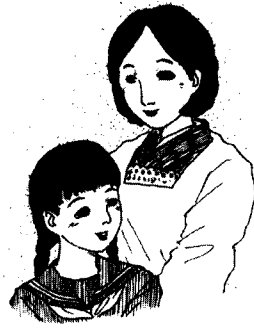
(え・栗田笑)

娘に伝えたいこと

—— 本当の幸せを知ってもらうために ——

町田貞子 著

光文社 二二〇〇円＋税
一九九九年刊



東京都武蔵野市 斉藤きよみ (42歳)

この本の著者は、家事研究家として、「暮らし上手の家事ノート」「常識以前でございませう」などの著書を持ち、昨年この世を去った、明治生まれの女性である。今の家庭のあり方、特に母親達に向けて語りかける彼女のメッセージには、かつての日本の家庭はこうでしたああでしたというものも多く、反発を感じたのも正直

なところ。

しかし、その一方でなぜか魅かれるものがある。彼女の、芯が一本しつかり通って揺るがない、家事をして生活することは人生を生きることである、という考え方や、家庭は、私事ではなく、公のものとして考えるべきもの、という信念は、私の心をとらえて離さないのだ。

思えば、言われて久しい教育の荒廃や、家庭崩壊などの問題には、家庭をプライベートな領域として外界から隔離し、中で何をやってもこちらの勝手という風潮が、ひとつの影を落としている、とはいえないだろうか。

家庭の窓を、外から見えないように閉めつ放しにせず、大きく開いて外に手を出し、他の窓からさし出さ

れた手とつながることで、問題は共有され、解決に向かおうとする勢力も強く頼もしくなっていくのではないだろうか。そういったあり方を、私達はもう少し見直す必要がある、と私は思う。

戦後五十五年の間に、戦前の悪しき物として、日本人が切り捨ててきた中であつた、小さな物だけれどなくしてはいけなかつたアレコレを、著者はその手にすくいあげて、私達に見せてくれているような気がしてならない。

この本は、著者の最後の本となつた。あとがきを、病室のベッドのなかでテープに吹き込んだ五日後、家族一人一人に別れを告げ、天国へ旅立った。見事というほかない最期である。

(え・渡辺美帆)

人としての幸せ

匿名 (42歳)

友人Nとその母が経営する日本ソバ屋をクビになって、はや一か月半が過ぎた。初めの二週間ほどは、がっかりした気持ちの中にも、これで少し骨休めができるな、というほっとした気持ちもあった。しかし、日がたつにつれ、言いようのない脱力感におそわれ始めた。季節の変わり目ということも手伝って、私の体調は、すっかりおかしくなってしまうたのである。

Nの父上が亡くなって、しばらく休んでいたソバ屋を再開すると聞いたのは、今年の五月末だった。かねてから、仕事に就くチャンスがうかがっていた私は、その話に飛びついた。そして、私と、やはりNの友人であるYさんの二人が、パートとして働き初めたのは再オープン前の六月八日のことであった。ランチタイムの十一時から二時過ぎまでの約三時間。時給八百円。週四日勤務。これが私達への条件だった。

た。

結婚以来、主婦湿疹ですぐに手が荒れてしまう私は、そのことを了解してもらった上で、ホールの仕事をすることになった。Yさんは、洗い場とNの補助ということで厨房に入った。Nが井物担当。Nの母がめん類担当。四人での仕事が始まった。

お客の入りを心配していたNだったが、以前のお客に新規のお客も加わって、盛況のうちに店はスタートした。

ホールの仕事は接客である。お客に水を運んで注文を聞き、それを厨房に伝え、でき上った食事を運ぶ。帰るお客のレジを済ませ、食器を厨房に下げる。これが大まかな私の仕事であった。その合間に、灰皿を運んだり座敷のお客の靴を揃えたり、よごれたテーブルの上を拭いたりという仕事加わった。ソバ注文のお客には、ソバ湯をサービスするというのも大事な仕事のひとつだった。

店は、四人掛けのテーブルが四つと、二人掛けのテーブルがひとつ。八人も座ればいっぱいになってしまう座敷がひとつと、決して広いものではなかった。しかし、昼休みに集中してやって来るお客で、十一時五十分頃から十二時四十分頃までは、店内を走り回るといふ忙しさだった。

初めて飲食店で働く私にとっては、慣れないこと

の連続だったが、店からあふれんばかりのお客を、うまくさばくことができた後は、何ともいえない充実感でいっぱいだった。「いらっしやいませ」に始まり、「ありがとうございます」に終わるこの仕事、「好きだな」という気持ちにいつかたっていた。

もちろんミスもたくさんした。注文を聞きまちがえて、違うものを出してしまったり、ウドンとソバを間違えたり。おつりを多く渡し過ぎたり足りなかったり。あとで気づいてドキッとすることも度々あった。落ち込むこともあったけれど、慣れないところは誠意でカバーしようと、笑顔と元気だけは忘れぬようにと、精いっぱいがんばった。

そんな努力が実ってか、三か月目にはいる頃には仕事にも余裕ができ、常連のお客さんと雑談を交わすようにもなっていた。

Nから家に電話があったのは、そんな矢先のことだった。Nは、お盆休み明けからお客が減っていることを私に告げた。そんなことは私も十分わかっていて。毎日店に立っているのである。十二時前後の一番忙しいはずの時間帯に、空席がある状態が何日か続いていることは、私だって気になっていた。Nはそんな窮状をひと通り説明したあと、

「だから申し訳ないんだけど、あなたにはやめてもらいたいんだ」

と言った。私は耳を疑った。

「どうして!!」

とすぐに叫んでいた。

信じられない言葉だった。もちろん数々ミスもしていた。しかし自分では、店のムードメーカー的役割をになっているという自負があったし、だから店にも必要とされていると、深く信じていた。実際、私のことを気に入って来てくれるお客さんも、何人かいたし……。

私は涙声になっていた。

「どうしてあとから入ったTさんを切らずに私を切るの?!!」

自分でも信じられないような強い口調になっていた。Tさんは調理と洗い場担当として、二週間程前に、Nの母が連れてきた人だった。Nは、Tさんには調理担当として、期待していると言った。確かにTさんが来てから、それまできつそうだったNとNの母の仕事が軽減しているのは感じていた。

それでもまだ納得できずにいた私に、決定的な事実をNは告げた。

「こういう仕事をする以上、洗い場ができないっていうのは、困るんだよね……」

私の手のことを言っているのだった。それを言われたら、もう返す言葉がなかった。



「だって、そのことは初めから言っただけじゃない」

そう言いたかったけれど、やめた。店の経営者として、店に有益な人材は残し、そうでない者から切っていく。それは仕方のないことだろう。経営難に陥ってくればなおのこと。そういうNとNの母の気持ちも少しはわかったから。

結局、私一人がクビになった。

次の月曜日、NとNの母へのあいさつと、最後の給料をもらうために、店へ行った。天ざるを出してくれたが、私への誠意だということは、頭では十分理解していた。しかし、二人からひと言も、ねぎらいの言葉がなかったのが悲しく、悔しかった。

そしてクビという事実は、私の精神に大きなダメージを与えた。たかがパート。それも三か月働いただけ、と言ってしまうばそれまでだ。しかし、私は私なりにいっしょうけんめい働いたのだ。あの猛暑の中、十一時出勤二時過ぎに帰宅というのは、体力的にきつかった。ミスをできるだけ少なくしようと、自分なりに工夫したり、神経も使った。

それなのに――。

「あなたは知らない」と言われることが、どれほど傷つけられることなのか。いっしょうけんめいやっていただけに、その代償は大きかった。

その上、湿疹という自分ではどうすることもできない身体的弱点を、解雇の切り札にされたことも、何ともやりきれずくやしかった。

人をささえているもの。それは人から必要とされ、それにこたえているという充足感に尽きるのではないだろうか。人から見れば、取るに足らないようなことであつたとしても。ソバ屋での三か月、少なくとも私は、私の人生を生きていた。

ほんやりと、能面のような顔をして、一か月半を過ごした。こんなことをしていたら、本当に病気になるてしまう。何とか自分を立て直さなければと、職さがしを始めた。年齢や条件が障害となり、なかなか適職が見つからなかったのだが、ひとつ決まり、そんな仕事がある。お金にはあまりならないのだが、可能ならやってみたいと思つてゐる。

人としての幸せのために。

ちちんぷいぷい

横浜市旭区

隅田 美幸(41歳)

「奥様」「〇×君のお母さん」「△△ちゃんママ」「おばさん」「おばちゃん」など。子供が三人いる専

業主婦は、いろんな呼ばれ方をする。

一日中、子供に振り回されている私は、確かに母だ。そして夫にとっては妻。でも、私って本当はだあれ？ もっと別の顔だつてちゃんと欲しい。ずっとそう思つてゐた。

ひよんなことから自分の名刺を手にした。水廻りのリフォーム店で会報作りの仕事をする事になったのだ。名刺に印刷された自分の名前。キラキラ輝いて見える。誰かのお母さんでも、誰かの妻でもない私自身。ちょっと恥ずかしいような。胸を張りたような。

リフォーム店の六十歳以上のお得意様の会員が三百名ほど。その方達に二か月に一回、会報を出すという。店の宣伝ではなく、生活に役立つ地域の情報や、介護関係情報をお知らせしたい。会員紹介など盛り込み、皆さんの元気の素になれば、という社長の主旨に、書くことが好きだった私は、思わず身を乗り出してゐた。印刷以外は、取材から編集まで社長と二人だけでこなさなければならぬ。果たしてできるかどうか不安ではあつたが、素人っぽくてよいという社長のひと言に勇気づけられ、えいっと引き受けてしまった。

初めての取材は、店の斜め向かいにある訪問看護ステーション。慣れないせいで、名刺を忘れてしま

った。前日考えた質問を所長に尋ねる。心臓の音が相手に聞こえないか心配だった。

今日は忘れないゾ。自分の名刺をバッグにしまう。いつものジーパン、トレーナーとは随分違う。鏡の前に立って、念入りにお化粧。心地よい緊張感と、うまくゆくかどうかとの不安感が交互に波のように打ち寄せる。不安感のほうがずっと大きい波だ。自分を励ますように、鏡の中の私に向かって、呪文を唱える。



「ちんぷいぷい、キャリアウーマンになあれ」

いざ出陣。いろいろうるさいだろうと思っていた保健所の取材だったが、思いの外うまくいった。食生活を基礎にみんなの健康を考えるグループの方が、地元でとれる食材を使って料理する日なのだ。陽気でおしゃべり好きなおば様たちと話をしたり、写真を撮ったり。最後には、できたての料理とお茶までご馳走になってしまった。

今日の取材は、県の福祉施設。ちょっとかしこま

ってスーツを着て鏡の前に立つ。「ちちんぷいぷい」

福祉機器展示場の女性に話を伺えればと思っただけなのに、そういうことなら所長のO・Kを撮らないと、ということ次第で次々三人の男性に、どういう者でどういう取材に来たか説明しなければならなかった。時間こそかかったが、私のようなものに、あれこれ親切に情報を提供してくれ勉強にもなったし、ありがたかった。

だんだん名刺の扱いにも慣れてきた。「私、こういうものですが……」。でも出かけ間際に、ちゃんとおまじないも忘れない。「ちちんぷいぷい」

老人ホームにある、一般開放もされている温泉に行ってきた。それまで発行した会報も参考までにお持ちする。

「えらいねえ、あなた。こういうことは、ずっと続けてゆきなさいよ」

ホームの施設長が、やさしくおっしゃる。思いもよらない励ましの言葉に感激してしまう。数年前、温泉を掘った話から、温泉療養の大切さなど、たくさん資料を用意して語って下さった。

カメラを手に撮影していると、「ほらほら、どこかに紹介されるのよ。きつと」というひそひそ声。取材も少しは板についてきたぞ。そろそろおまじないも必要ないかな? いい気分できると「そうやって

宣伝するから混んじゃうのよ」と睨まれ、慌てて退散。

でも今日もやっぱり、「ちちんぷいぷい」。行く先はスポーツセンターなので、ラフな格好。トレーニング室でマシンを体験しなくっちゃ。

早く取材を引き受けてくれた若い男性は、がっちりした体格で、筋骨隆々。そういう男性とは、余り縁もなかったので、ドッキン、ドッキン。残念ながら好みのタイプでないけれど、専業主婦がいかに男性との接触が少ないか思い知らされた気分である。ほとんど免疫がないから、ちよつとしたことで不倫に走ってしまうかも。おかげで私は、どんどん免疫がついている。そのうち、素敵な男性に出会えるかな?

電話で取材を頼んでも、つつけんどんに断られることだってしょっちゅうだ。次は、何をどうやって取材するか決めるのも、資料集めから始めなければならぬ。自分で取材し、文章を書き、編集して出来上がった会報は、自分の子供のようによいとおしい。A3サイズ用の紙一枚を両面印刷したものから始まったけれど、今では用紙が二枚になった。常にあるちこちアンテナを張り巡らし、そのアンテナにひつかかれば、直ちに私は呪文を唱える。

「ちちんぷいぷい」

(え・渡辺美帆)

リラの花 桜の花

浅野素女

前回の章に、「ギョームが頼れるのは私しかないなかった」と、私は書いた。読み直して、私たちも危うい親子だったな、と改めて思う。

母親は多くの人にとって、万人に見放された時でも頼ってゆける唯一の存在であり、そうした存在を持つということが人間への信頼感の根拠を作る。子どもの



時、この信頼感を得たか得なかったかで、その人のその後の人生に大きな違いが出るだろう。しかし、「母親がすべて」になっではないけない。「この人しかない」ということは、「この人がいなくなったら世界は終わり」という、途方もない不安を運命づけられることを意味する。したがって、母親の役目というのは、「自分はい

つでもここにいるよ」、という絶対信頼の場を作ることと平行して、「ほら、私だけじゃないんだよ」と、世界の扉を開ききつかけとなる「もうひとつの存在」を、子どもに示してあげることにある。その「もうひとつの存在」が、多くの場合は父親である。

子どもはふたりの人間がいて生まれてくるもので、母親ひとりで生み出したものではない。当たり前じゃないか、と誰でも言うにちがいないが、私たちは意外とその点をないがしろにしがちだ。

もし子どもをひとりの人間として尊重するのなら、この「当たり前」の事実を尊重するのが先決のはず。おとなの都合や自分の恨みつらみを理由に、父親はいなくとも平気、と豪語したり、一方の親を踏みこじるような言動を取ることは、その子ども自身を傷つけていると同じだということに、私たちはしばしば気づかない。気づいても、自分の都合を優先させて気づかぬふりをする。

私は最初から、子どもの父親は父親として存在させるべきだと考えていた。認知や親権をすみやかに承諾したのも、その点だけは自分の中ではつきりしていたからだ。

だから、ギョームの父親から被ったすべてのハラスメントや屈辱的な裁判の経過はともかく、最終的には、どんなに苦しいやな思いを私がしたとしても、「父親

を存在させなければならぬ」として闘ってよかったと思っている。何より、その苦しい過程を通ることによって、私自身がその事実を改めて納得し、深く受け入れることができたからだ。

人から攻撃を受け、苦しみの中でもがいていると、何が一番大切なことなのか、何が何だかわからなくなってくる。私もそうだった。自分に絶望し、人を恨み、その恨みは自分にはね返ってきてさらに自信を失い：堂々巡りである。

いまはすべてが、過去を清算しつつ自分の現在を作っていくために必要であった過程なのだと思う。中でも私にとって大きかったのは、以下の三つの段階である。

一つは、一回目と二回目の裁判の間に経験した、民間ボランティアの調停員を交えた話し合いの場。二つめは、こどもと父親ともに経験した裁判所つき心理学者との面談。この二つは、問題に対して後ろ向きにならず、果敢に正面から取り組んでゆくという、フランスの家庭裁判所の、外からは見えにくいポジティブな側面を象徴的に示しているのだ。是非触れておきたい。三番目は、カトリックの洗礼を受けるため、定期的に教会に通った二年間の準備期間。

急に宗教を持ち出しても、苦しい時の神頼み、程度にしか受け止められないと思うし、私自身、無信心で

あった時は、宗教なんて弱い人間のもの、胡散臭いだけと思っていたひとりであるから、この点については後にゆっくり時間をとることにして、今回は先の二つの段階に話を絞りたい。

もともと裁判は、現在の私の夫がアダムに向かって、「こんなんではギヨームには会わせられない」と、挑発的なことを電話口で言ったことが直接のきっかけとなった。

繰り返されるアダムのいやがらせに私の精神状態は最悪で、私はまたどんなひどいことを言ってくるのかと、ファックス受信機が鳴るたびにぎくりと身を震わせるありさまだった。結婚を決めるまでは、私も夫を問題の外に置こうと努めてきたが、いっしょになるということは、すべてを分かち合うということだ。まだ結婚はしていなかったが、結婚を決めた以上、私とアダムの間のことは、私の夫の問題ともなる。

私は夫（ここではジャンと呼ぶ）と知り合ってから、ギヨームとふたりだけの生活に、ジャンのための居場所を少しずつ、少しずつ作ってきた。私たちの間も決して平坦ではなかったが、ともかく三人で家族になることを決めたのだから、今度は、対外的にもジャンの存在を認めてもらう必要がある。

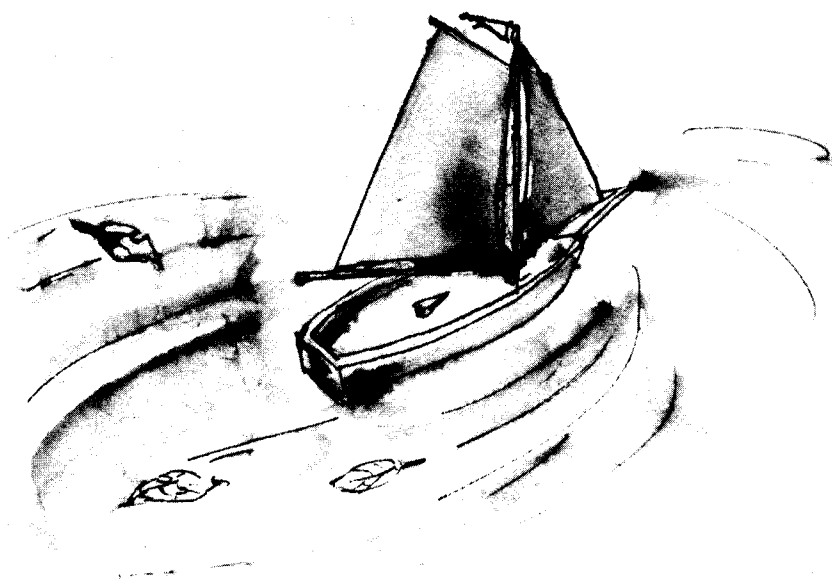
そんな状況の中で、アダムの私に対する病的なほど

の攻撃に憤慨した夫が、ある時、自ら電話口に出て、「ギヨームの母親に対してこんな言動をとり続けるなら、ギヨームに面会するのはしばらくやめてくれ」という意味で、先の応対をしたわけだが、アダムは「俺がいるんだから、子どもにはもう会わせないぞ」と受け取った。ジャンはもともと挑発的な言い方を好んでするタイプなので、悪く取られても仕方ないが、私たちにとって急務と思えたのは、とにかく今の状況を打破することだった。こんなふうにアダムのしたい放題では、新しい生活を築いていけない。

アダムは、書くのも憚られるほどの罵詈雑言を並べてジャンを罵倒した。おかげで、そうでもなければとてもお目にかかれなかったような、貴重なフランス語の罵倒の表現を私は覚えることができた。ともかく、完璧な決裂であった。

ほどなくして、アダムは裁判を起こした。母親が子どもを父親に会わせないと、家庭裁判所に私を訴え出たのだ。前に書いたように、私の方も、裁判によっていろいろなことにカタをつけておくべきだと考え、いつでも裁判所に送れるよう、必要な書類を整えていた。だが、私は先を越された形となった。

図らずも、ジャンの登場によって、アダム自身、あれほど恐れていた裁判という事態を自ら招く結果になったわけだ。あの混沌の中での陰湿ないじめより、光



の当たる公の場にいさかいを引きずり出した方がよかつたのだともいえる。

だが当然、一筋縄ではいかなかった。

弁護士には最初から、裁判官にとっては、私の方の心証が悪いと言われていた。なぜなら、私は妻子ある男とつきあつて、子どもまで作つた悪女である。それで、今度は父親に子どもを会わせない。となれば、私が悪いに決まつている……たしかにそういうストーリーもありかね、と何だか自分でも納得しそうになつて、慌てて気を取り直す。事態はそういうことではないのだから、そう証明しなければならぬ。

一、子どもに会わせたくないと云つてゐるのではない。事実、アダムとギヨームが会えるよう、いつも最大の努力をしてきた。しかし、アダムの私に対するハラスメントは度を越している。それをやめてほしい。

一、対話を拒否し続けているのはアダムである。その弊害（子どもに対する）を認識してほしい。

一、面会権と養育費の問題をきちんと解決したい。

まとめれば、こちらの要求は簡単だ。しかし、何といつても、精神的なハラスメントほど証明しにくい問題はない。アダムとのやり取りを示す手紙やファクスを読めば、誰だって「いったい何なの、これ」ということになるのだが、裁判官はそんな時間はとってくれない。

離婚に伴う裁判など星の数ほどあるのである。裁判とは、当人どうしが話し合いで解決できないことを、ばっさばっさと個人の事情は切り捨てて取り決めていく究極の場である。

一件、平均十五分。十五分の半分にもならない自分の持ち時間に、一体何が言えるだろう。それも外国語で（いかに外国暮らしが長くても、外国語は外国語である）、理路整然と、ちっとも理路整然としていない事態を説明しなければならないのである。しかも、他人の前であることないと言われる屈辱感の中で。裁判では、気が遠くなりそうなくらいの緊張感を強いられる。

裁判官の態度は明快であった。おとなの事情は、はつきり言って、どうでもよい。大切なのは子ども。それだけ。

一回目の裁判の後、私たちは調停を受けることになった。当人どうしの事情からいって、ふたりが話し合えば、折り合って解決できる問題ではないかと、双方の弁護士も裁判官も期待したのだ。私もいくばくかの希望を抱いて調停に臨んだ。

この調停というのが、いま思い返せば実におもしろかった。渦中にいる時はもちろん、それどころではない。話し合いの場はまさに修羅場であり、相手の言葉

による拷問の連続であり、終わるたび、私は道行く人の視線を気にしながらも必死に堪えていた涙がこぼれ落ちてきて、影のように消えてなくなりそうになりながら家路を辿った。あれは最も辛い時期だった。

この場合の調停は、家庭裁判所が民間団体に一件を委託した形をとる。調停員は一定の研修を積んだその道のプロであるが、あくまでボランティアとしてこの仕事をしている。調停員は各々別の仕事を持っている。したがって、話し合いはいつも夕方六時頃から始まった。

最初の調停員は女性だった。オフィスは何の変哲もない集合住宅の道に面した一角。小さな殺風景な部屋に椅子が三脚。低いテーブルの上に造花が飾られていた。黒板代わりのボードには、紙が張ってあり、話し合いの内容をフェルトペンで書き留められるようになっていた。

当事者は、毎回、収入に合わせて決められた料金を団体に支払う。無料ではない。この点は、精神分析治療と同じで重要な点だろう。ケースによって、二回で済むカップルもあれば、十回も二十回もかかるカップルもいるという。何らかの解決に行き着くのかどうかは、あくまで当人次第だ。

調停の間隔はというと、二週間に一回くらい。これはなかなかよく考えられた絶妙な間隔である。一回の

調停で打ちのめされて落ち込んだとしても、二週間くらい経つと、当初の興奮と苛立ちもいくらか収まり、互いに投げ合った言葉の消化が始まり、自分の中に別の視点が芽生えてくる。一週間ではだめだ。二週間あると、自分を反省する猶予期間を経て、次の調停へ向かうことができる。これはあくまで、私個人の感想ではあるが。

さて、初っぱなから、話し合いは一方的な「弾劾」の様相を帯びた。アダムの状態は、子どもの現在、未来を話し合おうというものからはほど遠く、はるかかなたの過去に遡って彼の「ストーリー」を開陳し、私を糾弾するというものだった。裁判では言えなかったことを感情のままにぶちまけてくる。

私は女性調停員に、「私はこんなことを言われるために来たわけではなくて、問題解決のために来た」と訴えたが、彼女は「初回なので、お互い、心にたまっていることを吐き出してしまった方がよい」と答え、アダムに言いたいことを言わせた。

そこで何を言われたかは繰り返さないし、順序立てて覚えてはいないが、とにかく糾弾、糾弾、糾弾あるのみ。一分や二分のことではない。それが二時間も三時間も続くのである。よくもつたものだ。私もけっこう強いな、と自分で感心する。

小さなことだが象徴的なのは、別れて以来、アダム

が私を【vous】で呼ぶようになっていたこと。英語には「あなた」でも「おまえ」でも、【you】しかないが、フランス語では、親しい間柄は【tu】で呼び交わし、距離のある相手には【vous】で話す。十三年も親密につき合った相手をいまだに【vous】呼ばわりするのは、傍から見ると滑稽ですらあるのだが、彼はそうすることと、私を軽蔑する姿勢を示したかったのだろう。しかし【vous】という言い方で、彼は自分を守るための防波堤を必死にこしらえていたようにも思える。

調停員の女性は、話し合いを個人的な中傷に終わらせないよう、何とか話を建設的な方向にもつていこうとしていた。彼女はボードを使って彼の家族の關係図を書き、私やギヨームとの關係もそこに書き込んでいった。また彼女は私たちひとりひとりに訊ねた（これは二回目の時だったと思う）。

「あなたにとって、父親の役割とは何ですか。母親の役割とは何ですか」

母親とは何か。この問いに対し、私は目を閉じ、精神を集中させてギヨームの顔を思い浮かべた。ギヨームに恥ずかしいくないように、と私はいつも念じていた。私の体力と人間としての知恵をぎりぎり使って、やるだけのことをやろう。私はいくつものまちがいを犯したかもしれない。でも、誠心誠意これだけはやったと、いつの日か彼に言えるように――。そういう思い

で、私は裁判にも調停にも向かっていった。「そんなふう
に罵られて傷つくだけなら調停を続ける意味はないん
じゃないか」と、夫にさえ言われた。

たしかに、調停の場へ向かうのは、からだが震える
ほどいやなことだった。しかし、私は内なる対話の末、
希望を捨ててはいけないうと、いつも思い直した。相手
は変わらないかもしれないが、自分は変わることがで
きるかもしれない。

母親の役割とは何か——答えは泉のようにふつつ
と胸の内に湧き上がってきた。

「子どもに、世界に対する信頼感を与えること、世界
はこんなに美しいんだ、楽しいんだと、示してあげる
こと。子どもに、愛する力を与えてあげること」



もちろん、食事を与えるとき、身の回りの世話をす
るとか、そうしたことは別にである。

父親については、「母親以外のもうひとりの存在、外
の世界の代表者。社会への扉を開く人」などと、答え
た。「フランス家族事情」という本を書いた時に、この
問題はさんざん掘り下げていたから、あまり迷いはな
かった。アダムがどう答えたかはよく覚えていないの
だが、ごく一般的な答えだったと思う。答えは、次々
とボードに書きつけられた。

こうした作業を、他人の目に見守られてやること。
調停の意味はそこにあった。人間は弱い。個人的な情
念にからめとられている時、人は自分を律することが
できない。赤の他人の視線があつて初めて、私たちは

自分の「外見」を気にし、自分の言動を「まともな」範囲に収めようという努力を始める。

しかも、こうした作業を通して、調停員は明らかに私たちをある方向に誘っていた。母親の役割があるように、父親の役割もある。子どもが自分を必要としているように、子どもは「もうひとりの親」も必要としている。本当に子どものことを考えるなら、それは、もう一方の親を認め、ひとりの人間として尊重するところからスタートするはずだ。そして最終的な調停の目的は、おとなどうしのこたごたを解決することではなく、「子どもを愛するとは何か」という深い問いかけを各自が発して、自己の態度を改善することにあるのだろう、と私は次第に理解してゆく。

ところがこうした「教育的」なデイスクールは、アダムには気に入らなかったようだ。何も教えを乞いにここへ来たわけではない、説教されるために来たわけでもない、と彼は思ったことだろう。彼は父親である自分を、それも自分だけを認めさせるためにここへ来ているのだった。

私がジャンと結婚し、新しい家庭を作ったのは、この調停期間のまっ最中であつた。生活の場では、現実問題として、私の夫がギョームに対して父親の役割を果たしているわけである。アダムにとっては、それだけでも腸が煮えくり返る思いだったろう。

調停員の懸命の努力にもかかわらず、アダムは攻撃一本槍で、とても話し合いにはならず、時間ばかりは



予定の二時間をいつもオーバーし、相当な修羅場に慣れているはずの調停員もお手上げという感じだった。

たしか三回目からだったと思うが、調停員の数が一人から二人になった。女性調停員ひとりの手には余ったのだ。加わったのは男性だった。調停員としての経験を感じさせる信頼できる雰囲気の人だった。私はうれしかった。ファーザーコンプレックスを深層心理に抱えているアダムは、男性が相手なら、もしかしたら態度を少し改めるかもしれない。しかし、これもうまくいかなかった。

調停員たちは、一銭にもならないのに自分の貴重な時間を割いて他人のけなし合い、揚げ足の取り合いにつき合い、解決の道を探る手助けをしようと、真剣に取り組んでくれていた。毎回四人で、二時間にも三時間にも及ぶ話し合いを重ねた。ギョームのために何に気をつけ、何を取り決めなければいけないか、そうしたことを話し合えるなら、私はいくらでも努力するつもりだった。

しかし、結局十五時間にも及ぶ五回の調停の末、アダムの方が調停を蹴った。調停員のもの言いに書面でさんざん文句をつけた後のことだった。どちらかが調停を蹴れば、一件は裁判官の元に差し戻されることになる。

調停はこうして失敗に終わったが、私はあの時間が

無駄だったとは決して思わない。赤の他人の前で、自分たちの醜さを晒すこと。それは正視に耐えぬものだった。だが、そこまで追い込まれて、自分のずるさも醜さもとことん知ることが、次へのステップになったと思う。私は調停を通してアダムという人間をさらによく知るようになったし、自分の隠された欺瞞にも気づかされた。個人的な中傷のためにこの文章を書いているのではないから、彼の性格にかかわる部分には触れないが、私自身の目を開いたという意味で、このエピソードにだけは触れておきたい。

アダムは口癖のようにたびたび口にするのだった。

「あなたは私が言ったことをよく理解していない」

そう言うが早いかな、相手を速って、自分の言い方で正すのである。ある時、男性の調停員が、少し厳しい口調で突っぱねた。

「理解していない、理解していないとおっしゃるけど、私はあなたの話を聞いて、私が理解しただけのことを理解したのです。あなたは私が理解しただけのことに満足しなくてはいけません。それが他人を受け入れるということですよ！」

そうなんだ。と私は心の中で手を打った。アダムがお叱りを受けたから喜んだのではなく、私自身、本当にその通りだと自分を反省したからだ。他人と自分は常にずれている。ひとつの事実を聞いても、あなたと

私ではまったく理解がちがっている。みんな、自分の個人的な心の傷にしたがって、ものごとをいいように解釈する。そして、自分が絶対正しいと思っている。

実際、裁判官も言ったようにおとなのことはどうでもいいのであって、子どもにとつて何が大切な、その点を互いにはつきりさせ、折り合いつけるところはつけるためにこうして調停を受けているのに、アダムも私も、子どもを楯に、結局は自分の傷を自分でなめて、ほら、と他人に見せることで自己満足している。

他人を受け入れるとは、何と難しいのだろう。自分の恨みつらみをひとまず横へ置いて、子どもをひとりの存在として認めること（つまりはそのもう一方の親を尊重すること）は言うは易し、何と難しいのだろう。子どものため、なんて言いながら、実は子どものことなんか少しも考えていなかったりする。所詮かわいなのは自分だけなのだ。私だって、アダムがいなければどんなに楽かと、何度思ったことだろう。

しかし、誰も世界の色を自分の好きな色だけに塗り替えることなどできない。それは独裁だ。子どもを自分の好きな色に塗り込めようとすることも独裁だ。本当の愛情とは、やはりある意味で自分を殺すことなのだ。自分をこてんぱんに痛めつけようとしている相手であろうとも、子どもの父親なら、その人を抹殺しやうなどとはせず、その人を存在させるべく努めなければ

ばならない。当時は、それを受け入れるのは血を吐くほど苦しいことだったが、私はそう念じ続け、その力を授かりたいと神に祈った。友ばかりか敵すらも愛せ、と神は言う。私はその言葉の意味を必死で探し求めた。こうして一回、二回の調停ごとに、私はわずかながらも前進したと思う。見ず知らずのボランティアの調停者たちに助けられて、私は成長させてもらったのだ。

話し合いの中のもうひとつのクライマックスは、子どもにとつて父親はひとりか、という問題であった。私はギョームに、どうしてアダムに会わせるのをしばらくやめることにしたかを、彼にわかるような言葉で、簡単に、しかし率直に説明していた。

「パパのしたことや言ったことはどうしても受け入れられない。だからしばらくは会わない。ただ、いまいつしやうけんめい話し合っている最中だからね」というように。そうした詳細も、私は調停で語った。それに対してアダムは、「父親を貶めるものだ」と、私を責めまくった。しかし、急に父親に会わなくなつて説明もなかったら、かえっておかしいだろう。それに子どもはおとなが思うほど愚かではない。ちゃんとみんなわかっている。もちろん私も、おとなどうしのいさかいからギョームをできるだけ守ろうと努めた。それが第一のおとなの努めである。だが、嘘や欺瞞より、ものごとをはつきりさせた方がいい時というのはある。

夫とギヨームの間の関係にも欺瞞はなかった。アダムと別れて間もなく、私はジャンと親しくなった。ギヨームがまだ四歳の時だった。

四歳という幼児期を脱出しようという時期にジャンが現れたのは、何といっても幸運であった。まだ小さかったのでジャンの存在は以外とすんなり受け入れられた。しかも、母親だけで満足していられた幼児期は終わろうという時だったから、生まれて始めて「いつもそばにいてくれる男性」が現れ、ギヨームは精神的に大きな安定を得た。これは傍で見ても驚くほどの変化だった。すべての子連れ再婚家庭がこんなふうにまくいというわけではないだろうから、私たちはいろいろな面で幸運だったと思う。私たちの結婚を誰よりも喜んだのはギヨームだった。結婚式の時、頬を紅潮させ目を輝かせながら新しい親戚の間を走り回っていたギヨームの姿を、私は一生忘れないだろう。あの姿が、私たちの結婚に対する最高の贈り物だった。

結婚するしばらく前からいっしょに暮らすようになって、ジャンはギヨームの父親の役目を果たすようになった。いたわけだが、私たちがギヨームにジャンを「パパ」と呼ばせるように仕向けたことは一度もなかった。ギヨームの方が、「パパ」と呼びたい素振りを見せたことはあるが、ギヨームの実の父親 (père) はアダムであること、ジャンは義理の父親 (beau-père) であ

ることを、最初からはつきりと説明していた。

フランスで、離婚家庭や再婚家庭は決して珍しいものではない。だから、対外的にギヨームがその事実に関心を感じることにはあり得ないだろう。だが、ギヨームがジャンを「パパ」と呼びたい気持ちもわかる。「パパ」に代わるいい呼び名はないか、私たちも頭を絞って考えたが、なかなかいいのが見つからない。ギヨームはジャンを「ジャン」と呼びならわしていたし、結局、私たちはそれが一番自然だと考えた。事実をごまかすのは最悪だ。ただ、父親がふたりいるというのが、現実でもあった。

この話になった時、アダムは私がこの世の最大の罪を犯したかのように怒り、延々と私を非難した。「父親は自分ひとりだ」と言うのだ。彼がそう思いたい気持ちはわかるし、彼が父親であることは認めるが、ジャンもギヨームの第二の父親なのである。父親になったのである。アダムはそのことを認めねばならない。

家族であるというのは、どれだけ「ともに時間を過ごすか」ということでもありはしないだろうか。ジャンは毎日毎日、毎時間毎時間を積み重ねて、そう簡単なことではなかったが、互いに試行錯誤を繰り返しながら、ギヨームの父親になっていった。そうした存在がギヨームの傍らにあることに、実の父親として感謝してほしくいだと私は内心思ったが、アダムにそ

うした寛容さを求めても無理というものだった。

ギヨームはいまでは、ジャンにわざと甘えたい時などは、「僕のとつてもハンサムなパパ」と呼ぶ。義理の父親 (beau-père) という語の [beau] はそもそも美しいという意味の形容詞である。それに引っかけて、[mon très beau papa] と呼ぶのである。義理の父親 (beau-père) という言い方はとても冷やかだが、[mon très beau papa] は、何ともユーモラスで愛らしい。ごまかすのではなく、深刻になりすぎるのでもなく、愛情には無限の奥行きがあることを示すこと。これが、私たちが行き着いた家族のあり方だった。

さて、裁判のことを細かく語る紙面の余裕も意味も

ないので、かなりはしるが、二回目の裁判でアダムはさらに過激になってゆく。私の行状の詳細なブラックリストなどを製作して、裁判官に提出したりもした。毎回、あつと思うようなことを考えつき、よくぞこれだけのエネルギーと時間を投入してくれるものだところらが感心するほどだった。

ともかくも、この裁判で彼の要求通りの面接権が決まる。私は最初から面接権には一度も反対しなかった。養育費も決まった。一体、何を争っていたのかとも思う。しかし一件落着後も、アダムは対立姿勢をいつそう強めていった。自分は言いたい放題、私が意見を手紙で伝えたりしようものなら、私をばかにしたコメントを添えて送り返してくる。そして、数か月後、アダ



ムは再び私を訴える。

判決文では、アダムに面会権がある第一、第三、第五の週末は、学校の後、私がギョームをアダムの家へ送り届けることとなっていたが、時刻までは指定していなかった。その時刻について双方の折り合いがつかなかったところ、待ってましたとばかりに裁判を起こしてきた。また、土曜日には自分が学校に直接迎えに行き、日曜日は彼の家まで私がギョームを迎えに行くというふうに、双方の役割を逆にしてほしいと願っていた。そんなことのためにいちいち裁判を起こしていたら、生活は成り立たない。弁護士費用だけでもたいへんなものだ。私は呆れ返った。

闘うこと、裁判に私を引きずり出すことが、アダムの生き甲斐になっているかのようにだった。私に対して自分の影響力を行使できる場合は、彼にとって、いまや裁判の場しかないのだろう。裁判所から手紙がくれば、私は出ていかないわけにはいかない。

しかも、アダムは裁判官に、私たちが日曜日にギョームをミサに連れて行くことを、禁じてほしいというような要求までした。

彼はまったくの無神論者である。だが、信仰は自由なものであり、ギョームには新しい家庭がある。親きょうだいがミサに行っている間、ギョームだけひとり家に残っているのだろうか。家族を分断しよう

というのだろうか。

裁判官は、この要求はもちろん却下した。アダムは子どもを楯に私の生活にどこまでも介入し、自分の世界観を押しつけてこようとしているようだった。

しかし、裁判官にしてみれば、またもや私がアダムの面会権のスムーズな行使を阻んでいる、と事態をとらえたにちがいない。「訴える側」が被害者顔をすれば、これは強い。しかもアダムは雄弁である。彼の弁護士はそれに輪をかけて攻撃的な女性だった。

私の弁護士は、家庭内暴力を専門に扱う弁護士で、ふだん彼女が扱っている悲観的な状況に比べたら、私たちの争点などばかばかしいくらいのものだ。最初から子どものためにがまんするところはがまんして、和解を探ろうとするタイプだった。こうなると、私たちは押され気味だった。私自身、醜悪さを晒したくない、という矜持があった。だが、裁判という冷酷な闘いの場では、かっこうなんかつける方が負けなのである。誠意や美しいものがいつかは勝つと信じたかったが、大声で喚くのが勝ち、みつともなくても醜悪でも、相手を責める方が勝ち。

裁判官はそれでも、何かおかしい、どこか異常だ、と感じたのだろうか。

第一、アダムはその権利を与えられたのに、取り決められた面会権を行使していなかった。土曜や日曜の

午後、数時間ギョームと過ごすだけで、ギョームを泊まらせはしない。ギョームがまだそうしたくないと言っているから、というのが理由だった。本当は自信のなさ、自分の方の家庭の都合だったと思う。要求できる権利は最大限手に入れておいて、義務は都合のいいように状況で斟酌、という相変わらずの姿勢だった。

一方私は、対話を一切拒否しておいて、どうやって子どもをいっしょに育てられるのか、と初回からアダムに問いかけていた。ギョームのために、私にとって大切なのはその一点のみに思われた。また、ギョームが延々と続くこうした親どうしのいさかいから、いかにプレッシャーを受けているかを裁判官にわかってもらおうとした。

ほんの一例だが、私たちがギョームをアダムの家まで連れて行って「こんにちは」と普通に挨拶しても、アダムは子どもの目の前で私たちをいっさい無視する。また、私たちの家に電話をかけてくる時、私やジャンが出るのを避けるため、二回鳴らして一旦切る。これで自分だということを知らせてから、ギョーム本人に出させる。このやり方を一時受け入れていたがため、ギョームは電話にびくびくするようになった。ギョームは子どもなりに、私とアダムが接触するのを避けようと気を張っているのだ。アダムが自分のプライドのために作り上げた「対立の構図」は、子どもの心を見

えないところで苦しめている。彼はそのことに気づかない。

私たちの担当は、名うての威厳に満ちた女性裁判官であった。しかし彼女も、長い裁判歴の中でこんなにわけのわからないカップルには、なかなかお目にかかったことがなかっただろう。一年間に三回も立て続けに裁判を起こしている。彼女は私たちにうんざりしていることを隠さなかった。私はいつものように、自分の舌足らずに苛立ち、親としての誠意を証明できない無念さに打ちのめされ、裁判官にまた悪者にされたと落ち込んだが、思い返せば、裁判官はアダムに向かつて、こうびしゃりと言いつ放つてくれた。

「あなた、毎年のように裁判を起こしてずっとやっていくつもりですか。裁判を麻薬にしないでくださいね！」

裁判官は、この三回目の審議で、裁判所つきの心理学者にギョームを面接させるよう、私たちに命じた。このままいくと子どもが危ないかもしれない、という判断があったのだろう。

家庭裁判所内に心理学者がいるとは、それまで知らなかった。結果的には、この心理学者との出会いによって私は救われた。

(え・荒田ゆり子)

私の意見・

あなたの意見

英語を第二公用語 にする必要なし

アメリカ リトルロック市 伊藤 琴子

私は十八歳の時、英検一級にパスし、トウフル六百点突破、十九歳で日本の大学より交換留学生に選ばれ、一年留学。卒業と同時にアメリカの大学院に進み、この国で英語を使って暮らすこ

と二十余年。中学の頃から、英語を勉強すれば金になる、そう思ってたせいで勉強をし、今はそれが大きく実を結んでいる。湯水のように私の教育にお金を使ってくれた両親には、とても感謝しているし、すごく努力した自分もほめてあげたい。アメリカに行けば英語はどうにかなる、そう多くの日本人が思っているようにだけど、どうにかならんのかな。皆さん自分の実力のなさにガックリされるの。だって、成田で飛行機に乗った時点で、スチュワーズのアナウンスの英語がわからないんだもの。機内食のメニューも、よくわからん食べ物が入ってたりしてね。

私はアメリカに発つ前、毎晩英語のテープ（時事英語、論説等）を聞いたし、ペーパーバックを何冊も読み、外国人と文通をし、英会話はアメリカ人の先生についていた。聞くことができようになるには、聞いて習う。読めるようになるには読んで慣れる。書けるようになるには日記でも手紙でもいい、書いて覚える。そして、しゃべれ

るようになるには、しゃべることによりうまくなる。努力のないところに栄光などないのだよ。ある程度までうまくなったら自己満足をせず、更に努力を積む。

趣味が英会話です。私は英語を教えています（だから偉いのだゾ）、そういう態度の人には、英語の発音がドヘタクソで、文章を書かせれば全くわけのわからんものを書いてしまう、ということが多々あるのだ。そんな自分で自慢しなくても、実力っていうのは実際話したり、書いたりすればわかるものだ。己を知り、宝石になるべく磨きをかける。そうすれば英語はうまくなる。頑張つてね。

が、日本に住んでいる日本人にとって英語は、どのくらい必要なのだろうか。最近ではインターネット、Eメール等、瞬時にして世界の誰とでもコンタクトできるようになったので、これらの日本人の英語は、「習うより慣れろ」式に上達するのではないかと私は見る。コンピューターでクレジットカ

ードを使いお買い物ができるようになったので、英語のカタログ、申し込み用紙、用法が理解できるぐらいの実力が一部の人には必要になる。そして、海外旅行に行く時は、ほとんどの国に行っても英語は重宝する（因みに私

は四十六か国を旅したが、全く問題なかった）。盗難、疾病と、自分を守るという意味でも、英語ができるのはプラスである。

高齢者となった父と母は日本でフツの生活をしているが、彼らにとって、

英語を知らなくても、使わなくても、平穩な日々が過ごせるのである。最近では氣どって、ヒヤリングだのアセスメントだの、やたら英語を使うとカッコイイと思っているような人がテレビでしゃべったり、新聞の記事を書いているようだが、日本語が使えないわけじゃないですよ。

こういう点、フランス語を英語の洪水から、守ろうと努力しているフランス政府は偉いゾ、と私は思う。日本人って、自分をうまく表現できないっていうか、すぐ流されるっていうか、これは日本政府も同じこと。だから、他の大国にばかりにされたり、いじめられきものに遭うのよね。もっと主張したいのよ。

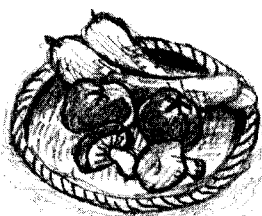
でも、それにはやっぱり英語の実力がないと困る。が、一般市民にとってそのような能力は全く必要ないのである。だから、英語を敢えて第二公用語とするのは、バカげているとしか思われない。無駄な抵抗はやめよ、です。

（え・渡辺美帆）



座談会 私も言いたい

困りものの母親



出席者 沢木 楓 井上 香奈子 早乙女 光子
司 会 田中 喜美子 編集部 和田 好子

母子の密着

司会 今日は母親の話なんです、身近なところで、非常に感じたことがありますね。お母様が八十歳ぐらいで、娘さんが六十二、三なんだけど、ものすごい依存的なお母さん。同居してらっしゃるんだけど、台所で洗い物ひとつするにも、べったり寄り添って後ろに立っているという、なかなか恐ろしい話だね。

母親と子どもが仲がいいってのは、決して悪いことばかりではないけど、どうも今の日本では、悪い方向に行ってるらしい。ということ、親子の密着という体験をしてらっしゃる方に、お話を伺ってみようというのが、今回のねらいなんです。

依存型の母

沢木 私の母は、依存症っていうんでしょうか、誰に対してもすごく依存しているん

ですね。結婚して離れたところに住んでい
るんですけども、私がそばにいないこと
で他の方にも迷惑をおかけすることにな
って、問題だなあと感じていたところです。

和田 おいくつですか？

沢木 今年七十二になります。

父が再婚してしまして、兄弟は私の上に
たくさんいるんですけど、私は母が産んだ
ただ一人の子なんです。それで母にとつ
ては、一人っ子のような感覚があるような
んです。

そういう家庭に嫁いで、母がうまくやれ
ば、丸く収まるものなんです。うけけれど、
父も母もその点ではうまく努力ができなかつた
というのか、やはり母と家族との折り
合いがよくなって。

そうすると自分が産んだ子どもですか
ら、母は私をかわいがりもしたいし、いろ
んな困ったことがあれば、こうなのよって、
聞いても欲しいと。

小さいころから、母方の祖母からも「お
母さんはすごく苦労してあなたを育てたん
だから、大事にして、のちのち面倒みてあ
げるように」と、ずっと呪文のように言い

聞かされて、大人になるころには、自分が
嫁に出るときには、母も一緒について出る
ものだっていうくらいに感じて育ったんで
す。

家の中で折り合いがつかないにつれ、何
かにつけて私の部屋にやってくるのはグチを
こぼして、「家を出たいけれども、両親そ
ろって嫁に出してあげたほうがって皆さん
がおっしゃるし、あなたが大きくなってお
嫁にでるまでは」って。

司会 よく母親の言うせりふですよ。

沢木 私はいわゆる結婚適齢期より少し上
で結婚しましたので、家を用意してあとは
お嫁さんを迎えるだけ、だっておしやる方
の話を持ってきたのは「どうかしら」って、
そういう感じだったんです。

司会 自分の居場所を作りたいのね。

沢木 ええ。結局母が思うような相手には
恵まれませんでしたが。

和田 他の人に依存するっていうのは、ど
ういう時なわけですか。

沢木 私が成人するにつれ、家にいる時間
もなくなりましたし、高校ぐらいの時では
うか、勧められて母が働きに出たんです。

そういうところでお友達ができますよね。
今度はそのお友達にべつたり依存する。お
友達に「私はこんなにかわいそうな身の上
だ」って、自分の観点から話しますから、
知らない方は「まあ、そんなかわいそう
な目に遭っているの」ってなるわけですよ。
そうすると、優しくしてくださる方にどこ
までも甘えてしまふ。

司会 なるほど。お母様は育つ時に、ど
ういふ両親に育てられたのかしら。

沢木 小さいころから体が弱くて、祖父に
すごくかわいがられて育つたらしいんです
よね。農家で忙しいんですけど、学校に行
くにも送り迎えをしていくし、戦時中で、
梅干しひとつ入れたお弁当をもつてこなき
やいけない時に、「私は梅干しがきらいだ
から」っていうことで、かつおぶしにおし
ようゆつけて丸めて、梅干しに見立てたも
のを持たせたりとか。

和田 大事にされたんですね。

沢木 みたいなんですね。

空襲警報が鳴って防空壕に入りなさい
って言われても、「あんな暗くて、じめじ
めして狭いところにいたくないから、私は

ここで寝る」って言って、家で寝ていたとか。

そういうふうに、自分がいいと思うことは誰が何を言おうが、っていうところがあるわりには、人にこれがいいって言われると「そうかしら」、こうしたほうがいいって言われると「そうかしら」ってなる。だから、何も一貫していないし、家庭がうまく折り合えてなくても、「私が好きで嫁いできたわけではない」っていうことになっちゃうんですね。

支配型の母

井上 私は母のどこが困るかというところ、介入してくるんですね。プライバシーとか何もなくなってきたやつて。

私は大学生の頃から独り立ちするのが夢でしたんですけども、結婚してもなお、電話をかけてこないとか、一方的に怒られて、いい顔して合わせていると、今度はどんどん入り込んで、すべてに指図をするようになってきたりとか。

依存とは違うんですけども、自分が頼り

にされたくて、いつも「ありがとう」って言われたいけど、それがかなわない。例えば、お金を出したら口を出す権利がある、というような感じになってきて、親風をどこまでも吹かせたいんです。

司会 でも、いつまでも続くよね、親の支配って。

和田 そうなの。いつまでたっても、子どもは子どもだと思うのよ。

井上 母の価値観が間違ってるんじゃないかって思ったのは、沢木さんよりもっと遅かったんです。ほんとに母のことしか知らなくて、それが全部正しいと思って生きてきていましたから。世の中の人みんなそういう考え方のものなんだ、こちらが合わせなきゃいけないんだっていうふうになっちゃうって。

結婚するころになって、世の中にはいろいろな価値観とか尺度とかがあるんだって。「わいふ」なんか読んでいても本当にそれを感じるんですよ。みんな肯定されていいんだ、反論する人があってもいいんだ、っていうことがわからなかったんですよ。「世の中の人はいこう見るのよ」って脅され

たら大変だっと思ってしまいましたし、母の指図が厳しいから独立したいと思っても「都内にお家があって、女の子が一人で家を出るなんて、周りの人にどう思われるかしら。嫁入り先もなくなる」とか言われたら、もう怖くて。

私は、のろまでケチで冷たいってずっと小さいときから言われていて、「あなたはそういう子なんだから」って育てられてきたんですよ。だから、そういうことを他人様にわからないように、取繕わなくちゃいけないっていう気持ちに常にあつて。

司会 それ、実際の井上さんのイメージと全然違いますよね。

井上 他の人が、自分の意見を「○○パーセント受け入れられて」「それでいいのよ、それでいいのよ」って育てられたっていうのを聞くと、もうはっとさせられるっていうか、そういうふうには育てられなかったら、私は違う人になっていたのだからなってますごく思います。

その上、母は六十を過ぎてから、自分をわかって欲しいとか、受け入れて欲しいっていうのが、ばーっとものすごく出てきた

んです。

おまけに親は娘のことを一番に考えているんだから、親の言うことを聞いていれば間違いはないって、そういうやり方で指図してくる。

司会 どんな場合におっしゃいます？ たくさんありますか？

井上 よけいなお世話だったり、わかっていることを言われることが多いんですけど、一番めめたのがお祝い返しだったんですね。母の友だちから私がもらった物には、すごくよくやって欲しいとか。私としては、もらったものをお返しをしていると、お金



井上香奈子さん

で買ったみたいになっちゃって悪いからやらない、自分でやっておいてっていうこともありました。

早乙女 井上さんは何人きょうだい？

井上 弟と二人です。

早乙女 息子さんにはどうなんですか？

井上 めちゃめちゃかわいがっています。何をしても息子はいいい子だ、になっちゃうんです。やっぱり男の子っていうのは違ふみたいですね。

司会 今、どんな男性になりましたか？

井上 絶対ろくな大人になるわけがないって、私はそれだけを信念に大人になったんですけれども、弟は愛されて育ったのがよくてたみたいで、私と違ってものすごく外向的です。宵越しの金を持てないタイプなので、お金遣いが荒いということは多少あるかもしれないんですけど、その程度で。私としたらうらやましい性格。遊び上手だし。

司会 お父様は、そういう感じの支配力は持っていらないんですか？

井上 ある程度はあります。どちらかっていうと母親のほうが威張っている家庭でし

ただ。

司会 今お父様はご健在？

井上 はい。もう母のことをすべて受け入れざるを得なくて。でも、弟ともよく言うんですけど、「父は母が好きで結婚したんだよね」って。

母も、今何を言っても自分を受け入れてくれるのは父親しかいない、っていうふうに思っているようなところがありますね。好きなことを言えるっていうか。

司会 じゃあ、いい夫婦関係ですよ。

井上 今は父が仕事に行っているからいいと思うんですけども、来春くらいに辞めて家になるようになって、いつも一方的に母のはけ口にされちゃったら、大丈夫かなあって。

司会 ほんとねえ。また違ってくるでしょうね、これから。

井上 バリバリの有閑マダムだったんですよ。自分の世界があって、すごく強かったんですけど、体を壊したりするとそれが契機になって、自分に自信がなくなってくるのもあるみたいです。

司会 それはあるかもしれないわね。

さまざまの依存

やまざまの支配

早乙女 私の母は、特別困り者ってわけじゃないんですけども、今はやっぱり、私を頼りにしているんですね。

あと二か月で九十八歳になるんです。食事をとることと、トイレはできるんですけども、私が行かないと「寂しい、寂しい」って言うんですね。耳が遠いために、電話をしてあげても電話で話を通じないんです。それで行くと、兄とか兄嫁に「突然来られても」って言われて。

和田 お兄さん方は同居していらつしやるわけね。

早乙女 はい。それで、四月から介護認定五になって、週に一回ヘルパーさんが来てくださるんで、身の回りのことはほはいいいんです。だけど、今度は「ヘルパーさんが来てくれるんで、お嫁さんが何日も顔を出してくれない」って私に文句を言うのね。不満というか、グチを言うんですね。

自分は耳が遠いために、大きな声で言う

んですよ。こちらの声も大きくしなくちゃいけない。そうすると筒抜けになるのね（笑い）。

司会 これは老人問題ですね。昔からそうなんですか？

早乙女 いや、年を取って、自分が自由に動けなくなつてからです。自分から娘たちのところに行かなくなつたから、来て欲しいんですね。

司会 ある程度無理もないことですよ。

早乙女 無理もないんですよ。寂しさっていうのは年を取ること増していくんだなっていうのがわかるんですね。

自分の親を看るっていうのは、私もこういうふうになるんだろうか、という気持ちでいながら看ているわけですよ。なりたくない、なりたくないって思いながら生きているっていう。

和田 やっぱり老人になるっていうことは、ひとつひとつ物を失っていくことよね。

早乙女 忘れないで欲しいんですよ。みんなに関心をもつて欲しいっていう気持ちがある、だんだん強くなつてきてね。

和田 それは実際にみんなが関心を持たな

いからのよ。

司会 だって何にもできない、わからない人になっちゃうんだもの。

早乙女 そうなんですよ。

司会 そしたらみんな、関心失いますよね。それ、当然のことなんだけど、その時何人間を支えるかっていったら、これはえらいことだね。

和田 今の老人の場合には、子どもに自分を覚えていて欲しいとか、自分が子どもといつもいつも一緒にいたいとか、一生いい関係でいたいとか、そういうようなことを考えているからね。

結局、寂しいっていうのは、誰からも関心を持たれないし、誰からも愛されていないっていうことの寂しさだと思うのよね。

司会 でも、ほんとのこと言うと、人間って、誰のこともほんとには関心持っていないですよ。私はかなりそういう虚無的な人生観持っているわけ、それに関しては。

だって、ずいぶん大切だと思つていいる人が死んでもね、やっぱり人間は生きていくわけよ。本当にその人なしに生きていけなかったら、自殺しちゃいますよ。でもやっ



早乙女光子さん

ばり生きているのよね、乗り越えて。だから人間にとって私は、絶対に必要な人っていないもんだなっていう意見なのね。どんなに愛していても。

和田 そりゃそうだよ。

母親からの自立

沢木 母は、小さいときから「うちの子は」「うちの子は」って話をして、私にべったりなんですけれども、私はとっても母に冷たかつたんです。

司会 それはどうして？

沢木 私も小さいころは「お母さんお母さ

ん」って買い物にも付いて行って、一日中つきまといたいんだなって思うんですね。

けれども、ある程度物がわかってきますと、一方的に母の見方から「他の家族はこうである」って聞かされていたことと、自分が見た見方で「そうは言うけれども、やはりお母さんはここが悪いんじゃないか」っていうことが出てきますよね。そうすると、やはり母にばかり優しくもしてられないっていうか、私はそうは思わないわっていうことがたくさん出てきてしまってます。

司会 それ、おいくつぐらいの時でした？

沢木 そうですね。高校ぐらいでしょうか。

和田 それは遅いですね。

沢木 そうですか、遅いですか。

司会 それまでは、お母さんの味方って感じだった？ でもやっぱり、うるさいなあとか。

沢木 うるさいなあとは思いましたけれども。母に「あなたはそういう立場にいる」みたく聞かされるわけですから、何となく自分も母の方に合わせなくてはいけないっていうんでしょうか。

司会 井上さんの場合は、過干渉っていう状況は望ましいことじゃないと思ってらっしゃるわけだけども。

井上 私が密接な関係を絶つしかない、という結論に達しまして。今度は私の子育てとかに、干渉するようになってきて、ちょっと大変になっちゃったので、これはしばらく離れているしかないかなって。

私も仕事していたりすることもあったので、つい頼つたりしてたんですけど、やっぱりそれが向こうに意見を出させることにもなってきたりする。だから何かの時にはベビーシッターさんを頼んで、家にも行かないとか、そういうふうにはしているんですね。

母は、いつもいいなりになって、自分の前にひれ伏す子が一人、必要だったのかも。しない。だから私にも当たってくるし、今度は父とかにも当たるようになっていきます。

和田 とにかく子どもが大人になったら、距離は取らないとダメね。

司会 いや、子どもの時からでしょう。
井上 難しいですね。介入しすぎてもい

けないし。私としては「お母さん、お母さん」って、立ててあげなくちゃいけないっていう気持ちもすごくあって、私が至らないんじゃないかなあって。やっぱり母を満足させて、「いい子だったわ」って言つて欲しいっていうのもどこかにあるから。

司会 そういうふうに思うのね。

井上 自分の思い通りに行かないと、あなたは冷たいとか、意地悪だとか言つて、私のことを責めるんですよ。そういうふうにいわれると、すごくつらい。

「年寄りをそうやっていじめて、私はこれから一生いじめられて過ごすんだ」って言ふんですよ。

司会 えーっ、それは表現として、かなりきついよね。

井上 ですよ。

早乙女 私の母は私を支配しないっていうのは、要するに、昔は子どもが太勢でしょ。その上使用人がいて、全部の食事の支度でもう頭がいっぱいで、子どもに関心を持てなかったんですね。

司会 うんうん。よかったよね。

早乙女 だから、こちらはこちらで勝手に

育つていくしかないんですけど、ただ、体だけを心配するんですよ。無理するな、そんなことやめときなさいって。

で、母の言うことを聞いていると、私はこういう母親になるのかなと思つて、いろんなことを報告しないで内緒で習っちゃうとか。

司会 それ、いくつくらいの時から？

早乙女 十六、七ですね。

司会 まあ、穏当な思春期というか。

早乙女 でもね、十六、七の時、私はもう社会人だったから、寂しいわけですよ、社会の中で自分が。

で、親に訴えたいんだけど、母親が私の気持ちをわからないで、私に頼る感じだったのね。ちやうど母がその頃、たぶん更年期だったと思うんですけど、お医者に行くんでも何でも私に付いてきてっていう感じで。

ある時私、爆発したんです。そしたら、母が泣き出しちゃったんですよ、おいおい、おいおい。「私はどうしていいのかわからないの」って。それで私、あ、この親を頼っちゃいけないだって、それで心が離れた。

和田 いくつくらいの時？

早乙女 はっきり覚えてる、十七歳。

司会 どんなことであなたはおつしやつたの、お母様に？

早乙女 勤務先で私もいろいろあるわけですよ。それを親に聞いて欲しいんですよ。年末で銀行はものすごく忙しいですし、親のほうも職人さんなんかの夜食の世話とかで忙しくて、母にしてみたら、聞く耳持てられないですね。

司会 「お母さん、ちつともこっち向いてくれないじゃない」みたいな形の言い方だったんですか。

早乙女 私の気持ちをお母さんはちつともわからないって。

和田 だけどもあ、子どもが大人になったら、全然わかんないですよ、本当のところは。

早乙女 そうですね。それがきっかけで、母親から自立しちゃったっていうか。もう頼るまいっていうふうになりましたね。

和田 私の母は、四十三で死んだ。それで、沢木さんの母上とおなじ立場。後妻であつて、前の人に子どもが何人かいて。私一

人しか母親の子どもはいない。で、すごいべつたりで、面白いことにね、小さいときは心理的に一緒になっちゃうのね。

母は私にすごくおしやれをさせたくてね。当時は和服ですから、きれいな着物着せて、帯を結んでっていうのが大好きなわけよ。それで外出する時に、とってもきれいにして連れて行くわけ。それがまた私ちつとも苦しくないし、いいと思ってやっていた。

それが九歳の時にいやになった。「どうしてこんなに苦しいかっこをするの」って怒った。そしたら母がね、「女は何でも我慢をしてきれいなならなきゃいけないんだ」って言うから、こんな価値観を持った人と私は一緒にいるのかと思ってね、それから一年間、ものすごく反抗して、母をとても悲しませて死なせたんですよ。

司会 思春期が早かったんですね。

和田 ちよつと早かったわね。反抗期よね。もう、母のことすっかりいやになっちゃって、母が私に仕込むうとしていた芸事も全部放り出しちゃった。それで私は独立できたとつていうのがある。

司会 そういうお母さんがくつついていて、も、あなたみたいな強烈な自我を持っている人は、そういうふうに独立しちゃうのよ、早くから。

井上さんは、結婚するころまでお母さんの価値観が世の中一般だと思ってらしたわけでしょう。そういう方のほうがずっと多いと思うわよ。

母に似てしまふ！

沢木 何が今一番困っているのかっていうと、母みたいになりたくないってずうっと思っているんですけども、自分で何か似てきてしまっているって感じているんです。思い当たる節があるんですよ。あれ、こう



いうところで似ているのかなくて。

あと今、息子が一人いるんですけども、まだ小さいんですね。で、周りの方に「二人目は？」って言われるんです。もし娘が生まれてしまったら、私は娘との関係を、どういうふうに持てるんだろうっていうのが、一番心配なところ。怖くもあるし、なんか上手にできないだろうなっていう気持ちですごく自分の中にあるんですね。

自分が冷たかったくせに、仲のいい親子がうらやましいから、そういうふうに見えるかなあって。

井上 私も娘が生まれたら、自信がないっていうのはありました。男の子しかいらないうって主人に言ってたぐらいで。子どもが生まれて、男の子でしたけど、母と同じようにしちゃうんじゃないかって思いがすごくあって、それでNMSに入っただけです。批判しながらも、他のやり方がわからないし、どこがいけなかったかもわからないし。NMSに入って、結構開眼しました。

司会 私よりポート拝見させていたいたけど、井上さんは全然ぐずとかそんなんじゃないですよ。むしろシャキシャキした人

ですよ。

早乙女 母親の目から見ただけのものなんですよ。

井上 私は今はいろいろ仕事をするんですよ、人一倍頑張り癖があつて、欲張りすぎとか言われるんですけど。もしかしたら、のろまとか言われたことがバネになつているのかもしれないと思つことはあります。

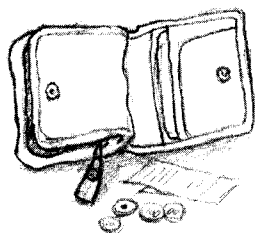
そういうふうに言われたくないっていうか。私にもできる、みたいに母に示したいところがあるから、逆に常に母の目が私の行動を支配しているのかもしれない。

司会 恐ろしいことですね。

現代日本の母子問題

司会 親子のつながりっていうのは、その人の半生を支配しちゃうけど、人間っていうのはそれでもやはり「自由」がある。なければ、作られた通りのロボットになっちゃうわけだから。

井上さんみたいにね、違ふんじゃないってある時気づいたり、和田さんみたいに、九歳のくせに反抗したりとか。そういうふ



うに他の道に歩みだしていくわけだけど、それでもずいぶん親に作られてるところ、あるんですよ。

和田 影響受けてるわよね。

司会 そうなるまいと、いい親になろうとすればするほどダメだったり。だから本当に難しい。

和田 昔はね、親孝行はするもの、そして親は威張っているものっていうことで、形式だったから、内心どう思っているかわからなかったわけですよ。お互いやるべきことがちゃんと決まっているから、それをやって一生過ごしたわけだけど、今はそうじゃない。内心がどうかこうかって話になっちゃうから、大変ですよ。

昔の年寄りらは子どもを頼りにしているよ

うに見えるけど、心理的にはそうじゃないですよ。宗教もあつたしね。違いますよ、今とは。死ぬっていうことについても、昔の人は相当若いときから考えるわけだしね。

それから、自分の役割にとっても誇りを持つていて、それには依存するわけだけど、今の親はそうじゃなくて、愛情つて目に見えない、非常に難しいものを求めるから、大変なことになっちゃうんだね。

司会 要するに女がね、暇になりすぎたの。
和田 そうだね。

司会 日本のことについて言えば、それが最大の原因。食うために一生懸命働いて、子どものことなんて放りっぱなしで、他の人がしつけてくれるって、昔のあのやり方はよかつたわね。

今の日本って、子どもを愛する人と評価する人が一緒なの。ダメなのよ、それは。愛するなら愛するだけの係で、評価するとかは外でやってくれて、子どもはそこで評価されてひどい目に遭つてきても、母親が「ああ、そうかそうか」とかって言つてね、それだけだったらいいのよ。

早乙女 昔の親は忙しくてね、子どもも親に評価されること、意識してなかった。

司会 最近岸田秀さんの新刊本読んだら、あの人は親にものすごく愛されて、何から何までやってくれる親で心地いいわけ。ところが一点だけ「あんたはうちのあとを継ぐんだよ」というんでね、彼がやりたい学問をやるのは許さない。

早乙女 やっぱり支配してる。

司会 支配してる。何から何まで言うこと聞いてくれるんだけど、肝心のところがダメなの。それで岸田さんはノイローゼになっちゃうのよね。

今は学校もいいところに入るとか、勉強もできるとかって、それしかないわけでしょう、ほとんどの親は。だけどその一方で、真綿でくるんでいる。そうすると気持ちいいわけ。殊に男の子は。気持ちいいからすぐお母さんに依存しているんだけど、同時にその人間が自分を評価する役割を持っているわけ。すごい分裂的な、ノイローゼになる基礎を作るような親子関係にね、日本全体がなっているの。

ことに日本では女を家の中に閉じ込めて

いるでしょう。だから、どうしても生きがい子どもにいつちゃうのよね。途中で再就職したにしても、やっぱり子どもの存在のほうが大きいんですよね。

早乙女 家の中においても、目を外に向ける人は大丈夫じゃないですか。

司会 かなり能力ないと。やっぱり最終的な生き甲斐は、子どもだっているところがあるのと、それから、母親ってやっぱり子どもを支配したいところ、あるのよ。思う通りになつて欲しいと。

例えば私なんか、芸術家とか学者とかそういうものに対する指向性があるからね、息子見ててなんか釈然としないんだな。「このままずっとサラリーマンか」とか、どつか心の底で思っているわけ。これ、まったくの偏見なんだけど、やっぱり息子を支配したい自分がいる。

そういう母親の「業」で、子どもをダメにしない社会をつくらないといけない。今の男の子の「無気力」の大部分は、母親が自分の生き甲斐を持ってないから作られたんじゃないかしら。

(え・栗田 笑)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。

FREE TALK

フリートーク

再就職について考える

東京都三鷹市

林 夏子 (46歳)

下の子が小学校に入った頃、「わいふ」のお知らせをみて原田先生の「再就職カウンセリング」にいつか行きたいとずっとおもっていた。縁に囲まれた静かな部屋で、心理テストをします、とか書いてあったような気がする。

なんだかんだで月日は流れ、わたしは四月からアイムに入学し、三十人ほどのクラスメートとともに、原田先生と心理テストをした。それにしても、原田先生はエネルギー溢れる先生である。お話もおもしろいし、ファッションなど見ているだけでも楽しめる???

ランチにも来てくださったので、近くに座らせていただいた。

夫の母は小学校の先生で、定年の時

には校長をしていた。その人が私が長男を生んだ時、「共働きをするような時代じゃない」と言ったのである。また、友人は大学の先生をしている夫に、「共働きで子育てをすると、どちらかが早死にするから、俺は死にたくないからしばらく仕事はやめてくれ」と言われたという。そういう話をしたら原田先生に、「専業主婦だつて死ぬ時は、死ぬんだから」と一笑に付されてしまったけれど……。

わたしは、親には見合いをして結婚するのが理想として育てられた。大学では、女性の自立が基本であることを繰り返し教えられた。親に背いて恋愛をし結婚、共働きを楽しんだ。子どもがいなかった五年間はほんとうに楽しく、人生は私たちのためにあるようなものだった。年に二回は海外に出かけ、週に一度の念入り掃除で家の中はいつもピカピカ。押し入れの中だつていつでもお見せできる状態。ときどき友達を呼んでパーティー。部屋には花は欠かさない。

そして、子どもを産んでもなんとかやっつけていけるように前より広いマンションに引越し、保育所の手配、子育てしながら仕事を続けるためのノウハウを研究し、自信をもって産休にはいつ

た。しかし、産後三カ月で職場復帰してから、孤立無援でゼロ歳児をもって、フルタイムで働くことがどのようなことかわかるまでに、時間はかからなかった。



まず共働きする場合、夫の職業を選ばなければならない。だって、なんの助けにもならない夫ならば、母子家庭の方（経済面を無視すれば）がまだましだからである。睡眠時間四、五時間で、会社のトイレではつてくる胸をしばりながら、がんばりぬかなければならない。赤ちゃんは病氣もするし、夜泣きもする。男はだいたい、夜いっしょどおりに寝ていて、赤ちゃんの世話は妻の仕事となっている。

わたしは半年ほど悩み、眠れないほど考えた末、退職する決心をした。その時の夫の一言「つらくなったからって、逃げるのか」だったと思う。

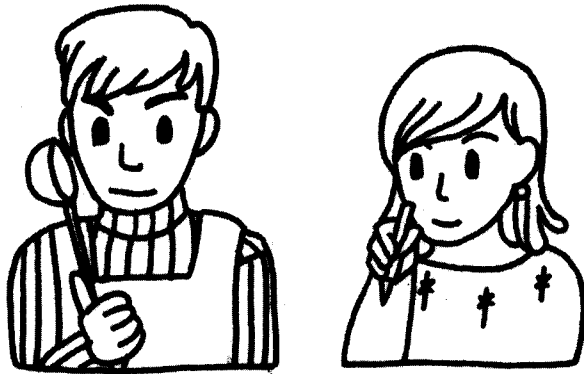
わたしは、反論する元氣も残っていなかった。子どもが病氣の時、夫が遅出で病院に連れて行ってくれるように頼んだとき、起きてもこなかったこと（今考えると彼も激務だった）、わたしひとりで奮戦していたことに気がついていまいなかったのだろう。自分の母親もやってきたことだし、世のなかゴマンと共働きで子育てしている人がいる

から、できるとでも思っていたのだろうか。

このときの悔しさは忘れていない。わたしは、この悔しさをかかえて三十三主婦をしてきた。そしてこころで、ひとつ方向を変えようとおもってアイムに来了。

しかし、である。単にフルタイムで何でもいから働ければ、経済的に自立できればそれで良いかというと、それでは、多分幸福にはなれないだろう。

最近利根川教授の奥様で、ライターの吉成真由美さんの「やわらかい脳の作り方」(新潮社)を読んだ。彼女は前々から家庭のなかで、夫、妻、子供全部が一度に輝くことは不可能だと言っている。このなかで二者までは一流の仕事をし輝けるけれど、三者全部が成功した例を見たことが無いと。成功を、ノーベル賞レベルで考えてのことかもしれないが。家庭というものを維持し、機能させるためのエネルギーも大切であり、主婦業も立派な仕事であると言いつけられる。



原田先生は、再就職アドバイザーという仕事が廃業になることを望んでいらつしやるようだが、わたしは、ライフサイクルに合わせて、家族の状況に合わせて、いつでも再就職ができる社会が理想だと思う。アメリカの企業のトップを妻にもった男性が、専業主夫になられた例があつたけれど、当然だと思う。家庭の仕事にもっと地位を与えるべきだし、子育てにエネルギーのいる時期は、どちらかが家庭にいることも自由な選択だと思う。「わいふ」の田中編集長も、わたしの大学の先生も、とにかく仕事を持ち続けることが大切と言われるけれど、仕事も子どももと頑張った女の人生が、必ずしも最高で、幸せともみえない。

現にわたしの義母は仕事の面では成功し、子どもにも恵まれ、はたからみればしあわせそのものだったかもしれないが、仕事をしていたために子どもにしてやれなかったことへの罪悪感を持っていたように思う。その裏返しで、孫には毎週つぎつぎとおもちゃを買

与える大甘なおばあちゃんだった。そして仕事以外の人間関係があまりなかったようで、孤独だった。少なくともわたしからはそんな風に見えた。家庭的なことにはあまり興味がなく、まるで定年退職後の男性をみるようだった。

専業主婦して、スポーツクラブにでも行って、ランチしているおばさんたいのほうがよっぽど元気だった。友達とプライベートな旅行とかもしないし、義父と二人の旅行など考えられない風だった。そして定年後に小説を書くという大きな夢をもっていたのに、長年の無理がたたったのか、病気になるってしまったのである。

こう考えていくと、わたしは働きたけれど、健康を害したり、家庭の機能がおかしくならない程度で、また夫や子供と話し合い、ある程度の余裕をもつてという条件つきである。夫との関係が悪く、とりあえず経済的に自立しなくてはという状況ならば、どんなに無理をしても働くだろう。

こんな考えかたでは、だめでしょうか？ こんな甘つちよろい考えでは再就職など夢のまた夢？

主婦が家族の召使いに甘んじるのはいただけないが、家族のみんな、主に小さい子どもやお年よりが無理や必要以上の我慢（食事、洗濯、掃除などにおいて）を強いられる事のない働き方があってもいいと思うのですが。生活を楽しみながら……今の日本では無理なのでしょうか。

とりあえず、食べるに困らない有閑マダムなたわごとと、言われてしまえばそれまでだけれど……。

作戦

東京都台東区 高梨 陽子（57歳）

一泊以上の旅行に出かけるときは、夫に伝える時期を見計らうための、作戦をたてることになる。

何しろ、日帰りで実家へ行くときで

も、素直に「行っておいで」という言葉のない人なのである。必ず一言、二言の余計な言葉が返ってくる。実家までは電車で約一時間ぐらいの距離だが、十時ごろに家を出て、お昼に帰ることは無理と承知で「お昼には帰るんだろう」などと言う。冗談が半分としても、一事が万事このような調子である。

旅行に出かけるときには、お伺いを立てても絶対にオーケーが出るはずがないので、いつも事後承諾である。夫にすれば、この態度が気に入らないのかも知れないが……。

泊まりの旅となったら、出かけることをいつ切り出そうかと頭を悩ますのである。夫のご機嫌のいいときを狙うか、テレビなどでタイミングよく旅行先が放映されれば、切り出すきっかけとなる。

いやな思いをする期間は短いほうがいいので、なるべく間際まで伝えないことにしているが、やはり一泊以上であれば、少なくとも一か月前には話を



する。

今年の夏は、北海道の富良野ヘラベ
ンダーの花を見に出かけた。高校時代
の友人が自家用キャンピングカーで、
ここ数年は毎夏、富良野ヘラベンダー
の花の写真撮影に出かけていることを
聞いて、女性三名と男性一名で一緒
させていただく予定であった。だが、
男性が都合が悪くなり、キャンピング
カー所有の友人の奥様が同行すること
になった。

六月初めに日程が決まったという電
話連絡があり、すぐにカレンダーに日
程を記入した。毎度のことながら、旅
行の日程が決まると、夫に伝える前に
カレンダーに書くことも、作戦のひとつ
なのである。夫が見るかどうかは別
として告知手段である。

新潟港から小樽港まで、約十八時間
のカーフェリーの旅を楽しむことにな
り、往復で二泊は船旅が入り、道内で
三泊すると五泊することになる。新潟
港の出港が午前十時半であり、前夜の
十時に土浦を出発することになった。

この前夜の車中泊は、夕食の片付けを
済ませ、入浴をして出かけるので、一
泊として計算に入れないことにしてい
た。

だが、車中泊については後日、夫と
のトラブルの一端となってしまう。夫
はあくまでも一泊として数えると言
張り、私は数に入らないと頑張った。
すると、夫は「だったら、夜中の十二
時過ぎに家を出ることにしたらいい」
と言うのであった。

いよいよ出発の一月前になり、夫
に出かける日程を伝える日がきた。七
月十九日にカーフェリーで新潟港を出
て、富良野ヘラベンダーを観に行く
と言った。もちろん「行ってもいい」と
いう返事はなかったが、スケジュール
通りに出かけるつもりであった。

最終的な日程表が七月初めに届いた
ので、夫にしっかりと伝えることにし
た。やはり、カレンダーを見たのこ
とで、「富良野のラベンダーを見るの
に、どうして一週間もかかるのだ」と
言い、機嫌が悪いのである。「飛行機



で行けば二、三日で行けるではないか」とも言う。でも、「絶対に行く」と言う。夫が「絶対に行かせない」と陰湿な状態になってしまったので、「行かせてください」と、丁寧にお願いしたが、何の言葉も返ってこなかった。

今回の約一週間の旅は、無理かもしれないと危惧していたのであるが、強引に押し通せるものと思っていた。これまでの最長旅行は三泊であったが、六年前に五十日の入院経験があるので、高をくくっていたところがあつた。この読みが甘かつたことを思い知らされたのである。

その夜は、どうしたら出かけることができるかと、一生懸命に作戦を練つた。その結果、往路のカーフェリー船中一泊、キャンピングカー車内一泊と富良野での民宿一泊するという、三泊の日程を変更して友人たちよりも、二日早く帰宅することに決めた。

翌朝夫に、二日短縮して七月二十二日には帰ることにして、航空券の手配をすると伝えると、「ダメ」という言

葉のニュアンスが少し変わった。

旅行会社社に勤務している弟に電話をして、七月二十二日搭乗の旭川空港までは新千歳空港のいずれかのチケットを、何が何でも取って欲しいと頼んだ。旭川空港発の便が取れたとの連絡があつた。個人料金は三万円近い金額であつたが、この際は度外視することにした。

七月二十一日、富良野に入ると、ラベンダーの花は最盛期で素晴らしい香りで迎えてくれた。二年前の七月初めに富良野に行ったときは、ザーザー降りの雨のなかでラベンダーを観たのである。また富良野のポスターやパンフレットでお馴染みの「彩りの畑」の花々を残念ながら見る事ができなかった。

だが、今回はこの「彩りの畑」も紫・赤・白・緑・黄の花々が、なかなか丘に十一本の帯が流れるように、彩りを添えていた。思い切つて出かけが良かったと、しみじみ実感したのであつた。

この旅は、みんなと最後までお付き合いできなかったので心残りではあったが、カーフェリーで海を眺めながら入浴するという、のんびりとした船旅をしたり、キャンピングカーの旅も初体験ができた。天候にもほぼ恵まれて、思い出の多い楽しい旅行となった。

菜園を借りて

千葉県船橋市 三枝きよみ（62歳）

嫁いでいる娘から電話が入った。

「おかあさん元気、先日は有り難う。その後どう」

つい四、五日前皆で孫の誕生祝いをしたお礼の電話だった。

「ええ私は元気よ、それにあれから毎日忙しくてね、畑にも行かなくちゃならないし」

すると娘は待ちかまえていたように、

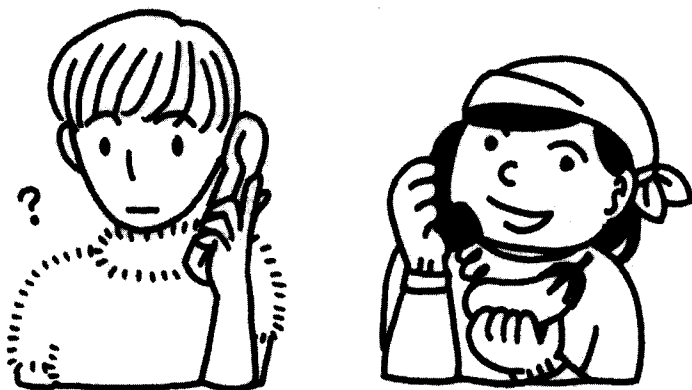
「私にはおかあさんの気持ちからないわ、だってあんなに農業は嫌いだと言っていたのに畑を借りるなんて……」

「そんなこと言ってたけれど、花を育てるのは好きだし、本当は土が好きなのかもね」

「パパにも言ってみたらね、俺には分かる様な気がするな、人はもとに戻るものと言っているからな、って言ってたけれど……でも私は小さい頃から店の手伝いをさせられていたので、今だってお店屋は嫌いだよ、一度いやだと思っただけは絶対したいとは思わないけどなあ」と私が畑をすることに不思議がっている。

「人間それぞれだからいいんじゃない」と電話を切ったが、嫌いだ嫌いだと思っていたことも、裏を返せば本当は好きなのだということもあると思う。

例えば話は別だが、父に小さい頃裏切られ（出て行ったきり帰って来なくなつた）男なんて大嫌い、男ほどあてにならないものはない、女だって一人



で子供の一人や二人位育てて行くだけの力は欲しいものだ、子供心にも私は思っていたものだ。

それが年頃になり結婚してみれば、男が皆悪い奴とは思わなくなった。

そんなこと当然でしようと言われればそれまでだが、男は皆悪い奴と思っていたのだから仕方がない。ほどほどに相性さえ良ければ、結構なんとかやって行けるものである。

また畑の話になるが、ここに越して来て三年目になる。船橋でもはずれの方なので交通の便は悪いが緑が多い所なのだ。したがって貸農園などもところどころに見うけられる。私もやって見たいとは思っていたのだが、きつかけがつかめなかった。

ある朝ベランダで洗濯物を干してたら隣の家では男の人が干してる。「おはよう御座居ます。この頃奥さん見えませんが、お元気ですか」と声をかけました。「家内は娘の所に孫が生まれ、行ったり来たりで忙しいですよ」という。「ところでキャベツはいりませんか、

私が作ったものです」と言う。良く聞いてみると家庭菜園をしていると言う。それがきっかけで私も借りるようになった。

一年、一年の契約で年間三千円、それに〇〇会という会に入会という条件だった。でも入ってみたら地域の市の公園の清掃を月一回すること、そして秋には日帰り旅行など、親睦を深めて行こうという会らしい。

五月に入り初めての公園清掃に出かけた。仕事にとりかかろうとしてたら、全員集まったところで「ラジオ体操から」という。ラジオ体操なんて何十年振りだろう。子供が小学生の頃、夏休みについて行った時のことを思い出す。

ラジオから、「はい胸を張って手を斜めに上げて」と声が流れる。目を上げると木々の枝先に若芽が萌え出ている。

さあ、あの畑には何の種を蒔こうか。久し振りに体から力が湧いてくるのを覚えた。

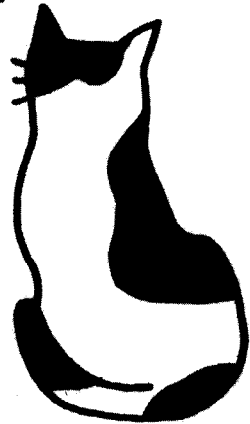
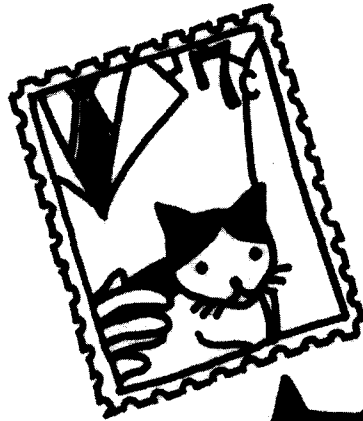


グリ基金設立

長野県小県郡 花岡 京子（51歳）

グリとは、家族が大切に行っている我が家の猫のことである。平成十年八月生まれの彼は、二歳を過ぎた所なので、人間でいえば二十歳というところである。彼が初めて我が家に来たのは、生まれて四十日位したところだった。

柔らかい産毛がまだ残っていて、小さな体で家族の後をチョコチョコとついて走る姿は、とてもかわいかったし、家族にもすぐ慣れた。白黒ブチの毛に、目は特徴があった。瞳孔が大きくならず黒い点を打った様な目をしていて、愛敬があるというか、素つ頓狂な顔をしているので思わず吹き出してしまった。そんな目から娘が「グリ」と名付けたのである。夫は切手に趣味があり、アメリカの大統領クリントン氏と猫ち



やんが一緒に写っている切手を見せ、「うちのグリと同じ猫だぞ」と言った。実に良く似ている。

グリが友人宅から我が家に来た時は、小さいながらも足が太くとても丈夫そうに見えた。さすが、母猫と娘猫二匹から乳をもらって、育てられただけのことはあると家族の者と話したの

だが、これが見せかけだったと、だんだんとわかってくるのである。彼の医者通いを紹介すると、

平成十年十一月、四十度の熱で目によってしまい、血便もする。風邪と言われる。

平成十一年三月、去勢手術をする。平成十一年七月、野良猫とケンカ。

肩をかまれて化膿し、七針縫うケガ。
この時入院。

平成十二年五月、耳ダニ治療。三週間通院。

平成十二年七月、夏バテ、食欲不振。
一週間食事を食べない。四週間通院。

平成十二年十月、鼻風邪。野良猫とケンカをし、前胸ケガ。

この様に、頻繁に医者通いをしてい
るので、その度に高額な医療費を支払
うはめになる。家計費も圧迫されてい
る。

「夫の社会保険証に、子グリと書いて
社会保険で動物病院へ行くかね」

と、冗談を家族で話したことがある位
だ。子供が大きくなり、やっと医者へ
も行かなくなりやれやれと思ってい
たら、猫でこれほど病院通いするとは思
っていいなかった。

そこで家族が考えたのが、「グリ基
金」である。貯金箱に一月一人五百
円を入れ、このお金を彼の医者通いに
当てるというものである。早速娘が郵
便ポストの貯金箱を買って来た。その

夜、各自五百円をポストに入れた。当
のグリは、鼻風邪で出なかった声がや
つと出るようになり、食欲もなかった
がゴハンも食べられた。

こんなに世話のかかるグリだが、家
族にとつては大切な我が家の一員。彼
がいるから家族はほっとすることも出
来るし、リラックス出来るのだ。そう
いった意味では、グリに感謝している。
グリ基金は設立したが、運用をなすべ
く医者へ持って行かないよう、祈るば
かりだ。

もう調査員 はいらない

愛知県豊橋市

藤池 弘子

今年、国勢調査が実施されました。
新聞紙上読者からは、調査票を見られ
るのではないかという不安の声と、調
査員の、いちいち人の生活なんか気に
しません。見るわけがない。の反論が

載っていました。これ、五年前と同
じ状況ではないかしら。

私の知り合いに、人の年齢に非常に
興味を持つ人がいます。その人は、担
任はもちろんのこと、学年の違う先生
や校長先生の年齢まで知っていました。
た。もし、この人が調査員だったら、
封をし、シールを貼って渡したとして
も、きつと開けて見てしまうのではな
いかと思います。人を疑いたくはない
けれど、世の中には、確かに知りたが
りの人が存在します。不安に思う人が
いても、不思議ではありません。

さて、そのまま出された（裸の）調
査票ですが、調査員が記入をした後は、
他のものと一緒にまとめて市区町村の
職員に渡されます。ですから、調査員
が開封して見たとしても、その束の間
に紛れ込まなければよいのです。黙って
いればバレません。

今回、実施するに当たり、「世帯のプ
ライバシーを守るために」と言うマニ
ユアルが調査員向けに作られたそうで



す。

(A新聞十月二日、「国税調査の疑問
総務庁に聞く」より)

私は笑ってしまいました。シールは
はがせるし、すき間からのぞけるが
「見せたくない」という意思を尊重する
よう指導している」という箇所があっ
たからです。

総務庁統計局の皆さん、もし、国民

一人一人に、気持ち良く調査に協力し
てもらおうと思うのでしたら、もう、
調査員はやめて、「配布、回収員」に
改めたらどうでしょう。覗けるような
もの作るな！

何が、意思を尊重するように、です
か。そんな指導をするくらいなら、の

りしる分を出して、封筒になる「記入
のしかた」を作って下さい。

娘は中学に通っていますが、クラス
名簿と言えるものは、電話による連絡
網だけです。これくらい学校は気を使
っているのです。

プライバシーは、教えてもいいと思
う相手に自分から教えるものです。調
査である以上は漏れない保証をすべき
です。それはこの場合、近所の調査員
の目に決して触れさせないことではな
いでしょうか。調査票には、問い合わせ
のための電話番号を記すようになって
います。ですから、確認作業はすべ
て市区町村職員が行えばよいのです。
大変ですが、五年に一度のことです。
がんばりましょう。

各々が封筒にいれて、べったり糊付
けをして渡す。これなら不安に思う人
も減り、近所の人で嫌と思った人も、
笑顔で渡せるのではないでしょう。か。
ご苦労様の一言を添えて。

ロスで思わぬ ハプニング

神奈川県大和市 浅田 節子（68歳）

ロサンゼルス空港を日本に向かって
いよいよ離陸である——が——いつも
と何か違う変だ！ 地上を走っては止
まる回数が多く、そのうちストップし
たまま三十分以上も動かない。

今まで感じたことのないイヤーなも
のが全身に伝わる。私の両隣の席には、
日本に連れて行く孫娘（九歳と六歳）
の二人がいて、飛行機に乗るのは物心
ついて初めてなので興奮状態なのだ。
機内放送でもすばいいいのと思っ
たトタン、英語で何やらアナウンスし
ている。「エンジンントラブル」のとし
ろはよく分かるが、その他はさっぱり
分からない。

こうなったら、ロスで現地の小学校
に通っている九歳の孫娘が頼りであ
る。

孫に聞くと「エンジンに異常が発見
され、至急新しいエンジンと取りかえ
るので、しばらくお待ち下さい」と説
明していることを教えてくれた。かな
り待った後にまたアナウンスされ、
「エンジン交換は時間がかかるので、
他の飛行機に乗り変えていただきます
す」とのこと。

機内が急に騒がしくなり荷物を持っ
て出口に向かう人、立ったり腰かけた
りする人さまざまである。二人の孫に
リュックを背負わせた。

でもドアの開く気配はなく、機内は
妙な雰囲気包まれた。その後のアナ
ウンスでまた機内は騒がしくなった。
「都合によりご出発を一日延ばし、今
夜はホテルに一日泊していただくこと
になりました。ホテルは分散して……」
と、長い説明で孫娘は一生懸命通訳を
してくれた（日本語では後で短く放送
された）。

私は生まれて初めての体験である。
二人の孫娘は「おばあちゃん、どこに
連れて行かれるの、日本に行けないの」

とこわばった表情である。

やっと機外に出て、スチュワーデス
の誘導で、特別受付に向かうが、それ
にしてもロス空港の広さにはオドロイ
タ。

長い列の後に立ち、受付で英語が通
じるのか？ 不安だらけ……でも孫が
いるから助けてもらおう——と心を落
ち着けた。

受付で孫の通訳を聞いて、マゴマゴ
している私たちを見ていたロスのスチ
ュワーデスが、すばやい行動で一人の
案内役をつけてくれた。その時は涙が
出るほど嬉しかった。

案内人はロットさんという女性、そ
れは親切でホテルに向かうバス乗り場
まで、孫に話しかけながら、広い空港
内の階段を上ったり降りたりかなり歩
いて、また階段を上ったり、ようやく
バス乗り場にたどり着くことができ
た。

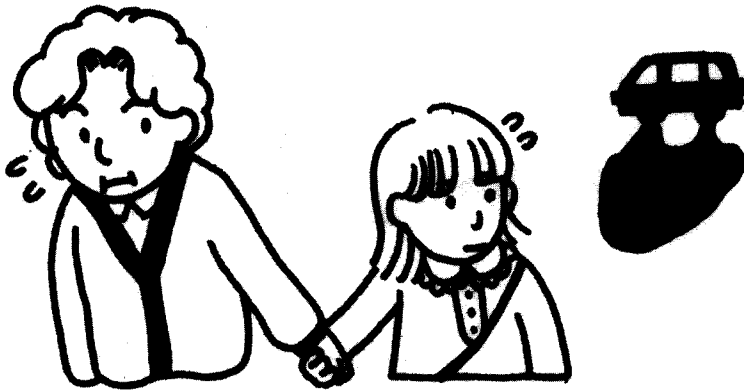
しかし、急な出来事で四百人以上の
人がまごつき、どのバスに乗ってよい
のか分からない。

ロットさんが急にケワシイ顔になり九歳の孫に何かを語りかけた後、走ってどこかへ行ってしまった。

孫が真剣な顔で「おばあちゃん、ロットさんが、バスのことやホテルのこと聞きに行ったけど、この場所を絶対に動いちゃダメ！ バッグはしっかりと持っている事。グリーン色の車（ワゴン車）が来ても絶対に乗らない事。と言っていたよ」と通訳してくれた。

ロットさんが走り去った後、まもなくグリーン色の車がさつと近づきドアが開いた。すると孫が「アッ！」といって「おばあちゃん絶対に乗っちゃダメよ」と私の手をギュッとつかんだ。私はこわくなり、その車に背を向け二人の孫の手をしっかりとにぎりしめていた。もしも強引に乗せられたらどうしよう……と胸がドキドキしていた。

日本人旅行者は大金を持っているのを知っていて、このような異常事態には、とくに狙われるそうだ。身を固くしていると、ロットさんが向こうから走ってくるのが見えてホッ！ とし



た。

日本語が分からないロットさんは、行動で表現しながら私の背中を押し、孫たちには英語で話しながらバスに乗せてくれた。

不運な人は、ロス空港から遠くて小さなホテルらしいが、私たちはラッキーだった。近い上に、すばらしいホテルで一泊である。

まず息子夫婦の部屋も獲得しようと思ひ、ロットさんに孫から説明してもらった。

さまざまなことがあって、やっとホテルの部屋で一息ついたが、速く息子夫婦にこの異常事態を知らせたくてウズウズしていた。

しかし息子夫婦は、久しぶりで二人になったので、食事は外で取り夜おそく帰るといつていたのである。

どうしよう——早く知らせたいと心はあせるばかり。祈るしかないと必死で祈った。

すると不思議が起こって、あることから息子たちは早く帰宅することにな

り、夕方五時には電話が通じたのである。

急を知った息子夫婦はホテルに駆けつけてくれた。ロットさんは何度も息子の家に電話をかけ、いたれり尽くせりであった。ロットさんの役目はやっと終わった。まるで天使のような女性であった。

息子が「お母さん、エンジンのトラブルが離陸直前に発見できてよかったよ、もし空の上で発生していたらオソロシイ事になっていたよ」といった時、生きていた自分と、二人の孫の命のことを思い全身がゾツとした。その後、急に力が抜けてベッドで横になった。

息子は明日の出発の予定のことや、私のスーツケースのことで走り回っていた。すると、何と私のスーツケースは、ミネソタに行っているのが分かった。混乱している荷物受付で、日本語と英語の話せる人は手伝って下さいと、ロス空港でたのまれた息子は夜おそくホテルに戻ってきた。

さて……一夜明けて分かったこと

は、私たちはまず「シアトル」に向かうことであった。

九歳の孫娘が英語を話せるといっても、シアトルで成田行きの手ケットの手続き等とても出来ないと思った息子は、シアトルに行く若いカップルだと頼むのに安心だと言って、カップルを探すのに苦労していた。運よくやさしそうな二人の外国人が見つかった。

ロスから、シアトルに二時間位で着き、その空港で若いカップルは、ここやかに私たちの成田行きの手続きをすませて去った。ただ感激……胸一杯で、異国の人の情けに涙した。

やがて成田行きの飛行機（ノースウエスト）に乗りこんだ。その時のエンジンの音はとても心地よかった。

二人の孫も「やつと日本に行けるね」と笑顔になり、前日の緊張は吹き飛んでいた。

今年の夏の予期せぬホテル一泊は、美しいロスの夜景と共に、私の心に一生残るドラマとなった。

（え・イシノフミ）

★わいふバックナンバー

- 263号 わが家の親子ゲンカ
- 264号 ふるさとの伝統行事
- 265号 私の初体験
- 269号 再婚と事件 得られた事件
- 272号 カウンセリング体験
- 273号 子どもとテレビ
- 274号 引っ越し騒動
- 275号 料理と私
- 277号 不妊治療・私の場合
- 278号 「おけいこ」との格闘
- 279号 あなたの夫は何番目の男？
- 281号 思いつきの地・再訪
- 283号 私の読書歴
- 285号 美容と私
- 286号 私の健康法

自力にあった高校までの法定版 私立高校ガイド
ハイスクールレポート（関東版）

2001年度版

二〇〇〇円十税

シリーズ老後の暮らし

お年寄りが安全に暮らすために

一五〇〇円

変わる主婦・変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは02-2360-4777

嫌疑

野村治子

結婚

最初に出会ったのは、卒業した年の夏だった。まわりの山が緑に包まれていた。

治子は、新任教員になって初めて市の集会に出ていった。ほんやりまわりを見ていたが、急にあつと声を出しそうになって口を押さえた。見つめた先にいるその男は、顔立ちと雰囲気、学生時代に実らなかった思い出の相手にそっくりだった。

その人、工藤務は三月まで、中国山脈沿いの岡山県北にあるこの佐川市から、十キロほど離れたやまあい

の村で教員をしていた。

務はもともと大阪で会社勤めをしていたが、実家の近くに住む中学校長が、学校勤めをさせないかと父親にもちかけてきた。それが務を田舎に帰らせるきっかけになった。

戦争が終わって未だ数年しかたっていないところで、学制が変わり、新制中学の教員が不足していた。長男を家に帰らせたい父親の耕平は、喜んだ。

とりあえず務が帰ってきた。務は、また大阪へ行くつもりだったが、意外に先生商売が気に入った。

翌年の四月、務は佐川市に転勤になった。夏近くにあって開かれた集会で、治子が務を見たというわけだ。

卒業したばかりの治子は若くて新鮮だった。友人を通して、ふたりは親しくなった。

「映画に行きませんか」

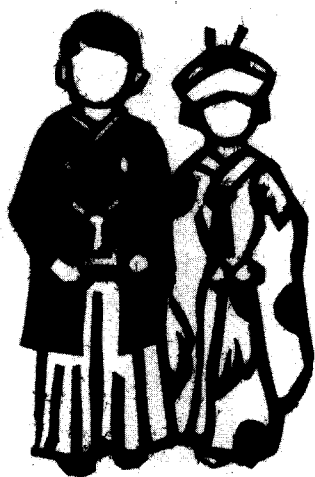
日曜ごとに、なんだかだと理由をつけては会っているうちに、親密さが増す。

すでに三十歳近い務は、結婚を急いだ。

お互いになんでも話しておかなければいけない。

務は、酒が好きなので土曜日だけ飲ませてほしいと言う。そのぐらいのことは当然だと思って聞いたが、これは違っていた。翌年の春結婚して、半年のちには毎晩飲み出した。約束が違うと言ってみたが、きょうだけごめん、きょうだけだといってやめない。

もうひとつ、約束違反があった。これは大きかった。



「僕には弟がいるので、親との同居は有り得ない」
一人になる母の柳を気づかう治子に、あのとき言った言葉だ。

治子には大阪に兄がいるが、すでに結婚して単身赴任している。兄が中学生のとき一家は戦災にあつて、この田舎に来た。

学生時代に亡くなった父が出征中のことだ。

兄は母の柳に同居しようというが、兄の妻がいい顔をしない。柳もいやがる。

治子には、両親と同居しないと切り切る務の言葉がうれしかった。

知り合った次の年の春休み、珍しくドカ雪の降り積もった三月三十一日。工藤家の薬家の奥の間で二人は

結婚式を挙げた。

結婚して一年のちに周りの事情が変わった。弟の範雄が入ったばかりの高校から退学を言い渡された。校則違反をしたらしい。義務教育とちがって高校ではバツサリときりすてるのだろう。

ことの意外さにショックをうけたのか、範雄は睡眠薬自殺をはかったが、発見がはやく未遂だった。

務が高校に出向き、充分に監督しますからと懇願したが、にべもなかった。

結局、次妹の厚代が、結婚後住んでいる東京に出して就職させた。

「おまえらが、ここで暮らさんから、こんなことが起きるんだ。おまえら、わかっとるのか」と務の叔父がいう。

弟の範雄はこの事件の少し前に、勉強部屋にしている納屋の二階から火事を出している。電気スタンドに百ワットの電球を灯したまま、外に遊びに出た。それが敷きっぱなしの万年床の蚊帳に倒れかかって燃え上がった。治子の、開いていない嫁入り道具を置いたまま、納屋は全焼した。

このままでは、体裁がわるいと務の母のトメがいうが金持っていない。務が家を建て直すことになり、治子は、出産費用をそれに当てた。

筋向かいで、八百屋をしているつるが、治子を見か

けてやつてきた。トメが親しくしている婆さんだ。

「あんたらあ、なんで親と一緒に暮らさんのならな。どこの家でも、みな親の面倒をみている。自分らだけ、ええ目をしようとおもうてもちがうで」

トメが言わせている言葉だ。

柳は治子に、もう離婚して帰ってくるようにとしつくく繰り返した。

「あなたは、そんな決断力のない娘だったの」

柳は迫るが、肝心の治子が行動しない。

母の言いなりにはなれないものがあつた。女あまりの時代がまだ続いていた。出戻り女は一人前には見られなかった。すでに妊娠していた治子は、自分の考えが足りなかつたと反省する弱さしか持っていなかった。

ある日のこと、隣家の製紙会社の事務室から、手提げ金庫が盗まれる事件が起こった。警察がきて捜索が始まった。

近所の野次馬も加わる。空の金庫は、近くの桑畑からみつかった。第一発見者は義父の耕平だった。発見時の様子を尋ねられるのは当然だったが、無責任な人の口は閉ざせず、疑いの目を向ける人さえある。

あれやこれやで、義母のトメは務と治子に同居を迫る。もともと農家だが、年をとって体力がおとろえるにつれ、労働もむずかしくなってくる。

「若い者が一緒に居らんから、こんなに人に馬鹿にさ

れるのよ」

治子は結婚のとき、母の柳の面倒がみられるという漠然とした期待をもっていた。だが現実には務の家での、務の親との同居の方に向かつていた。

収入のない親の窮状に、務はついに同居をきめた。

「なんにも言わない親だからね」

務の言葉にさからえる治子ではなかった。

信義

通夜は深夜に及ぶ。後は、親族だけで行うものだが、千代子夫婦が、客を帰らせない。

二人はごそごそひそひそ話しかけながら、近隣の人や、遠くからの親戚に、熱い酒の入った銚子を持ち、盃に差して回る。

務と治子が、もつともおそれたのは、息子の健への影響だった。長女の香はすでに結婚して夫もある。もともと芯の強い子だ。

しかし健は神経質で、線の細い子だった。身近なトメの、このような死に方にどんなショックを受けることだろうか。三十を過ぎての、結婚への影響も大きい。丁度、務の元の同僚の世話で見合いをすませたばかりだった。

ダメージの深さを思うと、今はとにかく事実をかくしておくしかない。

とりあえず、務のきょうだい以外の誰にも洩らさないことを、かたくとりきめた。

「そりゃあ、そうせにゃあいけん。当然のことだ」

と山辺も、大きくうなずいた。

務も治子も、この約束を信じた。

山中医師の言葉どおり脳溢血で急死として、近所へ手伝いを頼んだ。町内の世話役をしている隣家は、退職前は山辺と同職で親しい。

「それでも、あそこだけは、ほんまのことを言わにゃあいけん」

治子は、おどろいた。

「どうして？」

千代子に尻をせつつかれていた山辺は、したり顔で言う。

「そりゃあ、ほんまのことを言わにゃあおかしいわ。

わしが言うてくるけん」

山辺の言っていることがよく分からない。動転している務も、あいまいに、言われるままふんふんと答えているのを、治子が口をはさむ訳にはいかな。

「そしたら、わしゃあ、ついでに市役所に届に行きますけん」

山辺は、三時間ほどして帰ってきた。

「長いことかかったでえ」

死亡届にそんなに時間がかかるはずはない、と治子
はふと考えていた。

ようやく、通夜の客がひきあげた。疲れ果てた務は、
台所の炬燵に足をつっこんで眠っていた。

治子は食卓に手をついて、座っていた。千代子の息
子がそばに来て座る。別に、親しくつきあっていたの
ではないが、岡山で妻の親と住んでいると聞いている。

「おばさん、僕は警察勤めですから、忌引きによる欠
勤と、その状態、理由など、はつきり届けてきました。
秘密にしたいそうですが、隠す訳にはいきませんから」
警察官という職業は、やはり厳格を極めるものなの
だ。欠勤届は祖母死亡だけでは不備で、その病名も届
ける必要があるのだと、治子はこのとき知った。

「うちの両親は、このことで伯父さんと、伯母さんが、
多分離婚するだろうと言っています」

これは千代子の願望であつたろう。務が治子を責め
て、家庭を破滅させることがトメへの鎮魂のあかしで
あるとして。

しかし務と治子は堅く身を寄せ合つて、この不測の
事態を必死でくぐり抜けようとしていた。

千代子は夫の山辺にトメの死因を公表させようとし
ていた。

「お父ちゃん、あのことを言わにやあいけん」

葬儀の終わり、親族代表で会葬者へ挨拶するとき、
山辺は途中でつかえてしまった。

「イヒッヒッヒッヒ」

照れ笑いしながら胸ポケットをさぐつて、下書きを
取り出した。ばさばさとひろげながら、間をもたせる
ように、イヒッヒッヒッヒと笑う。まわりから、か
すかな笑いが起こった。

葬儀の前日、弔問にきた人に千代子はわざわざトメ
の遺骸の襟をはだけて、紫色に朽ちた首のひも痕を見
せた。客は顔色を変えた。

そのあとで、必ず治子に言う。

「お嬢さん、ごめんなあ。私がちよつと横を向いた隙
に、あの人、勝手に襟をめくつて見てしまうたんじゃ
わあ」

他人の誰が遺体をつつこうとするだろうか。おかし
いと思ひながらも、この混乱のさなかで、問いただし
ている余裕はない。

家に手伝いに来てくれている隣り組の人から、勝手
が分からないまま、あちらに呼ばれ、こちらに尋ねら
れて、走り回っている治子だ。終には「葬儀屋が見
たのよ」と言い出した。

たとえ治子が詰問したところで、千代子は屁とも思

わず取り繕って、切り返しただろう。

後で山辺が話したことだが、このとき山辺は次妹である厚代の夫と、義弟の範雄に、挨拶の場で、はっきりこの事実を言うつもりだが、と相談したという。

「こんなことは、世間に公表せにやあ、いけんで」

「しかし、そりやあどうかなあ」

厚代の夫は賛成しない。

「兄貴がなにか考えがあつて、言うなと言ってるんだから」

範雄も消極的だ。千代子は山辺をせきたてる。

「はよう、下書きをしんさい。絶対にそのことを、挨拶の中に入れてやあいけんで、なにを人に相談することがあるんならな。ばあつと言うちやらにやあ」

山辺が、会葬御礼の挨拶のとき、つまったのはそれだった。さすがに山辺は、務の前でそこが読めなかった。挨拶のまえに、千代子は、そばの会葬者がおどろくようなかん高い声で、治子を呼びつけた。



「おっねえさんっ」

前列に来て並べと言う。治子はうしろの方にいたが、千代子のきつい命令に従うように、おずおずと前に出て行った。

そら言うぞつ、そろもう読むぞつ、と待っていた千代子は、ちらちらと治子の方を見ている。治子が卒倒でもするかも知れないと期待したのだろうか。横目で治子を見ている。

治子もなんとなく、千代子の方を見た。

山辺はついに、とばしてしまった。

「どうしたん、お父ちゃん、あんた、なんで読まなんだん、肝心なところを、なんでとばしたんっ」

そのときの千代子の顔を、治子は覚えていた。赤黒い血管を浮き出させて、体調がわるいのかと思つたが、あれは怒りで引きつっていたのだ。

この人たちにとって、公表とはいったい何を指すのだろうか。

きちんと医師の診断を受け、警察の調べも受けた。

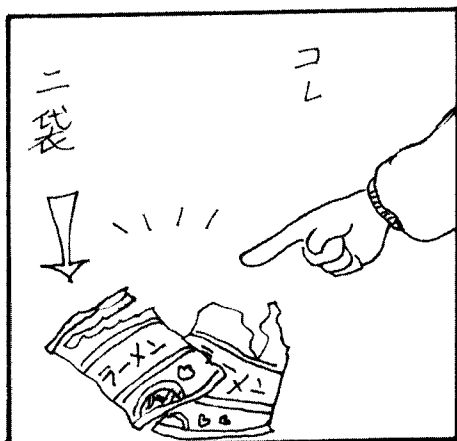
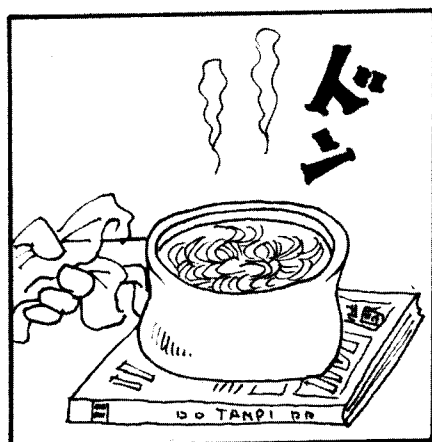
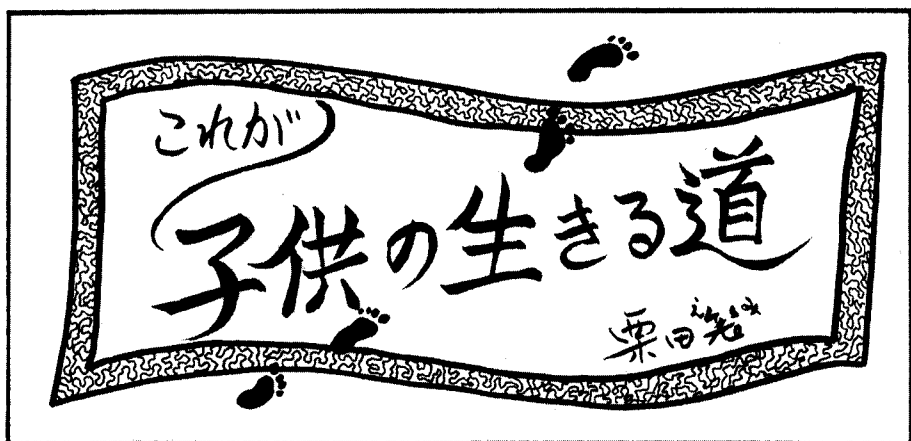
これ以上、何を公表というのだろうか。

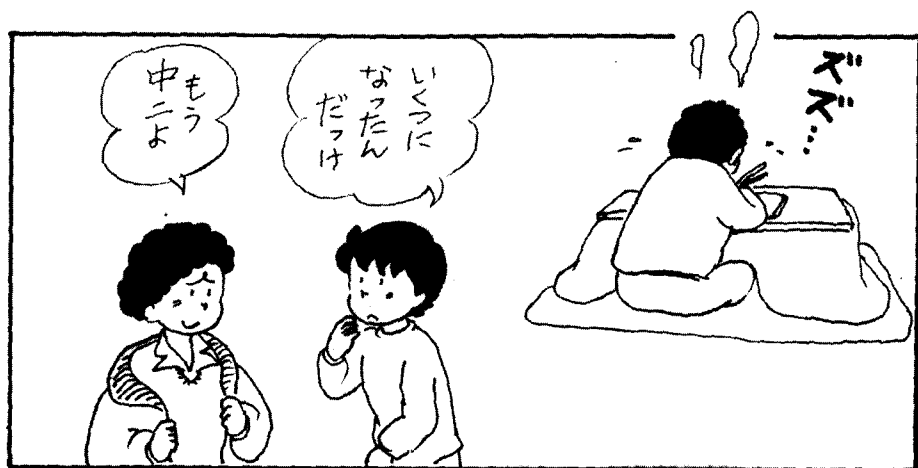
「うちの年寄りはこのんな死に方をしましたよ」

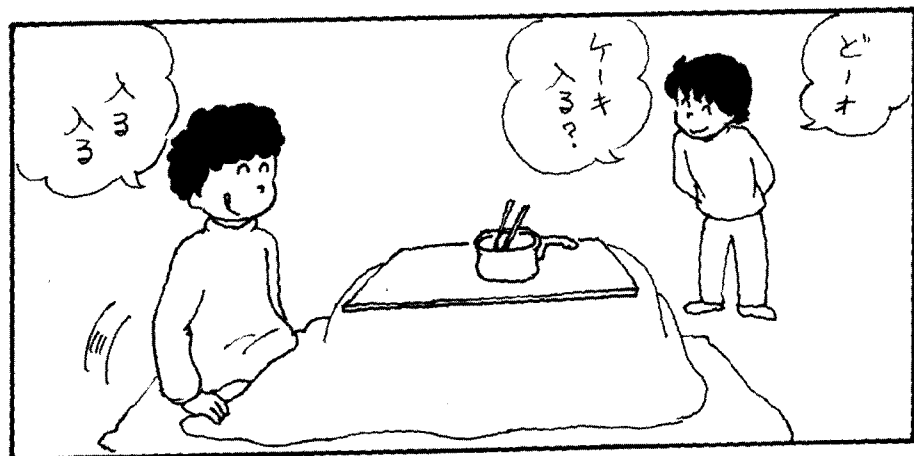
と、太鼓を叩きながら声高に世間にふれて回ることを公表というのだろうか。

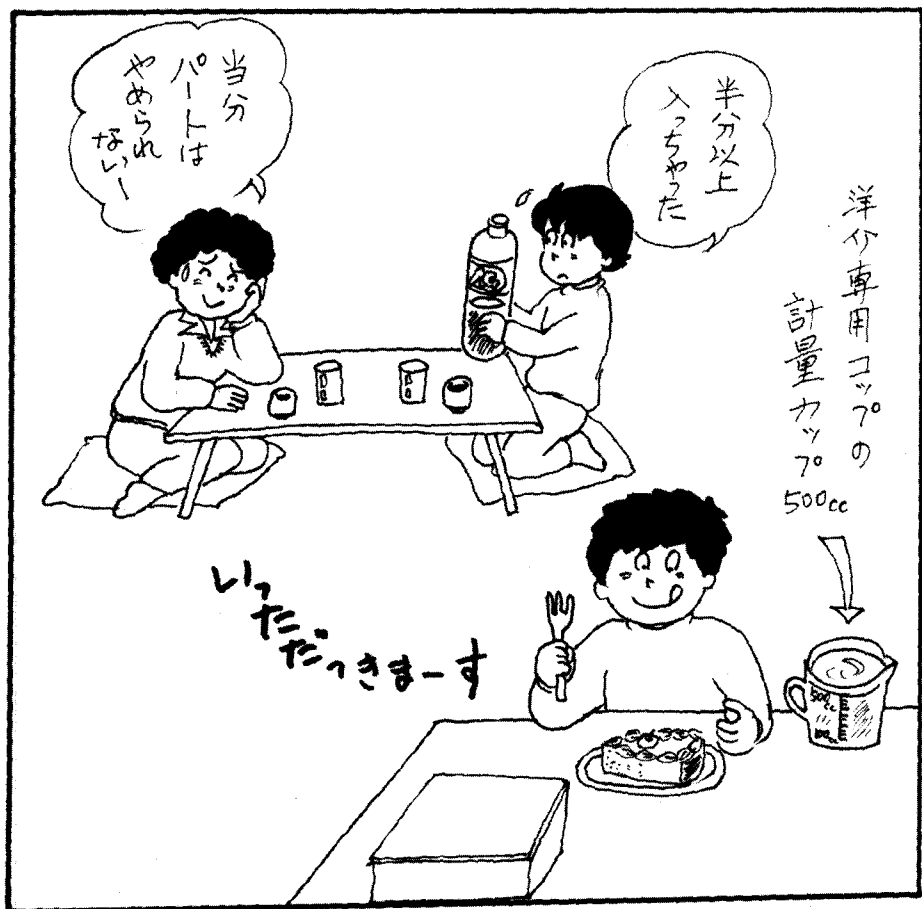
何故そんなことをする必要があるのだろうか。(続く)

(え・小林正子)









子育てフォーラム



ごはんつぶ生活

横浜市港南区

矢島紗恵

掃除機をかけている。ガーガー。

家具にぶつかる音もする。バキバキ。掃除は下手なんだ。それになぜかイライラしている。パチパチパチ、何か吸い込んだ。

あーまだだ。いつものごはんつぶ。スクールバスの窓越しに娘に手をふり、母親仲間とおしゃべり。

「ごはんつぶついてるわよ」。また言われてしまった。気をつけているはず

なのに、右肩に一粒ついてた。あわててたった一粒を強くはたき落とす。またイライラ。

そういえば十数年前、毎朝カツカツとヒールの音を響かせて、都心へ出勤していた私。その場面だけを思い出し、でも、今の私とは別の人間のようなのだ。

子供二人産んでも、数年で戻ると決めていた元の生活だったが、下の子供が八歳になるというのに、私はごはんつぶを右肩につけている。そうだ、八年前第二子を出産してから、私はぬけ出せない生活にはまってしまったのだ。上の子は九か月で歩いたのに、下の子は八歳の今も歩かない。上の子は一歳の誕生日にはたどどしく歌も歌

っていたのに、下の子は八歳の今も言葉を持たない。

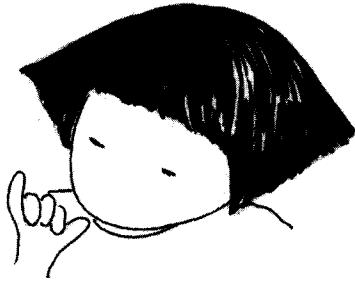
上の子とのお出かけはいつもトイレを確認してからだったのに、下の子は今でも他人の目にふれず横にねかせることのできる場所探しをする。オムツ交換のために。

どんな手がからなくなる上の子との生活。下の子は作業療法、運動療法、言語療法という訓練に連れて行ったり、病院でも六科それぞれ通院するというおまけが増えた。

カゼで寝込むこともない上の子と違って、毎月決まって体調を崩す下の子。そればかりか入院や手術をくり返す。

家族と同じものを食べると下の子

は、むせることが多い。食べ方も下手だ。いくらおしほりやティッシュを用意していても、よごしてしまう。口の中に食べ物が残りやすく、よだれとともに出てくることが多い。食後車イスへかかえて移す時、私の右肩に彼女の顔がくるのでよくついてしまうのだ。いつもは右肩にタオルをかけてからかかえるのだが、朝は時間に追われてタオルを忘れる。



オムツ交換にトイレトレーニング、口腔ケアに目のケア、リハビリにマッサージ、水分補給、着換え、装具の装着、学校の用意 etc、全て彼女のためにすることが分きざみにある。

予想もしていなかった重度重複障害児との生活。特長ある子育てを経験しながら出会う人々、感じること等、我が子が障害児であることを私自身が受容し、納得し始めた頃からイライラがはじまったのだ。

何ができなくてもかわいくてしかたがない下の子。手のかかる妹のことや、いつも妹の用で留守がちの母を認めてくれる上の子。みんな違ってみんなそれぞれそれぞれいい。

しかし、ところで私はどうなのか。必死で過ごしてきたこの数年間、これからの私もそれでいいのか。以前心にいだいていた生活とは遠のいたが、遠のいてばかりもいられない。

「私」を築きたい。条件の悪い求職を始めた。どんどんことわられるが気にせず続けた。

やっと短期間ではあったが、アルバイトを見つけた時はうれしくて涙が出た。チャンス。

私がどこまでできるのか、思いきりためせる。その数日間にはごはんつぶにイライラすることもなく、仕事に没頭した。すごい刺激を浴びる程受けた。全て夢のようだ。仕事ができるのって素晴らしい。充実感に満たされてアルバイトを終え帰宅する。また現実にもどってきた私。さっそく夕食を食べさせる。

ごはんつぶとの生活。

しかし、この数日間で私は何かを得ていた。以前の私のままでは身につけることのできなかつた何かを。この八年がなければ、感じることさえなかつただろう何かをしつかり感じていた。社会からの疎外感に、イライラしていた私は小さくなり、私にも社会の中でできることはきつとある。私だからできることを絶対見つけてみせると決意した。

お米一粒にいくつの神様がいるんだ

ったかな？ 今日も右肩にごはんつ
ぶ。二本の指でつまんですてた。自信
を持っていきましよう。上の子も下の
子も大事に大事に育てましよう。しっ
かりごはんつぶの生活も続けましよう。

二番目の子ども がやってきた

神奈川県横浜市 杉田みほ

六月、母がこの世を去りました。孫
である野歩は三歳一か月、藍は一歳五
か月のことでした。

土曜の朝から火曜の昼過ぎまでな
ら、誰かが子どもを見れるから、と二
人を夫の実家に託して、高山市内に入
院していた母のもとへ、私一人で出か
けてきたところでした。三日間も離れ
たのは初めてでしたが、二人とも大人
を困らせることなく、機嫌よく待つて
いてくれました。

火曜の朝、「もう帰るんでしょ」と

私を起こし、妊娠中の私に「体を大事
にね」。母はいつものように私の心配
ばかり。「また近いうちに来るから」。
「無理しないで」と言い返されそうな
のをさへぎって「無理はしないから大
丈夫。来られるときに来るからね」と
言うのと、微笑んだ母。「じゃあまたね」
と別れてきたのに、水曜日の朝父から
の電話。「終わっちゃった。五時五十
五分」。

ちょうど夫を送り出した頃だ。不思
議とすつきり目が覚めて、いつもなら
眠っている野歩も起きていて、一緒に
「行つてらっしゃい」と。そんな私た
ちの様子を確かめて、安心してあの世
へ旅立ったのだろうか。「泣かないで
よ」と言う野歩を抱きしめて「ばあば
と、もうお話できなくなっちゃったん
だ。ごめんね、少し泣かせて」。

目を潤ませながら、野歩と藍と電車
で横浜の自分たちの住居に戻りまし
た。ようやく連絡のとれた夫が帰って
くるまで、葬儀の手配であちこちに電
話しながら着替えや知人の連絡先の用

意、子どもの横であわただしく動くう
ちに、気持ちが張ってきました。父は
高山にいるし、一人っ子の自分がしっ
かりしなければならぬんだ。

子どもたちは夫に任せ、ひとり、東
京の実家で母を待ちました。叔母夫婦
の車で父と母が帰って来ると、子ども
たちも会いに連れて来てもらいまし
た。藍には無理でも、野歩にはいくら
かでも理解してほしい。いつもかわい
がってくれて、五月には山の見える病
室で「元気でね」としつかり手を握っ
たばあば、「死んじゃったんだって」
の一言で突然消してしまえるものでは
ないでしょう。

母は触れてみるまで温かくないとは思
えず、まさに眠っているようでした。
「ばあば、ねんねしてるね」とそばに
連れていくと、枕元でじっと見つめた
後、野歩が口を開きました。「どうし
てお鼻から白いのが出てるの？」「鼻
水が出てきちゃうから、綿を詰めても
らったんだよ」と答えると満足したよ
うに、そつとばあばのそばから離れて

きました。

いつだってしきりに話しかけ、病院でもベッドに上がり込んだりしていた野歩が、今日はばあばに触ろうともせず、少しの間静かに見ていただけ。周りの状況からいつもと違うと感じたのか、もつと直感的に「死」をとらえたのか……。

翌日もばあばは同じように目を閉じたまま、その次の日には箱の中に寝かされるのを見届けました。ひいおばあちゃんが泣き崩れる様子も目にし、じいちゃんがいつものように遊んでくれないことにも気づきました。でも、野歩は何も尋ねません。ひと月ほどたつて「どうして？」を連発していた時期にも、ばあばが動かなくなつたことについて聞くことはありませんでした。

むしろ、大好きな人たちがたくさん集まっていたことのほうが印象に残っているらしく、「みんなでごはん食べたのはいつだったけ？」と、思い出しては尋ねました。

目の前に肉体があっても、そこには

あばはいないのだと、野歩にはわかつたのかもしれない。

生きていない身体には無関心に見えた野歩が、毎日のように話しています。「ばあば、お空の上から見てるかな？野歩が藍ちゃんと遊んでるかな、ちゃんとごはん食べてるかな、つて」



「どうやってお空の上に行つたの？電車かな、歩いて行つたのかな？」

遺された母の手帳には、野歩の三歳の誕生日がしっかりと記されています。毎日私たちのことを祈っていてくれたことが読みとれ、胸が熱くなりました。三年前、野歩の誕生に立ち会い、夫に支えられての出産に、感動してくれた日が心によみがえります。

母が逝ってから二か月たつて実家に行つた折、冷凍庫にあつた玄米ご飯を温めて食べました。三十六年間、私は母に与えてもらつたばかり。ほんの少し返すことができたのは最後のたつた二日半、付き添つていた間だけ。その母の作つたものを口にするのも、これが最後でしょう。藍と「おいしいね」「いい！」と言いながら、そしてお腹の中にいる三番目の子の、血となり肉となるようにと祈りながら、大事に大事に噛みしめました。

今でも、私たちの周りには母からもらったものがいっぱい、それらがなかったら毎日の生活はまったく違う色

合いになってしまおうでしょう。子どもたちの大好きなタオル、皮膚のトラブルに心強いビワの葉エキス、野歩に繰り返し読んでくれた絵本……あちらこちらに、母の笑顔が見えます。いつでも見守ってくれていることを感じます。

それでもスツと手を貸してくれることはもうなくて、来年にはもう一人子どもがやってくる、いよいよ子育て本番です。いろいろな人の助けを借りながらも、しっかりと自立しなくちゃいけないんだと、ようやく目が覚めたところ。

葬儀の後のお礼や、わずかばかりの自分の仕事もいつもなら夜中にこなせる程度なのに、妊娠中は頑張り過ぎかなくてはかどらず、この夏は子どもにいらいらをぶつけてばかり。「大変ね。でもまだまだ序の口、三人目が生まれたときの練習だと思って」と母の声が聞こえてきそうです。

野歩と藍を見て「よく育てたねえ」と言ってくれた母を心配させないよう

に、「ばあばもお空の上で笑ってるね」と野歩に言ってもらえるように、もう少し育児を楽しむ余裕をもってやっていかなくっちゃ！

親は子供に何を期待するのか

東京都日野市 十河 温子（47歳）

私が好きだった漫画・ガンダムの人公アムロが、母の制止を振り切って闘いに行くシーンで、母が悲壮な声でこう叫ぶ、

「どうしても行くのかい！ 母さんはおまえをそんな風に育てた覚えはないよ！」

現実世界の私たち母親もそう叫びたいときがある。

ではいったい親は子供に何を期待し、どんな風に裏切られるのだろうか。明るく元気でおまけに素直、いろいろな友達と仲良く遊び、そして何事にも一所懸命で、スポーツができて勉学に

も励む。何かやらせれば芽がでるかもしれないと、いろいろなお稽古ごととさせる。そしてもう少し頑張ればもつとできるのにと、親自身ができなかったことを子供に要求する。

それがいつの間にか口数が少なくなり、テレビやゲームに興じるようになり、帰宅は遅く夕飯すら家で食べなくなる。将来何になりたいのか、どんな仕事に就きたいのかの目標もなく、ただダラダラと時を過ごす。親はこんなに真面目に働いているというのに、子供は遊び呆けるばかり。私たちのような両親からどうしてこんな子ができるのだろうか、いったい自分たちの何がいけなかったのだろうか、自問の日々が続く、といった具合だろうか。

しかしよく考えてみると、子供が育つ過程での影響力は、家庭環境よりも社会からの方が大きい。それは、関西弁で育てたわが子たちが三人とも見事に関東アクセントでしか話さないことが証明できる。

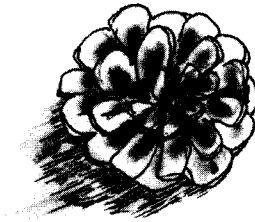
一世代さかのぼってみると、私の両

親は、真面目にこつこつ働き実直で、私たち姉妹を良妻賢母にするためあらゆる努力を惜しまなかったが、あにはからんや私は親の画一的・保守的な生き方に反抗し、その期待を裏切るとんでもない娘だった。なぜなら外で過ごす時間が増えるにつれ、家以外の世界から見聞きするものの方が、私を魅了したからだ。

だから私たちの子供たちも、親の思いとは別の次元で生きていても、それは当たり前だと認識しなくてはならない。親子の確執は、いつの時代にもありふれたことだから。ただ大きく違うのは社会のあり方が違うということだ。

ではいつたい、今の社会とはどんな社会であろうか。ひとことでは言えませんが、子供を食い物にした企業（ゲーム、携帯電話、PHS、目を覆うばかりの低俗なテレビ番組、自動販売機など）が成功し、物があふれ、人間の欲望をかき立て、すべての価値がお金で換算される社会。

そういう社会の中にどっぷりつかって子供たちは生きている。珍しく刺激的であり、見たり使ったりして楽しいような物を手に入れ、体験してみたいと思うのは、好奇心のある子なら当然のことだ。それは地道に生きている親の



価値観など、ダサイと感じても仕方のないくらい強烈なものだ。

そんな環境の中で子供を育てている私たちは、あれも駄目これも駄目と欲望を制止させるのに、多大のエネルギーを使わなくてはならない羽目に陥っ

ている。

せめて大人がお手本を示すことができればいいのだが、ここ数年は、社会的地位を得た人たちによる品性下劣な行ないや、公衆の面前で責任者一同涙ながらに頭を下げなくてはいけないほどの不祥事、あるいは自殺など、見るに耐えない事件ばかりがマスコミを賑わしている。これではとても明るい展望があるとは思えない。

私の息子たちも例外ではなく、時代に流され明確な目標を持ってないままだが、それはひょっとして、あったかもしれない子供の才能を見いだせなかった親の責任かもしれないと思っている。でも明るく元気に育ったのだから、私の息子にしては上出来としたい。

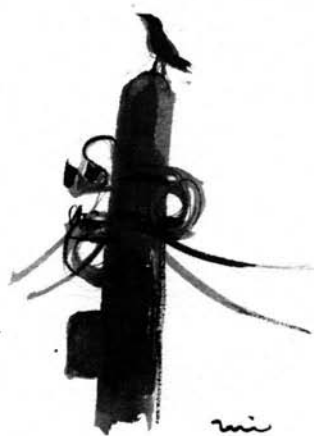
それよりも、子供が話す言葉やふとした表情に、ああこの子は人の気持ちに分かる子だなと感じるとき、それは長い人生で一番大切なことなんだと、それだけで満足しなければと思っている。

（え・田沼千恵）

生の束縛、死の安らぎ

——父が「蘇生」していた十五日間——

東京都世田谷区 山田恵子（49歳）



東北の地方都市に一人暮らしをしていた私の父（七十七歳）は、二〇〇〇年七月三十一日、ボーリングのゲームの最中、突然心臓が停止し、市内の県立病院で蘇生術を受けて息を吹き返したものの、意識は戻ることなく、二週間後の八月十四日に死亡した。

私が、倒れた翌日病院に駆けつけた時には、父はICUで幾つものチューブにつながれ、口には気管支まで延びる挿管チューブを固定されて、一切の生体反応もない状態でただひたすら呼吸していた。あまりに変わり果てた姿に私は呆然とした。父を生還させた主治医の説明によれば、父の心臓の止まっていた時間は救急車の到着まで五分、救急車が病院に着くまでの五分の合わせて十分以上で、病院で蘇生したということだった。一方、私の妹が直接、また私の夫が電話で、そ

の医師から受けた説明では、心臓の止まっていた時間はなぜか五分以上ということだった。

父の子供は私と妹の二人。母は前年五月に亡くなっていて、父は一年余りを一人暮らししていた。そんな父の面倒を見る意味もあって、今年五月には妹夫婦が埼玉からこの町に戻り、実家の近くに新しく自宅兼店舗の家を建てて暮らし始めていた。妹は喫茶店を始める準備に忙しく、父はその店の開店を心待ちにしていた。生活にも変化が生じ、寂しさも薄らぐだろうと期待していた矢先だった。

倒れて三日目の検査で、父の脳は呼吸停止の期間にダメージを受けていることがわかった。発熱もあった。私と妹を前に主治医は、「自発呼吸が停止した場合人工呼吸器を再度つける、挿管チューブは二週間を限

度で使用不可能となるので気管支切開をする」という治療方針を述べた。私と妹が、「気管支切開はしない、挿管チューブも抜いてほしい」旨の意向を述べると、医師は態度を一変させた。チューブを抜くと舌根沈下（舌根が気道を塞いでしまうこと）が起こる恐れがあり、また痰もからんで窒息する可能性もあるという。私はチューブを抜いたとたん父が窒息死するかもしれない、と怯えた。

ところが妹は「それでもいいです」と言った。妹はこの一月まで老人病院で看護婦をしていたので末期医療の現場には通じている。挿管チューブを抜いたとしても直ちに窒息する恐れのないことは体験的に知っていたという。妹は「父にこれ以上痛い思いをさせたくありません」と言ったが、医師は「意識はありません」と冷たく返す。私は「今夜、夫が来るので、それを待って最終的な意向を出したいと思います」と告げてその場を辞した。

私は決断を下すのが恐ろしかった。これは父を死に追いやろうとしているのだろうか。私はこんな時いつも泣きついて教えを請う、キリスト教の牧師先生に電話した。先生は「第三者の立場でしかないが」と前置きして、生とは機械につながれて生きていることではなく、人格を持った人間として生きている状態を指すべきであること、現代医学の延命治療のあり方には疑

問を持つていることなど、真剣に優しく御自分の考えを述べられた。

私は一応の決心はしていたが、先生の言葉でその決意は確かなものとなった。

夫の意向も私達姉妹のものと同じだった。父はいわゆる植物状態になってしまった。肺炎も起こしている。死は時間の問題だった。そんな父になぜこれ以上の苦痛を与え、無意味な延命を図る必要があるのか。

私達三人は翌日、再度医師に面会し、挿管チューブを抜いてほしいこと、延命治療は一切しないことをお願いした。その結果、濃厚治療を必要としない父は一般病棟に移されることになった。

入院五日目、私が転室したばかりの一般病棟（個室）に行ってみると、そこで最初に目にしたものは顔中を歪め体全体を震わせている父の姿だった。私は思わず「これは何ですか!」と叫んだ。看護婦は「痙攣です」と答える。「痙攣って何ですか、初めて見ました」とさらに声を上ずらせて言うのと、困ったような顔で「ずっと起こってましたよ」という。

医師は痙攣の事実を私達には一切告げていなかった。外すといった挿管チューブも外されないままだった。私が質問するとようやく医師は脳のダメージによって起こると説明した。後から分かったことだが、痙攣は主に体に震動を受けたとき（体の向きを変えたとき）、

注射針を射されたとき、あるいは何の刺激のないときでも起こり、ひどい時は一時間以上も続いた。

父の主治医はうそつきで信頼できない人だった。彼は私達に二つのウソをついた。

入院六日目、妹が父の胸にカウンターショックの焼け跡を発見した。カウンターショックとはテレビの医療ドラマなどでおなじみの心臓に与える電気ショックで、その反動は患者の体が飛び跳ねるほど強烈で両手両足を押さえながら行われることもあるという。父は心臓マッサージではなくカウンターショックで蘇生したのだった！ 医師は何度も人工呼吸と心臓マッサージによって蘇生したと言った。騙し通せると思っていたのだろう。素人の私では気づかなかつたろう。看護婦だった妹だから気がついたのだ。許しがたいウソである。

父はたった一人で誰も守ってくれる人もなく、この恐ろしいカウンターショックを受けたのだ。ようやく巡り合った母と手をつないで三途の川を渡ろうとしていたのに。そしてその手を引き千切られて「生」という鎖につなぎとめられたのだ。

私達の不信任は爆発した。心臓の止まった患者に五分という数値は予後の明暗を分ける重い意味を持つという。七十七歳の父は、心臓が停止して五分後に救急車に乗せられ、その時点で心臓マッサージを受けたが

蘇生しなかった。救急隊員の「瞳孔が開いている！」という言葉もそばにいた人は耳にしている。そして心肺停止状態で十分以上後に病院に到着したのだ。このような患者にカウンターショックを施すことの結果を、二十八歳の若い医師は判断できなかったのか。そしてなぜ医師はそれをひた隠しにしたのか。

入院八日目、妹夫婦それに私達夫婦は医師に詰め寄った。妹が、

「先生、カウンターショックを行ったことの是非はにおいて、なぜそれを隠していたんですか！」と問い詰めると、医師は進退窮まっつて、「いろいろな蘇生術で蘇生したと言ったわけで、隠していたわけではありませんが、説明不足だった点はお詫びします」と謝った。

「七十七歳の、十分以上も死んでいた老人にカウンターショックを行って、その結果このような事態を招くということは、先生は予想されなかったんですか！」と私が更に詰め寄ると、

「どのような原因で心臓停止したか分からない患者に対しては、あらゆる手段を用いて蘇生させるのは医師の務めです」

と言った。そうだろうか。どのような原因にしろ、十分以上も死んでいた七十七歳の老人に対して、行われる蘇生術の結果は明らかである。うまくして植物状態、悪くすれば脳死。蘇生術は一体誰のために行われたの

だろうか。

かつて、病死した患者に対して心臓マッサージを施すことの是非が問われたことがある。昨今ではそれに代わってカウンターショックが施される。恐らくこれはこの病院に限らず、広く日本全体で行われている医療行為ではないだろうか。

妹が市内の別の病院に務める看護婦の友達に聞いたところでも、心臓停止で運ばれてきた患者に対しては、八十歳であろうが九十歳であろうが、カウンターショックは行われるということだった。

また挿管チューブについても、私が、「なぜ抜いてくれないんですか」と尋ねると、

「私が抜くと言ったのは人工呼吸器のことですよ」とぼけた。これが二つ目のウソである。けれども妹は、「いいえ、先生はあの時、挿管チューブを抜くとおっしゃいました。抜いたら舌根沈下が起こるとおっしゃったではないですか。なぜうそをつくんですか!」と医師の矛盾を突いた。

私達は怒り心頭だった。「とにかくチューブを抜いてください」

挿管チューブは生還した患者が気管支切開より苦しかったと訴えるほどの装置で、タバコのパイプ状のチューブとゴムチューブを束ねたものを口にくわえさせられて、バンソウコウで口元に固定される。相当な量

のチューブを口の中に固定されるので苦痛が大きい。その先端は気管支まで延び、バルーンと呼ばれる風船状の装置で喉の奥に固定される。父の体の向きは、床ずれ防止のために横になっているのだが、チューブの重みで横向きの顔の形が歪んでしまうのである。また常に口を半開きの状態なので口の粘膜が傷つき、汚れた口の中をふいてやることも出来なかった。

医師は「抜くことは出来ない」の一点ばりだった。

「今はそのようにお問い合わせされているが、後で伝え聞いた親戚の人が騒いで、殺人罪で訴えられる恐れもある」という。

「その代わり……」と、医師は代案を示した。「点滴の量を二千ccから五百ccに減らし、不整脈を押さえる



薬（強心剤）もはずします」

「そうしてください。母の時も点滴を減らしてもらいました。それから挿管チューブも外して下さい」と私はすかさずその両方を行うことを主張した。

私達の気迫に押されたのか、諦めた様子の医師は「それじゃ」と、看護婦に外す手配を命じた。が、看護婦が持ってきたものは、挿管チューブを外す針と、鼻から挿入する代替のチューブだった。

「これだったら苦痛も少なくなります」

と医師は鼻からのチューブを勧める。ようやく決心がついたと思つたのにまた代案である。私の心は揺れた。妹も一瞬戸惑った。私達の心の揺らぎを見透かしたかのように、医師はホッとした表情で、

「それじゃ、抜くのは明日にしましょう」といつて帰っていった。

医師が病室から出ていったとたん、妹は、「分らない！ おじいちゃん、教えて！」といつて泣き崩れた。私も泣いた。

結局私達は、チューブは一切つけないという結論に達した。けれども翌朝になつてみれば、医師はいつそうかたくなにチューブは抜けないと主張し、結局妥協策として鼻からのチューブをつけることで落ち着いた。

こんなチューブがあるのだったら医師は最初からそれを教えてくれるべきだった。父は口元を押さえてい

たバンソウコウも外され、ようやく口の動きが自由になり、時々「あゝ」と大きなあくびもした。口の中も清拭でき、看護婦にお願いして歯磨きもして貰った。あとはただ父の死を待つだけだった。私達が父のためにしてきたことはすべて、父の死を早めることだった。床ずれの出来ないうちに、顔が腫れ上がって紫色になる前に、死なせてやることだった。悲しすぎる選択だった。

それから一週間、高熱と痙攣と痰にあえぎながら父はひたすら呼吸を続けた。

一般病棟に移つてからは、家族は交代で二十四時間体制で付き添った。完全看護の病院であつたが、医師に対する不信任で父を一人にしておくことは出来なかつた。例えば、父は死ぬ三、四日前まで「血糖値を測る」目的で指先に針を刺されていた。痙攣を起こしている時はその針の刺激でいつそう痙攣がひどくなった。今死ぬ人に血糖値なんかどうでもいい！ 私達は血糖値の測定も止めてもらった。

一度看護婦と喧嘩したこともあつた。痙攣がひどくなつて少し前に痙攣止めを打ってもらつたが、いつそう悪化してベッドの上で飛び跳ねているような状態である。

「痙攣止めを打ってください」と言つたら看護婦は「これ以上打つと呼吸が止まってしまいます」と言つた。

私が興奮して「止まってもいいから打ってください」と言う、「そんな安楽死のようなことは出来ません。子供の熱性痙攣だつて同じです!」と返した。私は思わず「子供の痙攣とは違います!」と叫んだ。

子供には未来がある。父は老人だ。一旦安らかに死んでいたのだ。それを電気ショックで呼び戻して強制的に生に縛り付けているのは、あなた方ではないですか!

顔を拭く時、額の辺りをいくらこすつても父のまぶたは開かなかつたが、痙攣の時はいくら押さえても顔を歪めてまぶたを開き、そしてその目は死んでいた。

父の体温は三十七度台から三十九度台を上下し、解熱剤を注射すると大量の汗をかいた。そんな症状を見て医師は「これでも五百ccでいいのですか」と妹を責めた。妹は一時かなり気落ちしていたが、「分かりました、治るものならどのような治療でもお願いします」と答えると、医師はそれ以降何も言わなくなった。それから解熱剤を用いず、父の体には大量のアイスノンが巻きつけられた。

絡まった痰を引く頻度は一〜二時間毎だった。その痰も最後の頃は粘性が強まり、血が混じって取りにくくなり、引いてもらつてもすぐまたナースコールをすするということがよくあった。初めて見る血痰には驚いたが、恐ろしいものでだんだん感覚も麻痺してくる。

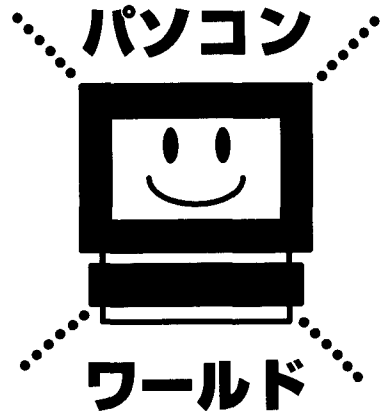
死ぬ前夜の泊まりは私だった。夜中の二時半過ぎ一旦血圧が六十まで下がって家族全員を呼び出したが、その後は再度九十まで上がって、二家族はそれぞれ明け方家に帰っていった。翌朝、妹が交代で来て父の脈を測っていたが、別れ際に「尿の出も悪いし、脈も弱くなっているから覚悟した方がいいよ」と言った。

その予告の通り、その日の午後一時四十二分、父はあつけなく息を引き取った。見守つたのは父の初孫である妹の娘、それにたまたま来ていた亡き母の弟夫婦だった。臨終の時、心電図が一直線になった父に、孫が「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼びかけると、父の心臓はピツ、ピツ、とかすかに反応したそうである。

私が息を切らして駆けつけた時、いつもナースステーションから聞こえる父の心電図のモニターのボン、ボン、ボン、という音が聞こえなかつたので、間に合わなかつたことを察した。そしてすぐに病室から妹の「おじいちゃん、ワッッ!」という泣き声が聞こえたので、すべてを了解した。あんなに臨終に立ち会うことを望んでいたのに、親不孝の私には適わなかつたのである。

今父は、八月の喧騒を離れ、なつかしい母の元で永遠に安らいでいる。

(え・佐藤瑞江子)



P 検を受けようかな

東京都世田谷区●後藤 晶

かなり前からワープロの調子が悪くなったが、無理して書いていた。十年近く使っていて機能も少ないので、この際パソコンに買い換えたいと思い、夫に相談したのが去年末。反対はしないが、あまり親身にもならない人なので、すでに使いこなしている友人に聞いた

り、雑誌などで予備知識を身につけた
りして、年が明けた。

機械好きではないが、オンチでもない私は、家電品なら一人で決める。が、パソコン導入となるとそれは、家庭の主義方針にもかかわってくる。もちろん値段も高いので、子どもや私の遊び道具にするつもりはない。メーカー、機種、主要ソフトについて情報を集めているうちに、半年経って、夏のボーナスが出た。

夫は会社でいやというほど使っている
ので、私のパソコン欲にはとにかく冷淡。「いまさら遅い」とか「人に聞くようなら無理」とか、憎まれ口をたくさんのも、欲しい一心で私は聞き流してきた。夫の気が向いた七月の日曜日、すかさず誘っていっしょに量販電気店でかけ、ついに一式をキャッシュで買ってしまった。

新製品の買い物は夫にも心躍るもので、接続や設定、インストールなどはしてくれた。いっぽう私は次々と図書館でマニュアル本を借りてきては攻略

していった。といたいところだが、
実は七、八月はパソコン関連エッセイ本や、ごく初心者向けの本での練習にとどまっていた、本格的にパソコンに向かうようになったのは、夏休みが終わった九月からだ。

子どもに邪魔されない時間に、インターネットやメール、ワープロや表計算の各種機能を片っ端から試していく。モニター上で使いながら覚えたり、講座に通ったりする方法もあるだろうが、私は紙のマニュアルを読んで一人でするのが好きだ。フリーズや強制終了の恐怖を味わいながらも、便利な機能があるというパソコンに「愛いやつよ」「賢いね、親切ね」と実際に語りかけてしまう。

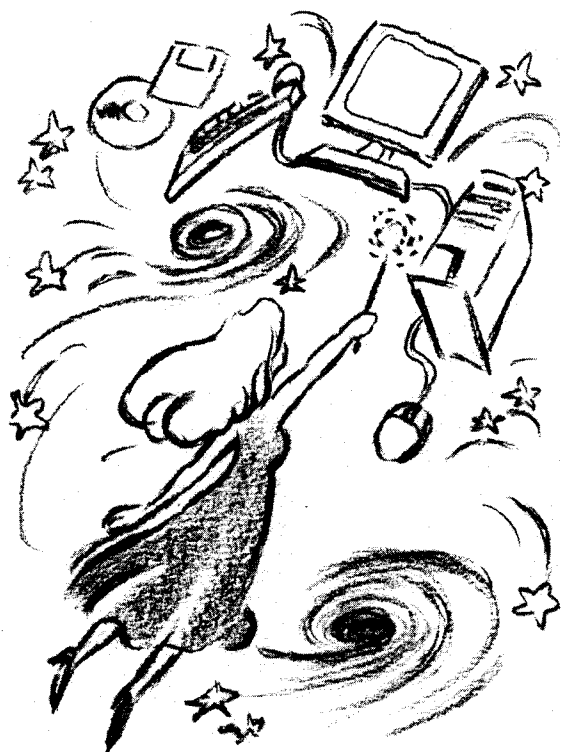
そして、P T A の配布文書を引き受ける、メールアドレスを持つ友達を探してひと通りメールを出す、子ども用にはポストベットの設定をする、テレビで見た美少年の情報をホームページでさがす、そんなこなをクリアして、今私はパソコンを自力で使いこなした

つある。

一般ユーザー用のマニュアル本には、ほぼ目を通したかな。だけど、これはなぜ？ という私の疑問に答えてくれる本が少ないと思う。日用の使用には問題ないが、なぜそうなるのか、どういう意味なのかというのが私は知

りたくなる。カタカナの用語の基本的な意味や、より効率的な使い方を知りたい。今までの家電品でも、私は意味もわからず使うことはなかった。取扱説明書をスミまで読んで使ってきた。パソコンも同じ。

何につけ資格というものに今まであ



まり興味がなかったのだが、どうもパソコンの検定向けの勉強をすることが、私の知識欲？ にかなうものだとだんだんわかってきた。そして検定は何種類もあり、講座や学校、通信教育、市販テキストと勉強方法も費用もさまざまだということも。私はいずれかの方法でパソコンをきちんと勉強し、資格試験を受けるつもりになっている。

つい最近まで、パソコン講座の話題などに無関心だったのが恥ずかしいほど、今パソコンに興味がある。うまい話はないと思うが、私の将来にも少しは使えるのではないかな。

パソコンに触れてから、世の中のいろんな現象にも合点がいく。手書きや紙の上の活字や書物や、人との直接のおしゃべりはまだまだ捨てられないけれど、パソコンはホントに便利。これを考えて改良を重ねてくれた人たちは、緻密で根気があって、工夫が大好きなんでしょうね。

私の使い方です。使っていこうと思います。

(え・西宮サキ)

ストレスとうまく付き合うQ&A

多様な心身症も本質を理解すれば恐くない



福居顯二編著
ミネルヴァ書房
本体2400円+税

あらゆる年代、性別を問わず、ストレスを受けたことがない人はいないといえるぐらい生きにくい時代になった。会社や学校に行けなくなったり、あるいは家族と折り合いが悪くなったりした時など、どうしてこのような状況になったのかと思い悩んでしまう。

本書はそんなとき、自らを理解し、対処法を考える道しるべとなる。それでも改善しない場合は専門医にかかるのがよいという。

内容は専門的であるが、一般向けにかみ砕き、わかりやすく丁寧に書かれている。また最近の社会問題となっている現象も解説しているので、精神医学に興味を持つ人にも役立つ。

(十)

各国企業の働く女性たち



藤井治枝
渡辺 峻
柴山恵美子 編著
ミネルヴァ書房
本体3000円+税

西欧、北欧の主な国々にくわえ、中国、韓国、中東諸国など十二種の国々の女性の労働条件を調査した一冊。日本の女たちが「先進国」のなかで、どれほど劣悪な労働条件を生きているのか客観的事実としてよくわかる。

具体的な表れとしての賃金を見てみよう。三〇代後半・大卒の男女賃金格差を比較してみると、日本では四七・七％。フランスでは八〇・二％、もつとも低いイギリスでも六七・一％と五〇％以上の差のある国はいわゆる「先進国」では他にはない。その他昇進、資格、職業訓練での差、年齢別労働力率の推移など、役に立つ資料が満載された力作である。

(野)

「憲法大好き」宣言



佐高信
福島瑞穂 著
社会思想社
本体1400+税

憲法改正をめざす国会内外の動きが急な中、「憲法調査会」の委員の一人、参議院議員の福島さんが評論家の佐高信と作りあげた一冊である。

この本の面白さは幅が広い。護憲を論じているだけでなく、議員になって一年半、女の手で見た議会内のさまざまな権謀術策、女性議員へのセクハラ、自公連立の裏表、マスコミの駄目さとかげん、議員ひとりひとりの論評など、ときには噴き出すような内容がぎっしりつまっているのだ。

この作品を読むと、政治がぐつと身近なものになること請合い。政治に興味をもつていてもいなくても、読んでみて失望することありません！（田）

うちへ帰ろう



デヴィット・リー・ウィルソン著
実川元子訳
WAVE出版
本体1500円+税

アメリカの六十年代に結婚した夫婦の四十年、家庭と家族の軌跡を次女の語りで進行させた小説。著者は脚本家なので映画にもなった。

アメリカの離婚率が高い。この夫婦も三人の娘とその下に一人の息子がいて、息子の六歳の時、離婚した。二十年后母親が倒れ、娘達に息子を探してほしいと言う。娘達は母親と貧しい生活を、息子は父親と豊かな生活をしていたが、生活環境がちがっていても二十年ぶりに再会する家族にはそれぞれの思いがあった。善人ばかりでハッピーエンドになるのはアメリカ映画らしいが、もう一度結婚そして家族について考えさせられる一冊だった。(村)

もうすぐ私も四十歳



岸本葉子著
小学館
本体1500円+税

今どきの三十代は若いので、三十六の私でさえ四十歳からが「大台」という気がする。「初老」にも近いような……。でも両親もまだ健在だし、どんなことが起こるのか実感としてわからない。この本は同じ年代で、シングルである著者がまるで友人と茶飲み話でもするように「こんなことがあったのよ」と日々の生活を語っていく。

「そうだよね」「結婚前は私もそう思ってた」などと著者と対話しているような気分で見つめ、自らの日々を思いを馳せる。決して実用的なハウツー本ではないが、心の友のような本だ。ありのままを見つめ、本当に必要なものを選んで楽しく生きる四十代を目指そう。(安)

がまんしないでお母さん!



渡辺美恵著
発行 ソレイユ出版
発売 サンマーク
本体1400円+税

私的な問題、ささいなこと、と思ひ込み、言葉にもせず、あきらめていたことが、妻、母、嫁、娘、つまり女であるがゆえに起きる問題なのだということを認識させてくれる本だ。

第一部では五百七十三人の女性たちのアンケートをもとに、主婦のおかれている現実がまとめられていて、女などどこかで共感する。

第二部以降は、グチのタレ流しに終わらず、なぐさめ合うだけではない、問題解決に向けての考察や具体策が展開されていて、勇気づけられる。

だれかのために存在する私、ではない私と、夫や家族との新しい関係(男尊女尊)づくりに役立つ書。(新)

私も ひとこと

百歳の本音

埼玉県入間市 土子史子（65歳）

ひとから歳を聞かれると、父はきまってる西暦で答えていた。「一九〇〇年生まれだからわかりやすいんですよ」。去年の白寿の祝いでは、好物のウナギをひ孫相手に食べていたが、さすが今夏の暑さに負けた。最後の言葉はまさに本音であった。「みんな百歳、百歳ってよろこぶけど本人はしんどいよ」

十二年間、首を長くして三途の川岸で待っていた母のうれしそうな顔が目につかんだ。

水害で六人生き埋め

愛知県春日井市 伊藤てる子

九月十一日、十二日の未明にかけて、東海地方に百年に一度という大雨が降った。

ニユースで小牧市の「〇〇さん」一家六人が、裏山が崩れ家が倒壊、生き埋め救出困難」と聞いた瞬間、体中に大きな衝撃が走った。

その家とは懇意な仲、四人は無事救出されたが、七十代のご両親が亡くなられた。夫と葬儀に参列したが、奥様のご実家には、九十五歳の実母様ご存命、辛く断腸の思いだった。

ガス警報器

東京都足立区 島村君子

夏の暑い日。窓を開けて台所で洗い物をしていたらガス警報器が「窓を開けてください」を繰り返す。私は余りうるさいので「窓は開いていますよ」と言い電源を切った。実は隣の家の台所で換気扇を回すと我が家のガス警報器が鳴ってしまうのだ。だから逆に「窓を開めてください」と言うのが正解なのである。

日進月歩の現代、ガス洩れの匂いと換気扇の煙を嗅ぎ分ける警報器を早く作って欲しい。

引越した！

東京都武蔵野市 斉藤さよみ

引越しがこんなに大変だなんて思わなかった。ほんの数メートル動いただけなのに。転勤族の妻として、何度も（時には海外まで）各地を転々とする人達の苦労が少しだけわかった。前より広くなつて、暮らしは快適。しかし問題は、インターネットや収納研究に時間をかけすぎてしまうこと（楽しいんだ。コレが）。お前のやりたい仕事は？ そんなことはつかやっついていいの？と我身を叱咤している。

気になる入試

神奈川県中郡 石井しのぶ（41歳）

中三の子供がいると、やはり来年の高校入試が気になって落ち着かない。私が中学の頃神奈川県では中二で行なうア・テスト（9教科×50点）の結果が内申として重要視されていて、県立高の入試で不合格になる子はほとんどいなかった。あの頃、ア・テストに対する批判は多くあったが、今考えると、志望校を決めやすく、入試にも気楽にのぞめたあの制度も悪くなかったのだと思えるのだが……。

お礼のひいじい

森 茉美

太田知子様、はげましの言葉をありがとうございます。いろいろな場所で同じような体験をされている方がいるのだと、改めて知らされました。そしていままで心から薄れることのなかった、あの孤独感が少し消えていきました。気負いすぎることなく、少し力をぬいたら、続けていけそうなき持ちになれました。戦う同志の皆様、これからも共にがんばりましょう。

七十の挑戦?

山形県山形市 加藤智恵子

退職時脳ミソの活性化にと日記帳、パズル等を娘に持たせられ、今夏はPCまで貰った。自分にも出来ないはずはないと張り切ったが齡七十、脳の萎縮激しく回転してくれない。

このたび山形に住む及子の小学二年生の孫達が「自分のマチ再発見」のホームページを作った(十二月末迄)。しかしそれを聞くことすらできないでいる。今はひたすら東京都助っ人娘が年末に来るのを待つばかりである。

宿題は手伝わない主義

宮城県岩沼市 横山のり子 (37歳)

最近、夏休みの宿題も少なくなる傾向で、小学生の息子達の場合「ドリル数枚と自由作品ひとつ」程度。私は声はかけるが、手は出さない。自分は子ども時代、散々親に手伝わってもらったが、手伝わってもらって素晴らしい作品ができて嬉しくなかったから。

息子が自力で書いた作文が先生にほめられたと報告してくれた時の彼の輝いた顔。親の手が加わっていたら見られなかっただろう。

おばあさんの行方

東京都文京区 トト安田

八十二歳のおばあさんの介護認定通知が届くと待ってましたとばかりに、同居の息子さんがその通知書を持って施設へ入る手続きをされました。夫である九十歳のおじいさんは、四か月前にこの息子さん夫婦の強い勧めで既に入所されています。現在、週三回おばあさんの介護に伺っています。この息子さん夫婦にとって、父親とは、そして母親とは何だったのでしょうか?

おしゃべりに注意!!

新潟県長岡市 大原清子

土曜日の昼下がりに、何十年かぶりの同窓会の帰り、乗客まばらな山手線。東京から上野まで、友との短い二人旅、ついおしゃべりに熱が入っていた(のだろうと思う)。

「うるさい!! 静かにしろ」

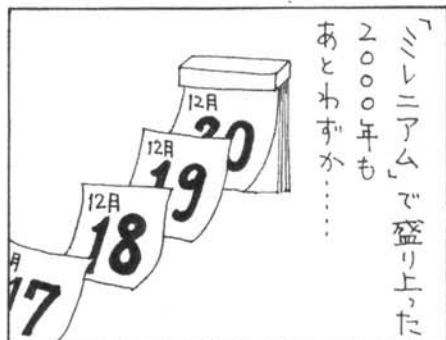
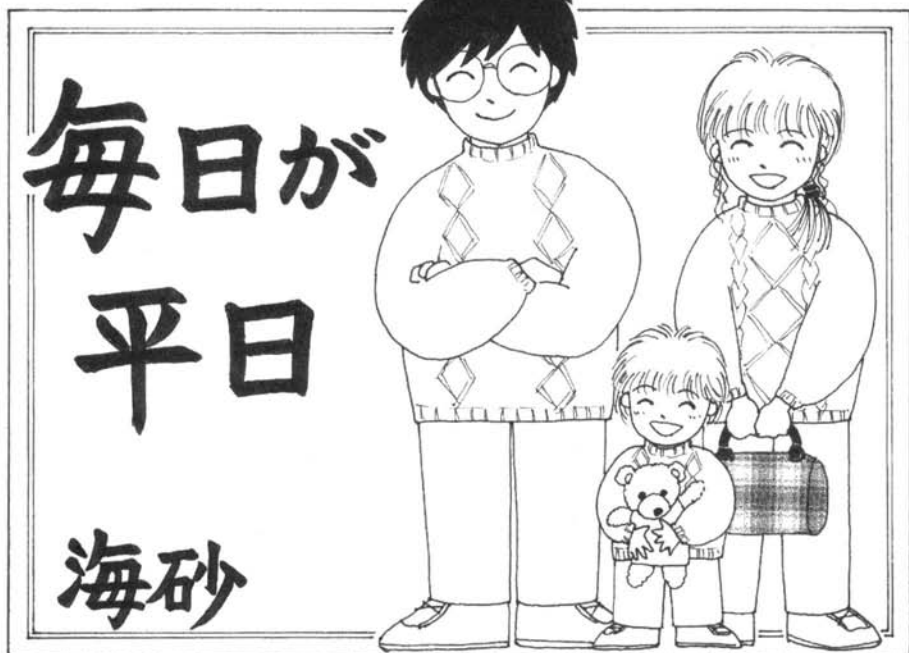
何が起きたかさえわからない。向かいの隅で辞書のようなパソコンの本を読む二十歳前半のスーツ姿の若者に私達がどなられた。おばあさんの苦い思い出。

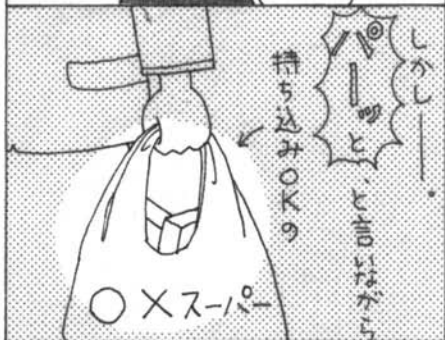
針仕事は家事じゃない?

岩手県紫波郡 小笠原安紀子

二八六号「ゆれうごく主婦像」を読んで気づいた。「何を家事と思うか」の中に裁縫が入っていない。針仕事はもはや家事ではないんだなあ。そういえば今年、娘が通う幼稚園のバザーで手作り作品コーナーに、雑巾を出す人が増えた。苦手な人が多くなったのだろうか。

「針仕事は得意な人が趣味や仕事で行うもの」という認識に変わってきているのだろうか。





情報 コーナー

「ミセス裕子の恥さらしな日記」 子育てはヘンタイじゃなくて大変だ」

西尾裕子著

子育て日記を本にまとめた。長男が原因不明の高熱で入院したこと。その直後に髄膜炎に罹ったこと。次男が二歳になってもまだしゃべらないこと。反抗期、成績不振、九歳の壁、などなど。「わいふ」に掲載された「アトピー日記」「おねしょ戦争」「発熱(熱性けいれんの後に)」も入っています。

ほんと、子育てってヘンタイ。じゃなくて大変!

ぜひ、買ってください!

▼定価七〇〇円+送料三〇〇円

▼連絡先 梶川真理子

〒48-0052 名古屋市中白区

井口二丁目一〇一

FAX (〇五二) 八〇一—二七二一

Email qwe@spice.or.jp

羽生櫨子さんの新しい詩集

「地球は貧乏ゆすりをする」

ああ 地球は太鼓で

風やなんかがいつもトンと

太鼓を鳴らしているのが

さびしいような

地球がいじらしいような

つまりでんでん太鼓を

あきないでいつもならしている

あかちゃん風?

宮澤賢治の詩を一度読んだら、

彼以外の人はだれ一人書けない

その声音に取りつかれてしまう

のですが、羽生さんの詩もそう

した魅力のあるもののひとつ。

発行所・武蔵野書房

TEL 〇四二—三三六—〇二〇一

FAX 〇四二—三三六—八八六二

へ直接ご注文ください。

一八〇〇円・七六ページ

井上公三さんのカラーの挿し

絵のはいった美しい詩集です。

パソコンで年賀状を作りま

せんか

誰でも作れる無料講習会

全くパソコンに触ったこと

ない方でも大丈夫。この機会に

体験してみてください。どなた

もご自分で作った年賀状をその

日にお持ち帰りになれます。

日時 十二月八日、九日

午後一—五時(各日十名限定)

場所 秋葉原ラブロス内アカ

デミーサイト(JR秋葉原より

徒歩三分)

問合せ先 クラブネット

TEL 〇二〇—〇一一—八九〇

申込み先「わいふ」編集部

TEL 〇三—三三六—〇四七七

「少年犯罪はなぜ起きるか」

シユタイナー教育理論からの提言

幼児・児童教育のゆがみを正せ!

著者 大阪隆夫

子どもの幸せを願わない親は

いない。子どもの幸せを願うか

らこそ、勢い幼児のうちから英

語の初歩を学ばせたり、算数の

勉強や、最近ではキーボードにも

触れさせたりと、早期知的教育

に力が入る。しかし、それがど

んなに子どもの成長をゆがめ、

病的人間を作り出すことにつな

がっているか。それは凶悪な少

年犯罪や不登校・閉じこもりに

も深いかわりがある。子ども

の本当の幸せを願う立場から、

幼児・児童教育の真の在り方を

述べた本書をぜひ一読下さい。

▼送料とも五百円

▼問い合わせ先 〒241-0801

横浜市旭区若葉台一の三の一四

一〇

TEL 〇四五—九二—四八五五

『母と子』12月号

定価500円/送料68円

〈今月の視点〉 教師への締めつけ

教師を襲う二重の桎梏

— 注目される全日本教職員組合の見解と提起 — 平湯紘一

◆アメリカ便り 日本人としてのアイデンティティの継承 山本由美

◆【私は獣医師】 ハムタローのはなし 渡 真紀

◆幼児と遊ぶ りんごの木の運動会 有吉有巳子

◆子どもの権利条約を考える 権利と義務は表裏一体

— キリスト教社会においては自明のこと — 山田雅康

◆メディア時代のウロウロ記 携帯電話のメール送受信 柳 史子

◆国際交流シリーズ 皆が同じ地球人になることが願い

— 神戸のジャーマンバーカリーのお店から —

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125

母と子社

女たちの情報紙
ふえみん
f e m ♀ n
婦 人 民 主 新 聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんぱいはたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうづき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなただのいけん
おんなという
ちから。

倉丘以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府 大阪市北区中崎西3-1-5
TEL 03(3402)3244.3238 TEL 06(371)2429
FAX 03(3401)3453

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

世の中に？を
もち始めた
男たちにも。

草の根は
伸びつづける。

新聞代 (送料込)
1ヶ月 750円
3ヶ月 2,250円
6ヶ月 4,500円
1年 9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

ふえみん 婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

本文

[illegible]

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくペー

ジです。あなたの声をお待ちしています。
投稿には、右の原稿用紙をご利用くださ
い。

●タイトル、住所、氏名は一行めに。もし、

二〇字を超える場合には横目にこたわらず、小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

市

谷の分室と飯田橋の編集部
の距離は近いようで遠い。二つの事務所を往復しているのはもっぱら田中編集長。時には「わいふ」の發送用荷物を運ぶだけに車で編集部へ来ることもある。ハラハラドキドキの路上駐車をしながら……。忘れていましたがパワーあふれるボス二人は古稀でしたネ。仕事場を一つにする時期かしら? (野村)

い

まかヌーで川下りするの
がものすごく楽しい。以前は瀬の音がザーザー聞こえてくると、何とも言えない不安が胸をよぎり、うまく越えられなかじうかドキドキしていた。今年天竜川を下ったときには、若い仲間がひやかすほど、楽しそうに漕いでいたらしい。出来るだけ大きなウエーブを越えたいとカヌーを漕ぐ。ニコニコ顔で

母

漕いでいると言われる。(水落)
は本家の八人兄弟の三女で、体が弱く家事などせずに女学校にだけ通ったそう。

苦勞するから長男の所には嫁がないと決めていたと言う。困った事があるとすぐに実家に帰る。五十二歳で夫を亡くした時も帰ってしまった。それから三十年、クラス会にボランティア、サークル活動、詩吟、コーラスと楽しんでたが、痴呆による問題行動が増えてきた。(望月)

友

人の高三になる息子が、
早々と推薦で大学が決まった。その息子が言うには「お母さん、僕の机、もうじやまだから捨てていいでしょ」。えっ、これから大学生になるのに机を捨てるなんて……。[勉強なら図書館でも、ファーストフードの店でもできるもん]。あゝあ、これから四年間、何が起きる心配でたまらないと彼女は嘆くこ

道

としきりである。(成井)
路に面した一階の仕事場には、窓ガラスを通していろいろな音が聞こえてくる。最近、道ゆく人の会話に変化が……。母親の話に子どもからの返事がない?? それは犬の散歩だった。飼い主が自分のことを「お母さん」と言っていた!

次は若い女性が自分の考えを語っているのに、彼氏のあいづちが聞こえない。これは歩きながらの携帯電話だった。(菊池)

秋

の栗駒山麓の紅葉は息を
のむほど美しく、まさに錦繡の世界だった。点在する秘湯も、ほどよい熱さで、じんわり肌にしみる。四肢を伸ばして思いきり寛いだ。

が、山間部ではカメムシが異常発生し、つぶすとかく臭い。夜中、宿の主人がほうきで一心不乱にムシを掃き集めていた。経営者は大変だ。(山本)

ケ

アハウス(自由契約の福祉老人ホーム。厚生省が十万人分の建設を目指している)を見に行つて、いやになつたと今号の「あなたへスマッシュ」に書いている方あり。しかしケアハウスもいろいろ、我々が見たのはほとんどの人がそこから通勤していて、ホームバーがありお酒を楽しみ、庭作りをしたりとなかなか面白かった。温泉付きのものもある。(和田)

た

くさんの方が「不眠」の直し方を教えてくださつてありがとう! おかげ様ですっかりよくなりました。やっぱり眠れなくても昼間ムリして起きていて働く、というのが一番よかったみたいです。全然きかなかつたのはハーブティ(カモミールティ)、熱い塩湯に入ること、ぬるいお風呂に長いこと入るetc……。でも直つたのだからメデタイです。(田中)

「ファム・ポリテイク」より

●最近物足りなく思っているのは、自分たちが反対する法案を与党が出してくると、「審議拒否」というかたちで野党が抵抗することです。こんなやり方は、外国でもあるんじゃないか。

●参議院の比例区の選挙制度を個人と党の二本立てにする、という件でも野党はこのかたちで抵抗しましたが、どっちみち数の論理で押し切られるのは最初からわかっているのです。どうせダメとわかっているのだから、審議の片棒を担ぐよりボイコット、と思っているのですが、それよりその方式のどこがどうまずいのか、それを実施するとどういうことになるのか、外国の例をひいたり、あるいは少しでも手直しできそうな部分について、ねばり強く会議の席上で論議を戦わしたらどうなのでしょう。

●そのときの戦いぶりで、あつぱれだ！と野党に民心が集まらないとは言えませんが、ワンパターンの抵抗には？？？です。

NMS研究会より

●「戸塚ヨットスクール」を見学に行ってきました。いろいろな意味で勉強になりましたが、戸塚ヨットスクールの実践は、生まれてから一度も体を張って生きる極限状況も、我慢する体験さえない子どもたちを、自然のなかでの極限状況にたたき込むことによって、生きることの充実感を教えるもので、かなり有効であると思います。

●戸塚氏によると、来ている少年たちは一言で言えば三歳の子どと同じ、幼児の心性しか持っていない、と。受講生十余人。みなすごく弱々しく見えました。

●ただし戸塚氏は「傷害致死」で懲役六年の有罪の身、現在上告中。子どもをスクールで「殺された」親にしても一生懸命育てた子が「引きこもり」や「家庭内暴力」になる悲劇のタネは、乳幼児期に蒔かれているのですが、戸塚氏もそれについては何ひとつ知らず、聞く耳もない人でした。

老人ホーム情報センター便り

介護保険法がスタートして七か月経過した。ケアマネージャーの話を聞くと、サービス料の一割負担が出来ないため必要なサービスはカットしている高齢者が多く、つらいと嘆く。

限られた費用負担しかできないと、介護サービスが必要になっても、介護サービス量をその分少なくしなくてはならない。必要なサービスがすべて取り入れられないので、ケアプランを作るのに苦労していると言う。

また在宅介護サービス事業者は、参入する際試算したサービス収入が確保できず、半期は赤字決算を計上した。

在宅介護は保険方式でいいのだろうか。税方式のほうが望ましいような気がする。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします（有料）。

電話でご予約下さい。

TEL〇三三三三五 一二八五四

募集します

特集テーマ

二八九号(二〇〇一年四月一日発送)

の特集テーマは「私の職業」です。

「わいふ」では再就職問題をはじめ、女性の仕事についていろいろ載せてきました。ご自分の職業生活について書きたいことのある方は、まだまだた

座談会 私も言いたい

二八九号のテーマは「わが家の教育法」です。子どもたちの思春期には、親たちが「いままでの自分の子育ては何だったの!」と嘆息することばかりが起ります。でも親たちは本当に一生懸命に子育てをしているのです。そ

私の意見・あなたの意見

二八八号のテーマは「石原慎太郎東京都知事について」です。

都知事に就任して以来、いろんな意味で注目のマトになっている石原氏。

誉める人けなす人さまざまで、いわゆる「進歩的」マスコミでは何かと批

くさんいらつしやるのではないかと思います。

どんな職種でも結構です。あなたのやっていたらつしやる職業について、その内容、どんな経過でその職業になったのか、日々の職業生活、その難しさや楽しさなどを、存分に語ってください

して子育てをするとき、何の方針もないう育てるわけではありません。

「家はスパルタ式でやった」「いやわが家は子どもの自主性を重んじた」「挨拶だけはしっかりしつけた」など、いろいろな方針でやっていらしたことでしょう。成功・不成功を問わず、反

判的的になっていますが、産経新聞などには大いに支持しています。でも私たち「ふつうのひと」はまた、自ずから違う意見を持っているのではないでしようか。

少し危なっかしいけど、やっぱり知事はこれぐらいでなきゃあ、と思つて

いませんか。

ただし過去についていた職業の思い出ではなく、現在ただいまやっていらつしやるお仕事について、具体的に語っていただきたいのです。

字数 四千字前後

締切 二〇〇一年 二月十日

省を含めてあなたの教育法について、語っていただけませんか。

日時 二〇〇一年 一月十二日(金)

二時より

場所 「わいふ」分室

申し込みは電話で十二月二十日まで。

いる人、いやあればやはり危険だと思つてゐる人……。さまざまだろうと思いますが、どうか彼についてあなた自身のご感想、ご意見をお寄せください。目のさめるようなのを期待しています。

字数 千字前後

締切 二〇〇〇年 十二月二十日

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。

投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆「グランド」わが家の歴史写真

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをこらんとください。

「一六〇〇字のコラム」

(このコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆スバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦労話を。

◆うこれに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

「八〇〇字のコラム」

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返られている人、体験談を。

◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月・定価を書くこと。本文は七六八字。

「四〇〇字のコラム」

◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直な意見をお願いします。

その他

◆私もひとこと (一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

◆わいふネット (一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三二四行にまとめて)

投稿の

◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いします)
- 他誌との二重投稿はお断ります。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める
ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名	ペンネーム・匿名	年齢
タイトル	住所	
本文……	会員登録号	
	本名	
	電話番号	

なくても可

(1)

ページを明記
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を
載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

●あて先〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五―二六

わいふ編集部

投稿のきまり

編集集一だより

◆今号の特集テーマは大当りで、皆さん語りたいことが大いにあったわけです。三十一ページの大特集になりました。

近ごろ男性の間で、家庭回帰の風潮が盛んになってきているようですが、子供大好きパパというか、今までの母親のお株を奪うような、子育てが生きがいの父親が現れたのです。特集投稿を読んで、それを一ばん目新しく感じました。

◆「おすすめの一冊」は、たびたびご投稿がありますが、書評のコラムなどに大い読書感想文なのです。それでなかなかお載せできず、次回から感想文を募集すること

にしました。「読んでよかった」という別のコラムを設けます。「投稿のきまり」をごらんの上、奮ってお寄せ下さい。

◆「わいふ」は今まで、昔ながらの手作りで、編集作業、版下作りをして印刷製本という方法でやっていましたが、ようやく時流に乗って二八六号からDTP編集に踏み切りました。なれないこととて進行の推移がつかみにくく、だんだん時間が押し詰まり、あわてたために校正ミスがたぐさん出てしまいました。ご迷惑をおかけした方が多く、お詫びのしよつもありません。

どうぞご容赦ください。

◆年末ですので切はまた五日早まり、十二月二十日になります。お忙しいところ、大へんでしょうがぜひ多くのご投稿を。

編集部が移転します

移転といっても、元の場所に帰るのです。現在の分室の場所に、もともと「わいふ」はあったのですが、建て替えなどの事情のため編集部が別になりました。

しかし二つに別れているのはやはり大変不便です。建て替えも済んだし地下鉄大江戸線も近くに通りましたので、再び一つにまとまることになったのです。原稿の送り先が変わります。ご注意ください。

新住所・〒162-0062 東京都新宿区市

谷加賀町二一五二六

電話、FAX番号は変わりません。

移転は十二月半ばの予定です。

購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

わいふ◆287 (隔月刊)
●発行日 2001年1月1日
●編集 編集集
●定価 620円(本体590円)
●年間購読料 4224円(送料共)
●印刷 平河工業社
●発行所 (株)グループわいふ
〒162-0815
東京都新宿区筑土八幡町
1-3-201
電話 (03) 3260-4771
FAX (03) 3260-4773
●郵便振替 00150-3110430
加入者名 わいふ編集部



ew



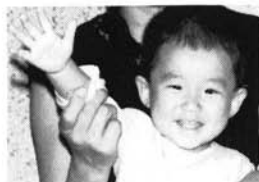
othering



ystem

子どもに「生きる力」をつける子育てを！

子育てのほんとうの結果が見えてくるのは
「思春期」です。でも困ったことに、子ども
の幼いときには、何が正しく、何が間違っ
た子育てなのか、さっぱり分かりません。
だからこそ、学ぶ必要があるのですよね。



子育ては
NMS !!

▼子育てで家にいるようになってから、学校時代は友達づくりがうまかった私なのに、友達がつくれなくなっていました。考えてみたら、周囲のお母さんたちで、子育て以外の話をしてくれる人がいないですね。

▼十歳くらい上の、親切な先輩ママの善意の忠告にはイライラします。結局は子育てがかわって幸福な毎日を送っている人には、私たち若い母親がどんなに辛い子育てをしているかわからないので

す。お説教はもういいんです！

▼公園に子どもを遊ばせに連れていくのですけれど、うちの子は強くて、他の子のおもちやをもぎとったり、転ばして泣かせたりしてしまうのです。その度にとんでいって、子どもをなだめたり、あやまったり。なんだかとても疲れてしまいます。黙っているほうがいいのでしょうか。

よい子育てに一番必要なこと、それはお母さん自身が幸福であることです。そのために何より必要なのは仲間づくり。

公園育児の問題点、先輩ママのうまい利用のしかた。どんなかたちの場をつくったらラクに楽しく子育てができるのか。そのためにNMSの知恵をぜひ利用して下さい。

資料請求は 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町 2-5-26 (わいふ分室内)
NMS研究会へ。 ☎ 03-3260-5500 FAX 同 3260-9398

定年、気がつけば二人旅

吉武輝子著 ◆夫と妻 共歩き人生への再出発 「定年離婚」にならないうちに、人生の長い午後をどう過ごすか。子育て後、定年後の新しい夫妻関係のつむぎ方のヒント満載。二〇〇〇円



介護保険最前線

◆日独の介護現場の取材から 日本に先行して実施されたドイツの介護保険の実情と、導入に混乱する日本の現状を丹念な現場取材を中心に書き下ろす。二二〇〇円

斎藤義彦著

新・介護保険総点検

川村匡由著

◆各制度はこう変わった 利用者、施設、病院、社会協議会など、それぞれの立場からみた介護サービスの变化と課題。新データ満載の待望の改訂版。二四〇〇円

倒産する老人ホーム

しない老人ホーム

わいふ編集部編 ◆安全確実な選び方、かしこい消費者としての有料老人ホームの選び方を紹介。一八〇〇円

いま注目のリハビリの専門家の仕事を紹介！ シリーズ最新巻

⑤ 理学療法士まるごとガイド

日本理学療法士協会監修／資格のとり方・しごとのすべて 福祉・医療の現場で幅広く活躍するリハビリテーションの専門家の仕事をわかりやすく紹介。一五〇〇円

⑥ 作業療法士まるごとガイド

日本作業療法士協会監修／資格のとり方・しごとのすべて 日常生活動作の訓練や障害を補うため新たな能力を開発する指導を行う専門家のすべてを紹介。一五〇〇円

まるごとガイドシリーズ 好評既刊書 各二二〇〇円

① 社会福祉士まるごとガイド

日本社会福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

② 介護福祉士まるごとガイド

日本介護福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

③ ホームヘルパーまるごとガイド

井上千津子監修／資格のとり方・しごとのすべて

まるごとガイドシリーズ姉妹書 好評発売中！

ケア・福祉のしごとまるごとガイド

田端光美監修 だれにでもわかる分類で、いま注目の福祉の仕事を紹介する98の職種・52の資格。一五〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>